

## 第2章 モニター調査結果

### 1. 調査実施方法

#### (1) 調査概要

- 調査名称 多様な選択を可能にする学びに関する調査
- 調査方法 インターネット・モニター調査(楽天インサイトのモニター及び回答画面を活用)
- 対象 国内に住む22～59歳の男女  
※現在学生であり、過去に学校を離れて働いたことのない人を除く
- サンプル数 6,000人
- 実施期間 平成30年12月28日(金)～平成31年1月9日(水)

#### (2) 調査方法詳細

##### 調査対象

- 本調査のテーマが社会人の学び直しであることから、調査対象の年齢幅を22～59歳とした。
- 大学院博士課程等に進学している場合もあることから、現在学生であり、過去に働いたことのない人は対象から除いた(在学しながらのアルバイトについては、働いたことがあるとはしない)。

##### 調査方法

- 調査実施は二段階で行っており、事前調査として現在の就労状況を尋ねた上で、「学生」と回答した人には過去の就労経験を尋ねた。
- その結果と回答者の年齢を加味し、上記の調査対象に該当する人のみ本調査を実施した。

##### 標本割付

- 以下の条件に基づき、6,000人を割り付けている。
  - ①男性・女性で3,000人ずつとした。
  - ②20～50代の10歳刻みの年代別に同数とし、性別・年代別に750人とした。
  - ③現在の居住地を次の地区に分類し、それぞれ同数とした結果、性別・年代別・居住地区別に75人とした。

図表1 居住自治体と居住地区

地区	都道府県
北海道地区	北海道
東北地区	青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県
北関東地区	茨城県、栃木県、群馬県
南関東地区	埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県
中部・北陸地区	新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県
東海地区	静岡県、愛知県、三重県
近畿地区	滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県
中国地区	鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県
四国地区	徳島県、香川県、愛媛県、高知県
九州地区	福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

④文部統計及び文部科学統計を参考にして、性別・年代別に大学進学率を以下のように設定し、性別・年代別のサンプルを「大卒未満」、「大卒以上」に区分した。

※ここでいう「大卒以上」は、最終学歴を尋ねる設問で「大学(文系)」、「大学(理系)」、「大学院(文系)」、「大学院(理系)」を選択した場合に該当し、「短期大学」は含まれない。

図表2 性別・年代別の大卒未満・大卒以上の割付条件

	大卒未満	大卒以上
男性20代	4割	6割
男性30代	5割	5割
男性40代	6割	4割
男性50代	6割	4割
女性20代	5割	5割
女性30代	7割	3割
女性40代	8割	2割
女性50代	9割	1割

### (3)回収サンプル

○調査によって回収されたサンプルの割付は以下のとおりである。

図表3 性別・年代別・居住地区別のサンプル数

単位：人

		全体	北海道地区	東北地区	北関東地区	南関東地区	東海地区	中部・北陸地区	近畿地区	中国地区	四国地区	九州地区
全体		6,000	600	600	600	600	600	600	600	600	600	600
性別	男性	3,000	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300
	女性	3,000	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300
年代	20代	1,500	150	150	150	150	150	150	150	150	150	150
	30代	1,500	150	150	150	150	150	150	150	150	150	150
	40代	1,500	150	150	150	150	150	150	150	150	150	150
	50代	1,500	150	150	150	150	150	150	150	150	150	150
性年代	男性20代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	男性30代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	男性40代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	男性50代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	女性20代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	女性30代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	女性40代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75
	女性50代	750	75	75	75	75	75	75	75	75	75	75

図表4 性別・年代別・学歴別のサンプル数

単位：人

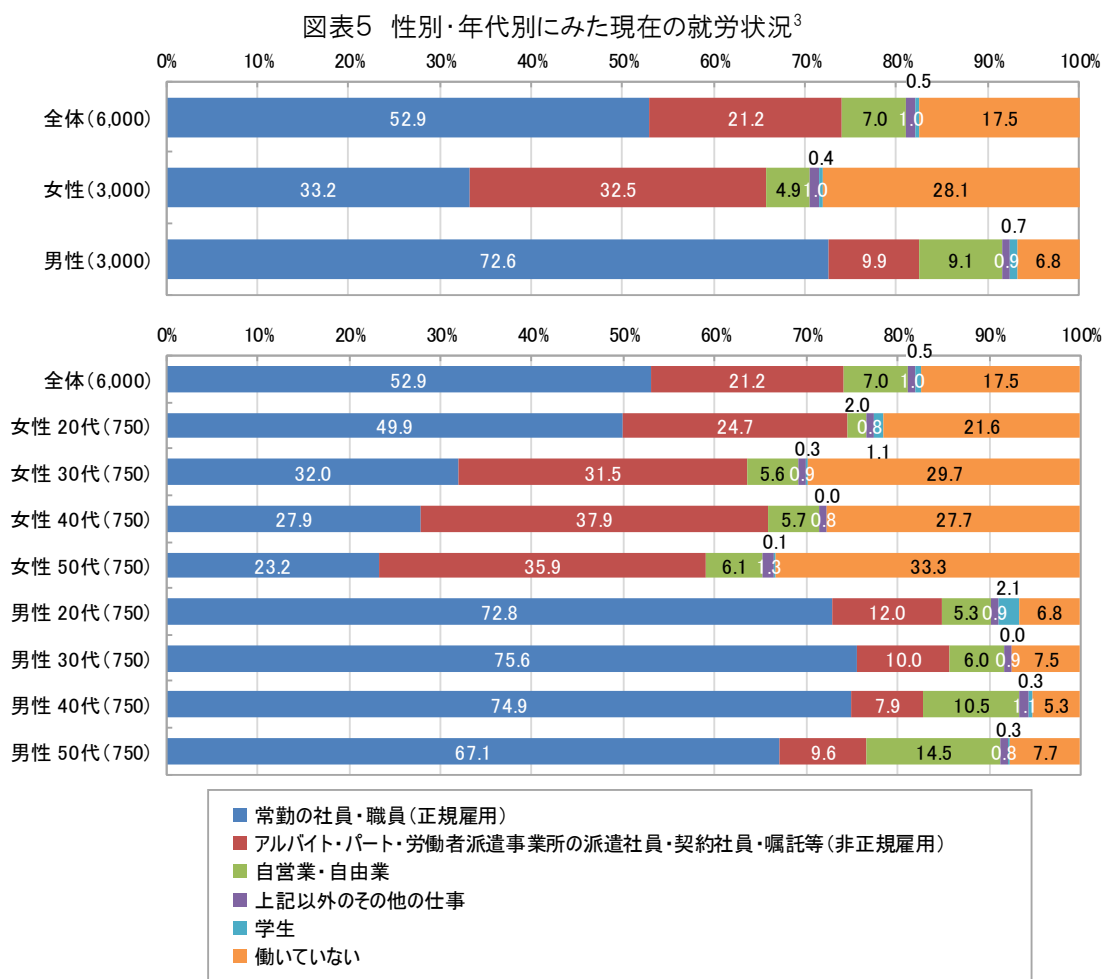
属性		全体	大卒未満	大卒以上
全体		6,000	3,708	2,292
性別	男性	3,000	1,542	1,458
	女性	3,000	2,166	834
年代	20代	1,500	664	836
	30代	1,500	890	610
	40代	1,500	1,036	464
	50代	1,500	1,118	382
性年代	男性20代	750	290	460
	男性30代	750	368	382
	男性40代	750	443	307
	男性50代	750	441	309
	女性20代	750	374	376
	女性30代	750	522	228
	女性40代	750	593	157
	女性50代	750	677	73

#### (4)回答者について～就労状況・最終学歴～

##### 就労状況

○働いている(有償労働をしている)人は女性で71.6%、男性で92.5%である<sup>1</sup>。女性では正規雇用(「常勤の社員・職員(正規雇用)」)と非正規雇用(「アルバイト・パート・労働者派遣事業所の派遣社員・契約社員・嘱託等(非正規雇用)」)がそれぞれ33.2%、32.5%である<sup>2</sup>。男性の非正規雇用は9.9%である。

○年代別に働いている(有償労働をしている)女性の割合をみると、20代が77.4%で最も多い。



<sup>1</sup> ここでいう「働いている(有償労働をしている)人」は、図表5中の「常勤の社員・職員(正規雇用)」、「アルバイト・パート・労働者派遣事業所の派遣社員・契約社員・嘱託等(非正規雇用)」、「自営業・自由業」、「上記以外のその他の仕事」の割合の合計である。

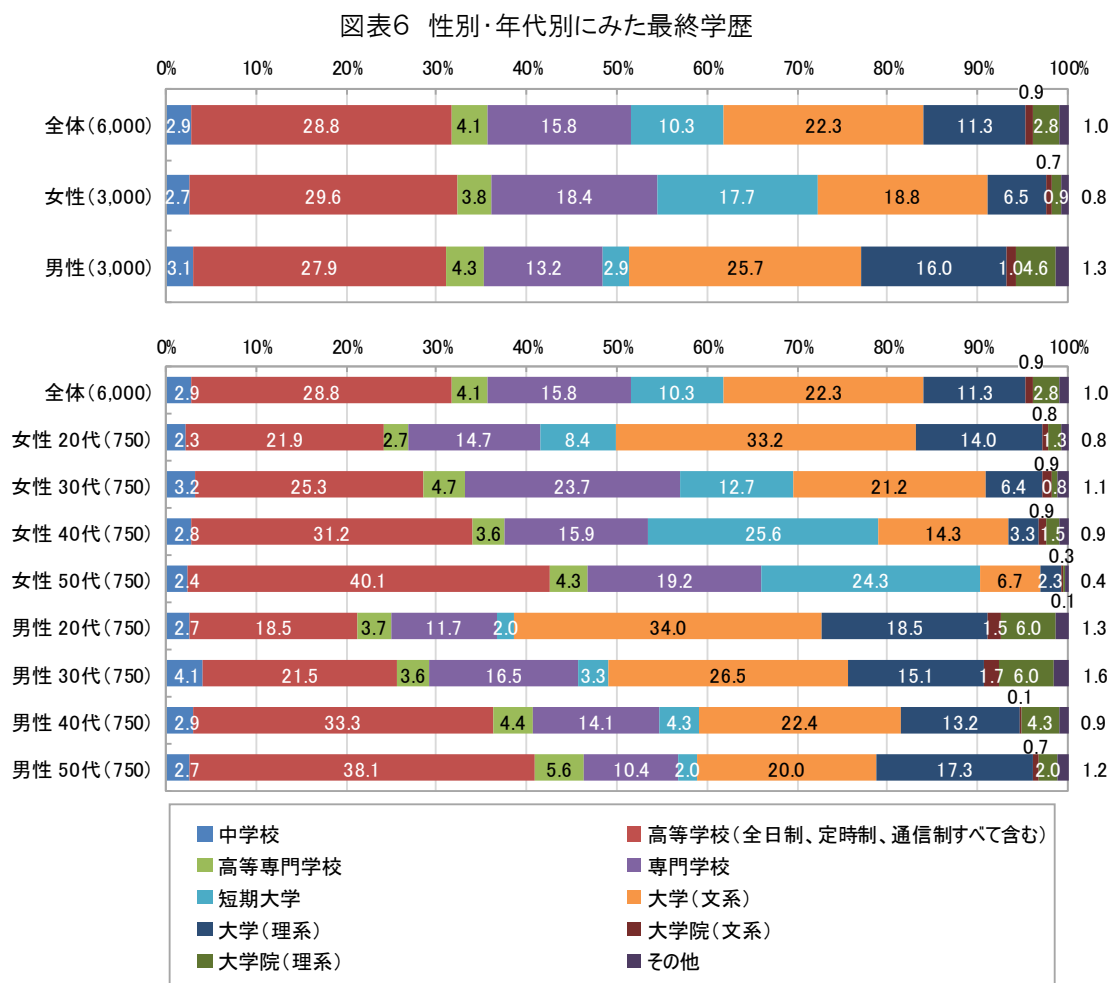
<sup>2</sup> 以後、図表中の「常勤の社員・職員(正規雇用)」は「正規雇用」、「アルバイト・パート・労働者派遣事業所の派遣社員・契約社員・嘱託等(非正規雇用)」は「非正規雇用」と表記する。

<sup>3</sup> 図表中の数値は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計が100%にならない場合がある。

## 最終学歴

○最終学歴は、男女とも「高等学校」(「高等学校(全日制、定時制、通信制すべて含む)」)が最も多く、それぞれ女性29.6%、男性27.9%である<sup>4</sup>。

○年代別にみると、女性では20代で「大学(文系)」が33.2%で最も多いが、その他の年代では「高等学校」が最も多い<sup>5</sup>。男性については、20代・30代で「大学(文系)」が最も多く、それぞれ34.0%、26.5%である。



<sup>4</sup> 以後、図表中の「高等学校(全日制、定時制、通信制すべて含む)」は「高等学校」と表記する。

<sup>5</sup> 図表6にあたる設問では、特に「文系」、「理系」の用語を定義していない。

## 2. これまでの育ち・進路選択

### (1) 好きだった科目

【ポイント】 ■女性と男性で中学生の頃、高校生の頃に好きだった科目には違いが見られ、女性では国語や英語が、男性では数学や理科、社会が好きだという割合が多い。

■ただし、高校生の頃に理科が好きだったという女性は若い年代ほど多くなっている。理科に対する女性の意識の変化が見られる。

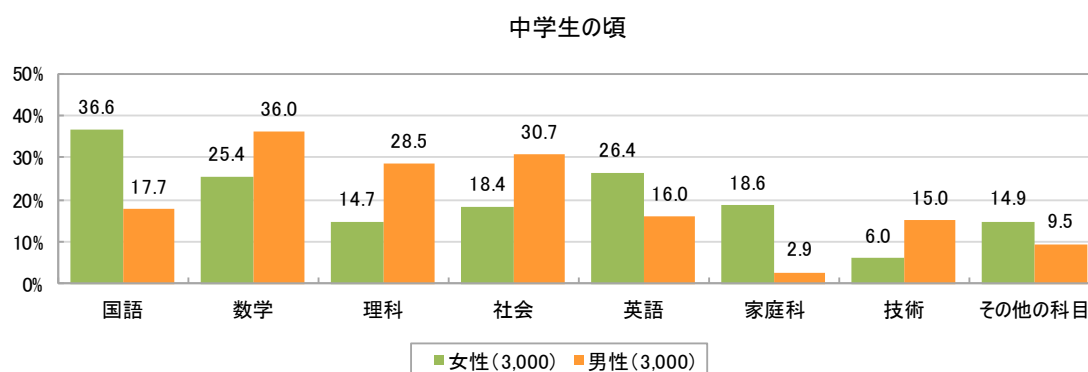
#### 好きだった科目

○中学生の頃に好きだった科目を男女で比較すると、女性の方が割合の多い科目は、「国語」(女性36.6%)、「英語」(女性26.4%)、「家庭科」(女性18.6%)である。

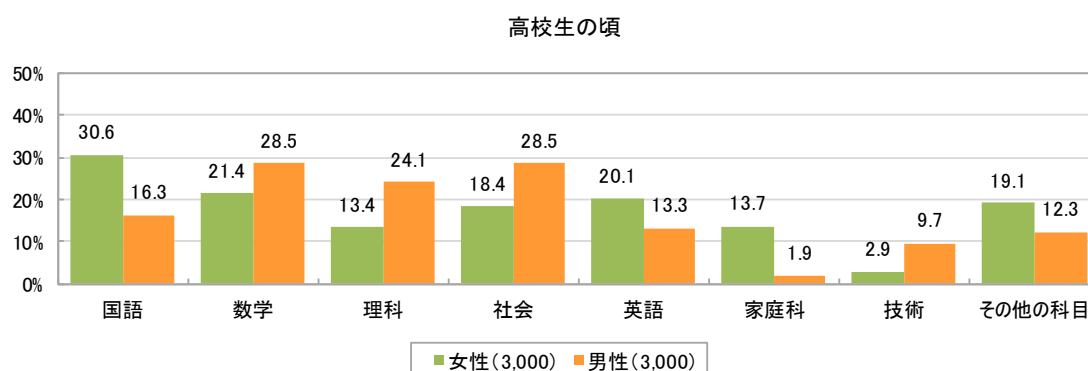
○男性の方が割合の多い科目は、「数学」(男性36.0%)、「理科」(男性28.5%)、「社会」(男性30.7%)である。

○高校生の頃に好きだった科目についても同様の傾向が見られる。

図表7 性別でみた学生の頃に好きだった科目



図表8 性別でみた高校生の頃に好きだった科目<sup>6</sup>

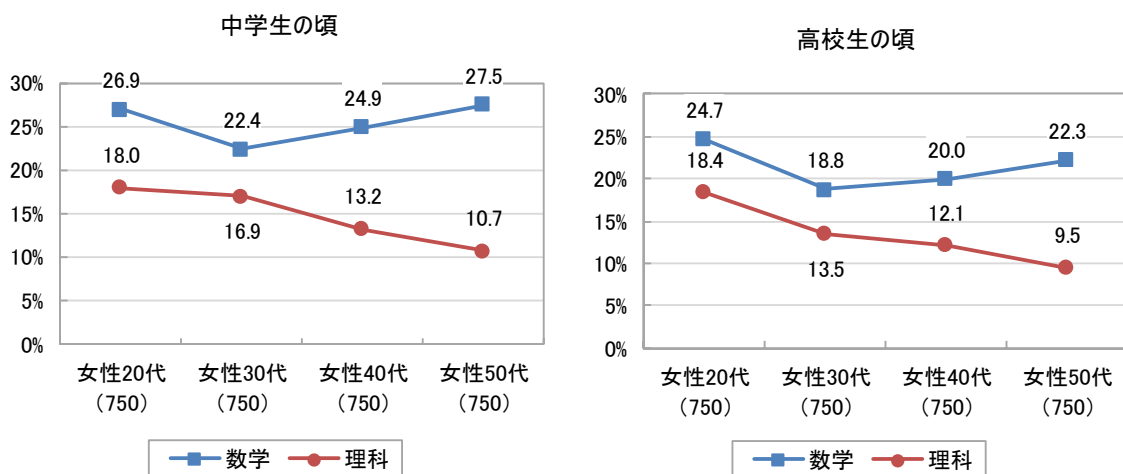


<sup>6</sup> 選択肢には、図表中に記載のある他に「高校へ進学していない」があり、最終学歴に応じて選択できるようにしている。ただし、図表では割愛している。図表9の高校生の頃も同様である。

## 年代別にみた理数系が好きだった女性の割合

○年代別に「理科」が好きだった女性の割合をみると、中学生・高校生のいずれの時期においても20代が中学生当時18.0%、高校生当時18.4%で最も多い。また、若い年代ほど割合が多い。

図表9 年代別にみた数学・理科の好きだった女性の割合



## (2)進路選択で重視した点

【ポイント】 ■高校以降の進学に際して女性は「自分のやりたいこと」と「就職のための資格」を重視する傾向が見られる。男性は「就職のために有利であること」を「自分のやりたいこと」と同程度に重視する傾向が見られる。

■女性は専門学校や大学(理系)では資格取得が重視されているが、その他の学歴である場合は自分のやりたいことを勉強できることが重視されており、男性の方がより就職志向であると同える。

■進路選択や働く上でのイメージへ影響については、小・中学生の頃、大学進学時、就職時のいずれにおいても同性の親からの影響を受けている傾向が見られた。

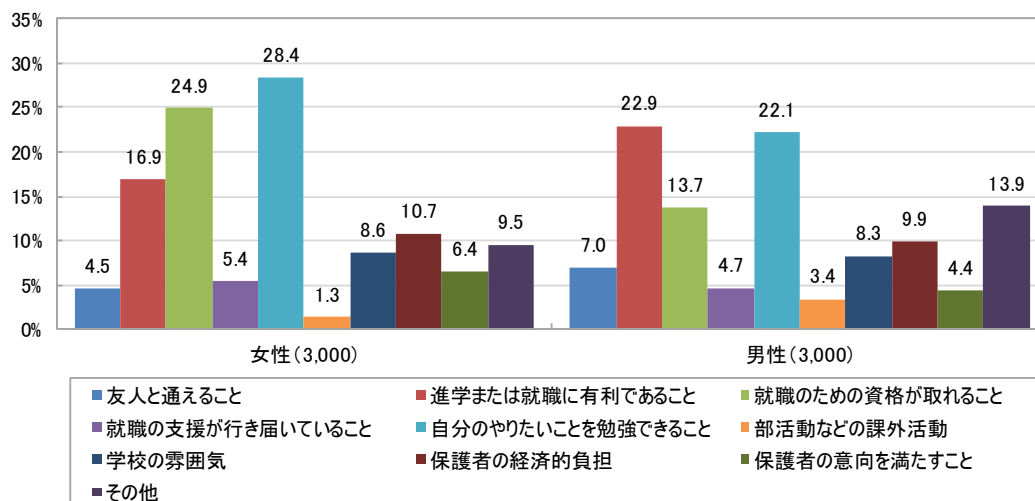
### 大学・短大・専門学校への進学時に重視した点

○女性が大学・短大・専門学校への進学時に重視した点は、「自分のやりたいことを勉強できること」が28.4%で最も多く、次いで「就職のための資格が取れること」が24.9%で続く。

○男性については、「進学または就職に有利であること」が22.9%で最も多く、「自分のやりたいことを勉強できること」が22.1%で続く。

○男女で比較すると、「進学または就職に有利であること」は男性の方が多く、「就職のための資格が取れること」、「自分のやりたいことを勉強できること」は女性の方が多い。

図表10 性別でみた大学・短期大学・専門学校への進学時に重視した点<sup>7</sup>



<sup>7</sup> 選択肢には、図表中に記載のある他に「高等学校・高等専門学校・専門学校・大学・短大へ進学していない」があり、最終学歴に応じて選択できるようにしている。ただし、図表では割愛している。



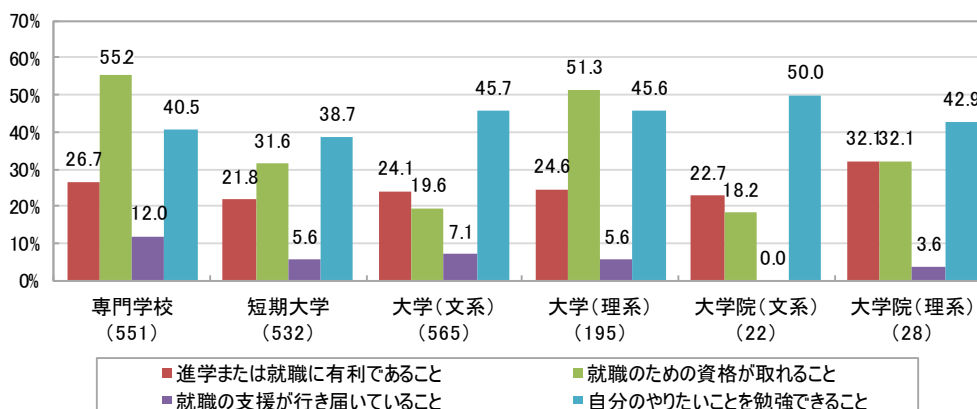
## 最終学歴と進路選択で重視した点の関係

○最終学歴別に進路選択で重視した点を見ると、最終学歴が「専門学校」である場合は、「就職のための資格が取れること」が女性55.2%、男性39.4%で男女ともに最も多い。

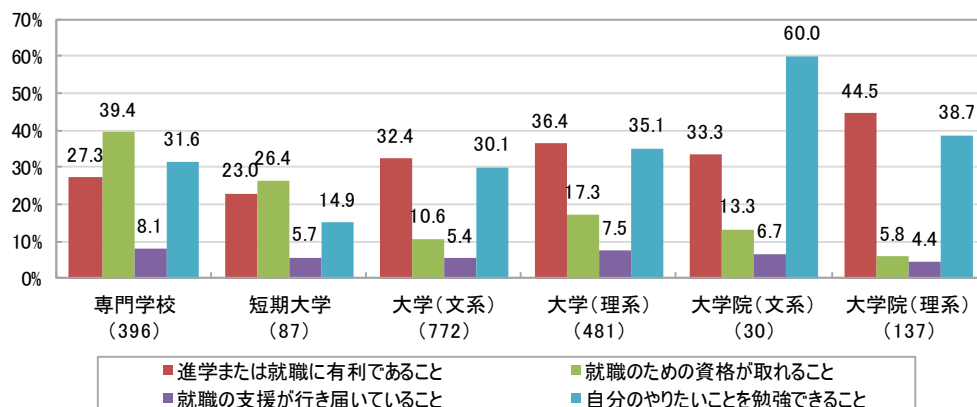
○女性については、「専門学校」の他に「大学(理系)」で「就職のための資格が取れること」が51.3%と最も多い。その他の学歴である場合は「自分のやりたいことを勉強できること」が最も多くなっている。

○男性については、「短期大学」では「就職のための資格が取れること」が26.4%で最も多く、「大学院(文系)」では「自分のやりたいことを勉強できること」が60.0%で最も多い。その他の学歴である場合は「進学または就職に有利であること」が最も多い。

図表11 最終学歴別にみた進路選択で重視した点(女性)



図表12 最終学歴別にみた進路選択で重視した点(男性)<sup>8</sup>



<sup>8</sup> 図表11及び12は、図表10の選択肢の一部を抽出し、図表にしている。

## 進路選択等に影響を受けたもの

○進路選択に影響を受けたものについては、男女ともに、いずれの時期においても同性の親から影響を受けている傾向が見られる。

○小学生及び中学生の頃、並びに大学・短大・専門学校への進学時では同性の親の影響を受けたという割合が最も多い。

図表13 性別でみた働くイメージや進路選択において影響を受けたもの(父母の影響のみ抜粋)<sup>9</sup>



<sup>9</sup> 選択肢には、「兄弟姉妹」、「その他の家族・親族」、「友人や先輩」、「学校の先生」、「塾や習い事など、学校以外での先生」、「学校での職場体験」、「学校外での体験」、「本、テレビ、インターネットで知った情報」、「その他、自分で調べた情報」、「その他」がある。

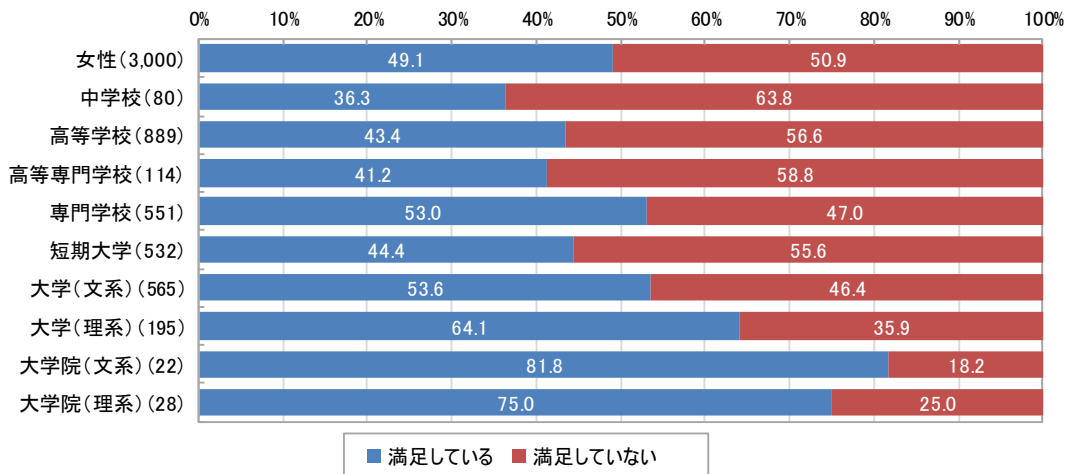
### (3)最終学歴に対する満足感

- 【ポイント】 ■最終学歴に対する満足感は、男女ともに大卒以上である場合に、半数以上が満足している。女性に関しては専門学校卒、男性に関しては高等専門学校卒も該当する。
- 学歴に対する不満の内容を年代別にみると、若い年代になるほど上位の学校に通いかけたという不満は少なくなる。女性の方がその傾向が大きく、進学をあきらめるという傾向が解消されてきたことが推察される。
- 高等学校卒業の人が学歴に満足していない理由をみると、女性では経済力や家族の反対がより多く、男性では学力がより多い。高等学校卒業の女性は学力以外のことで進学をあきらめる場合が男性と比較して多いことが見て取れる。

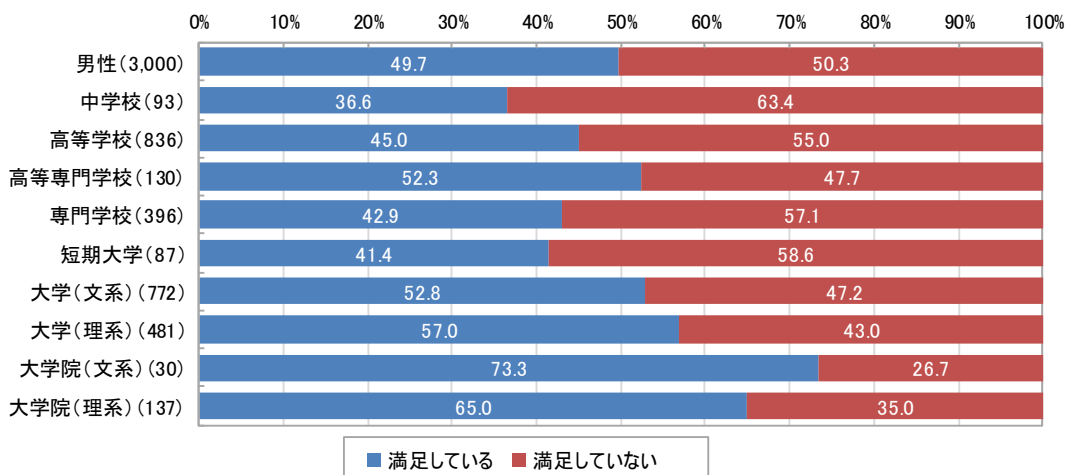
#### 最終学歴に対する満足感

- 男女ともに大卒以上である場合、「満足している」が5割を上回っている。
- 女性では、最終学歴が「専門学校」である場合、「満足している」が53.0%であり、5割を上回っている。
- 男性では、「専門学校」である場合に「満足している」は42.9%だが、「高等専門学校」は52.3%で5割を上回っている。

図表14 最終学歴別にみた学歴に対する満足感(女性)



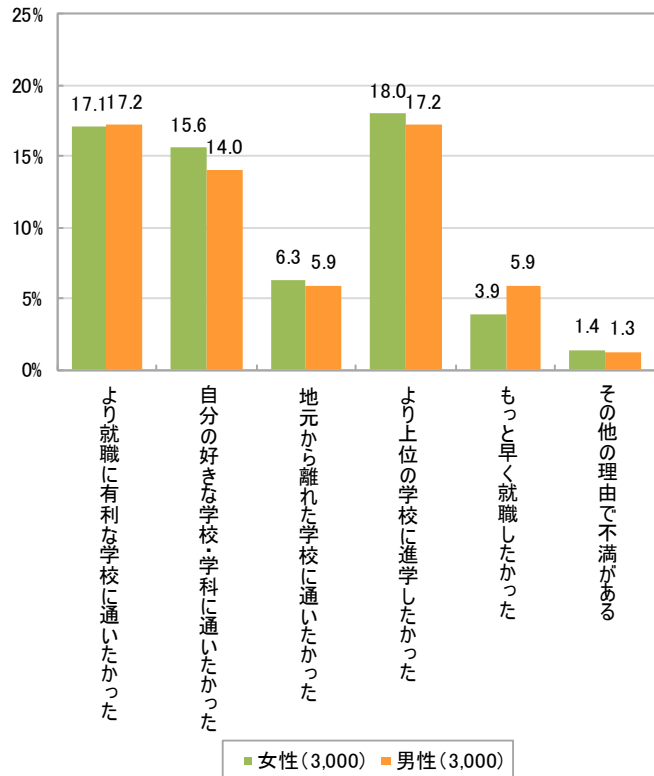
図表15 最終学歴別にみた学歴に対する満足感(男性)



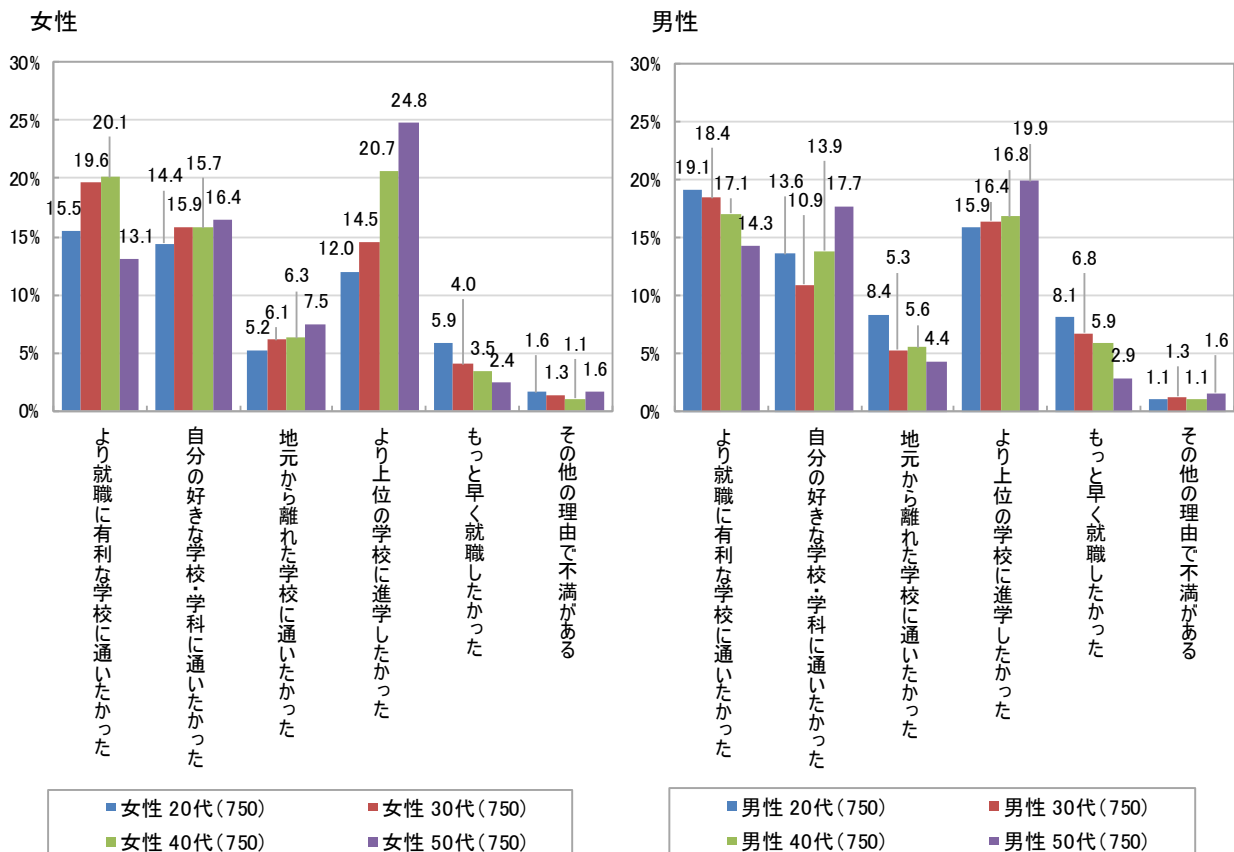
## 最終学歴に対する不満

- 最終学歴に対して不満に思う内容をみると、男女ともに上位3位は「より上位の学校に進学したかった」、「より就職に有利な学校に通いたかった」、「自分の好きな学校・学科に通いたかった」である。
- 年代別にみると、男女ともに若い年代の方が「より上位の学校に進学したかった」が少なくなる傾向が見られる。
- 女性については、50代での「より上位の学校に進学したかった」は24.8%であるのに対して20代では12.0%であり、男性に比べて年代間の差が大きい。
- 男性については、若い年代の方が「より就職に有利な学校に通いたかった」が多くなる傾向が見られる。

図表16 性別でみた最終学歴に対する不満



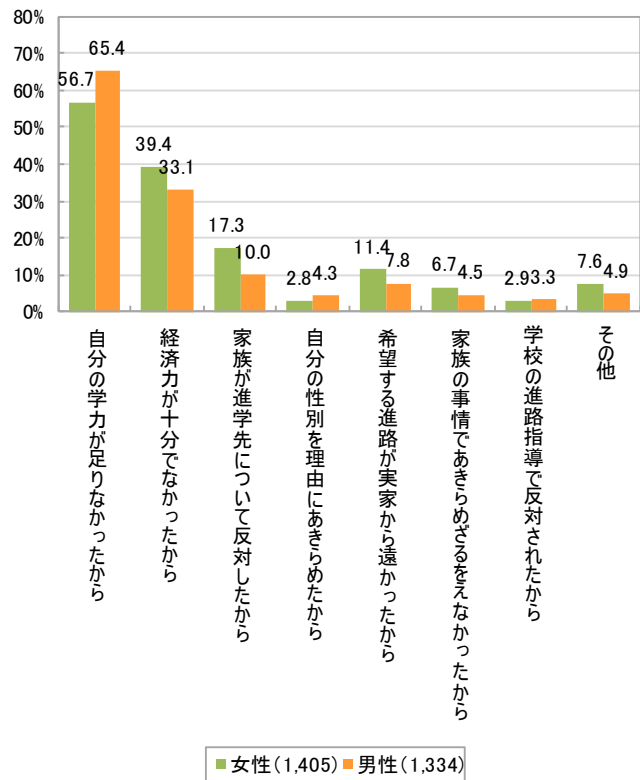
図表17 性別・年代別にみた最終学歴に対する不満(左:女性、右:男性)



## 学歴に対して満足しない理由

- 学歴に対して満足していない理由は、男女ともに「自分の学力が足りなかったから」が最も多い。
- 男女で比較すると、「自分の学力が足りなかったから」は男性の方が多。女性の方が多項目は「経済力が十分でなかったから」、「家族が進学先について反対したから」、「希望する進路が実家から遠かったから」である。

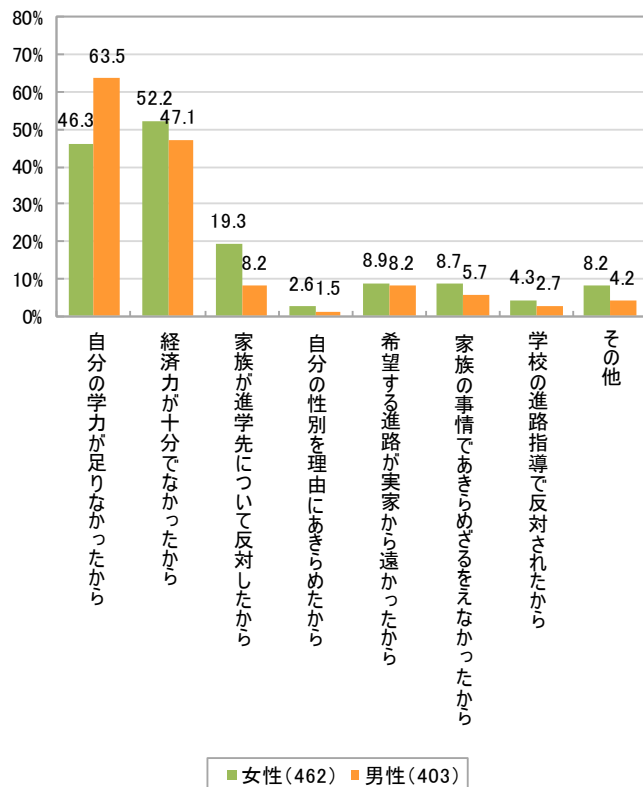
図表18 性別でみた学歴に満足していない理由



## 最終学歴と満足しない理由

- 最終学歴が「高等学校」である場合の満足しない理由をみると、女性では「経済力が十分でなかったから」が52.2%で最も多く、また図表18における女性の割合(39.4%)と比べても多い。
- 「家族が進学先について反対したから」についても男女間の差が大きい。

図表19 性別でみた高等学校卒業の人が学歴に満足していない理由



#### (4) 家族からの影響(性別を理由にした発言)

【ポイント】 ■男女ともに、年代に関わらず、性別を理由として何かを制約されたり、推奨されたりしたことがない人の方が多い。

■ただし、勉強については女性よりも男性の方が性別を意識した発言をされており、結婚・家庭については女性の方がその傾向が見られる。

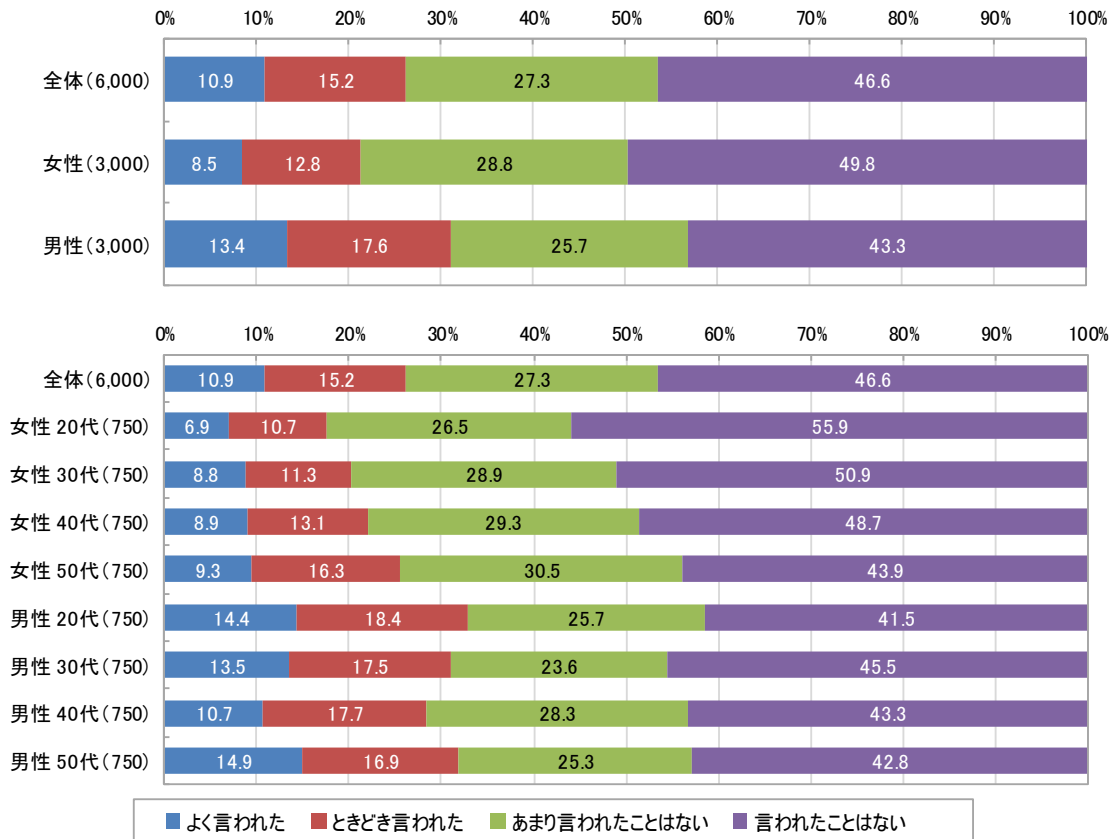
##### 性別を理由にした発言の有無

○「勉強」、「進学・進路」、「職業」、「結婚・家庭」のいずれについても、性別・年代に関わらず、「よく言われた」は1割前後である。「よく言われた」と「ときどき言われた」の合計も、性別・年代に関わらず5割は上回らない。

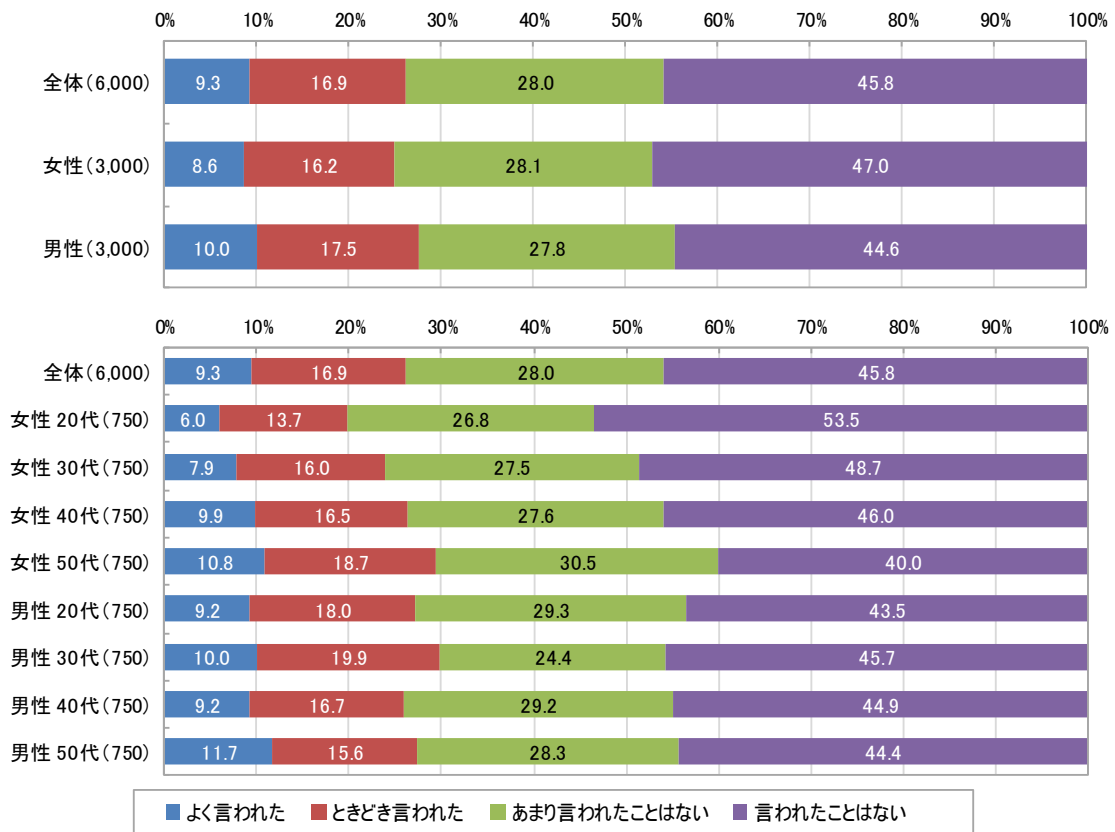
○「よく言われた」と「ときどき言われた」の合計の男女差をみると、勉強について性別を理由にした発言をされたかどうかについては女性が21.3%、男性が31.0%であり、男性の方が多い。

○結婚・家庭について性別を理由にした発言をされたかどうかについては、女性が31.3%、男性が24.1%で、女性の方が多い。

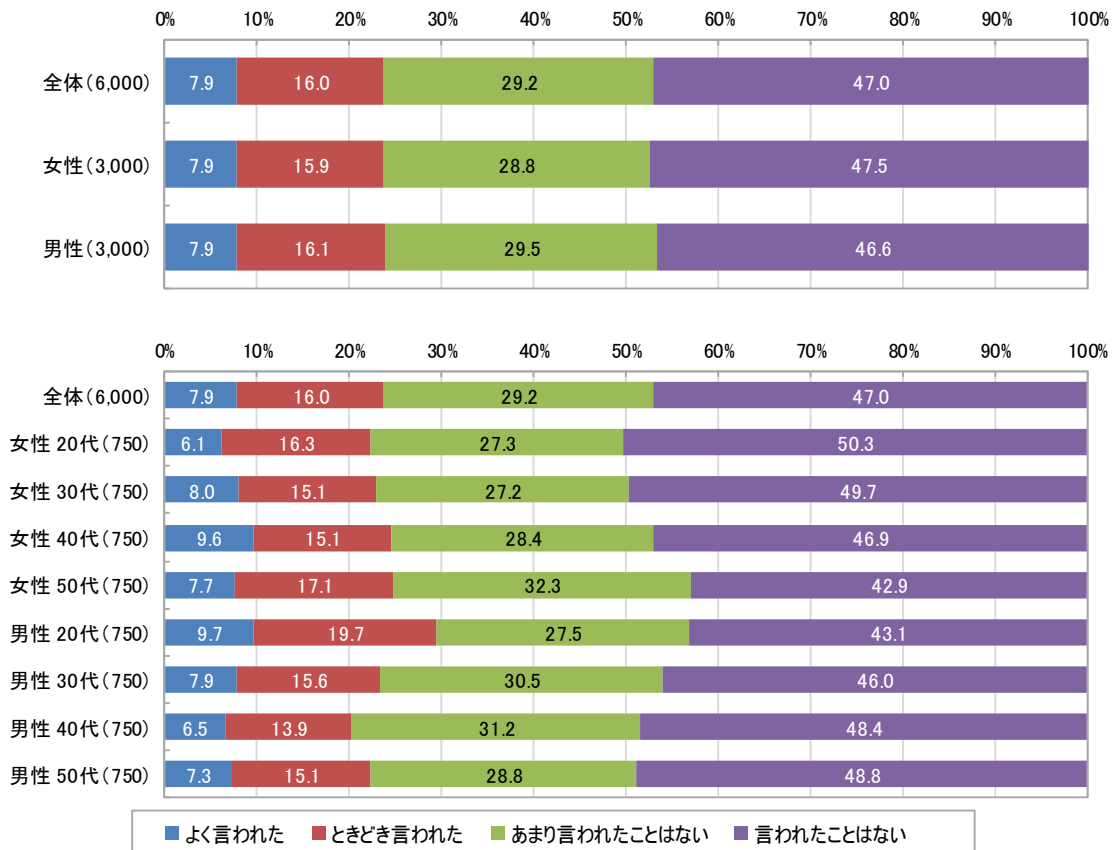
図表20 性別・年代別にみた子どもの頃に「勉強」について性別を理由にした発言をされたかどうか



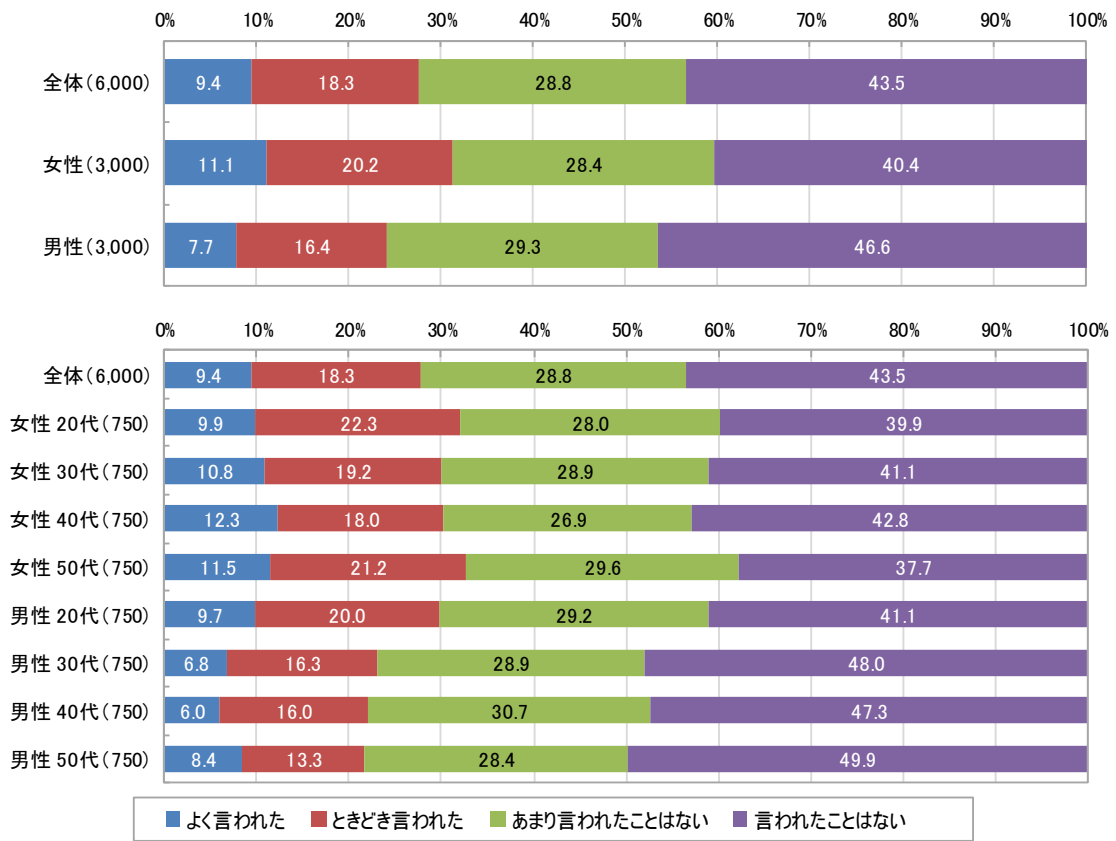
図表21 性別・年代別にみた子どもの頃に「進学・進路」について性別を理由にした発言をされたかどうか



図表22 性別・年代別にみた子どもの頃に「将来志望する職業」について性別を理由にした発言をされたかどうか



図表23 性別・年代別にみた子どもの頃に「結婚・家庭」について性別を理由にした発言をされたかどうか





### 3. 就労に関する分析

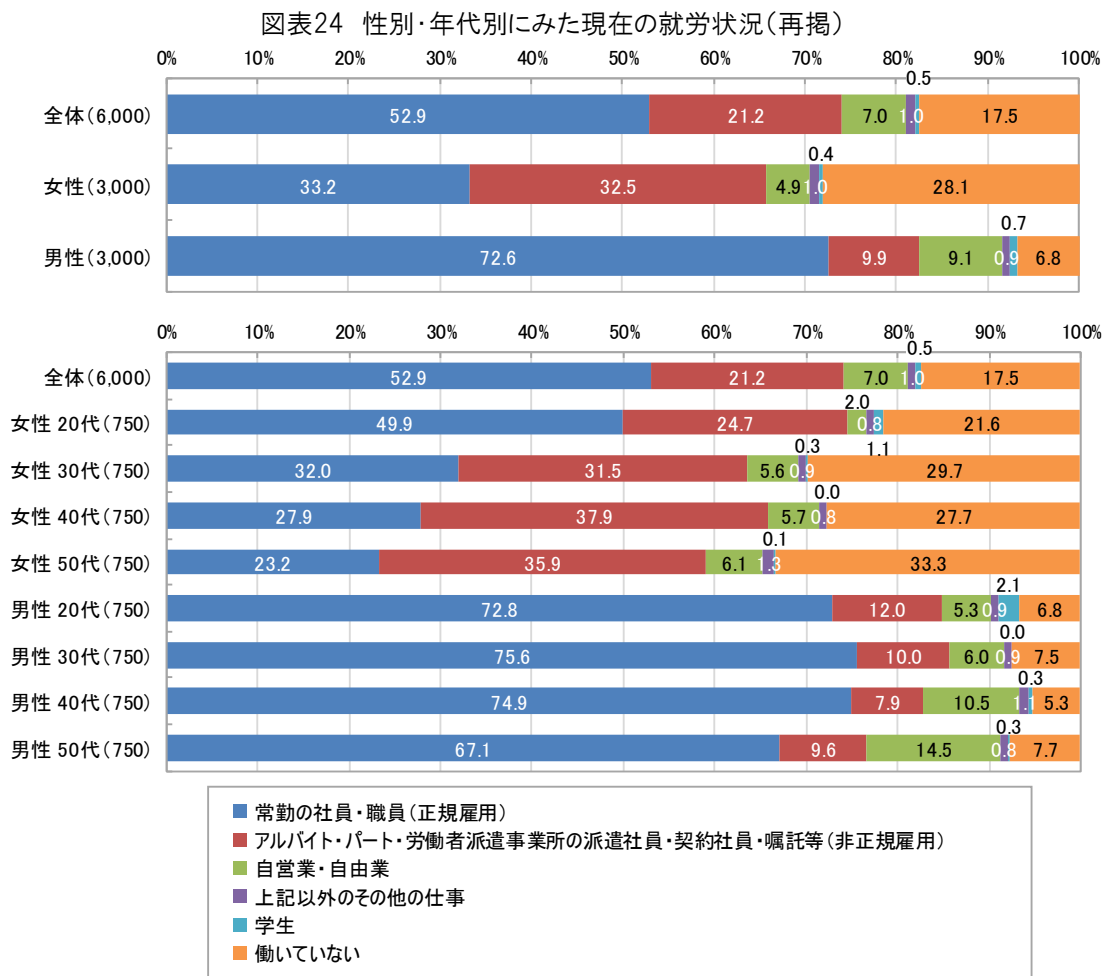
#### (1) 就労状況に対する満足度

- 【ポイント】 ■ 正規雇用で働く人は、男女ともに、6割半ばが現状に満足している。  
 ■ 女性では非正規雇用でも同様の満足度だが、男性の場合は4割半ばである。

#### 就労状況（再掲）

○ 働いている（有償労働をしている）人は女性で71.6%、男性で92.5%である。女性では正規雇用と非正規雇用がそれぞれ33.2%、32.5%である。男性の非正規雇用は9.9%である。

○ 年代別に働いている（有償労働をしている）女性の割合をみると、20代が77.4%で最も多い。



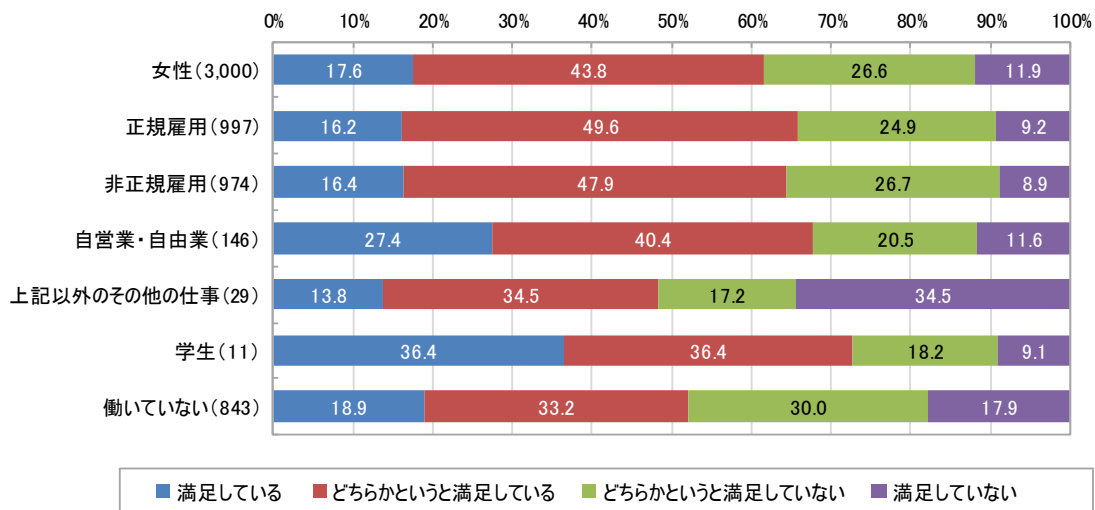
## 就労状況と満足度

○就労状況別に「満足している」と「どちらかという満足している」の合計をみると、女性では、「上記以外のその他の仕事」以外においてはいずれも5割を上回っている。

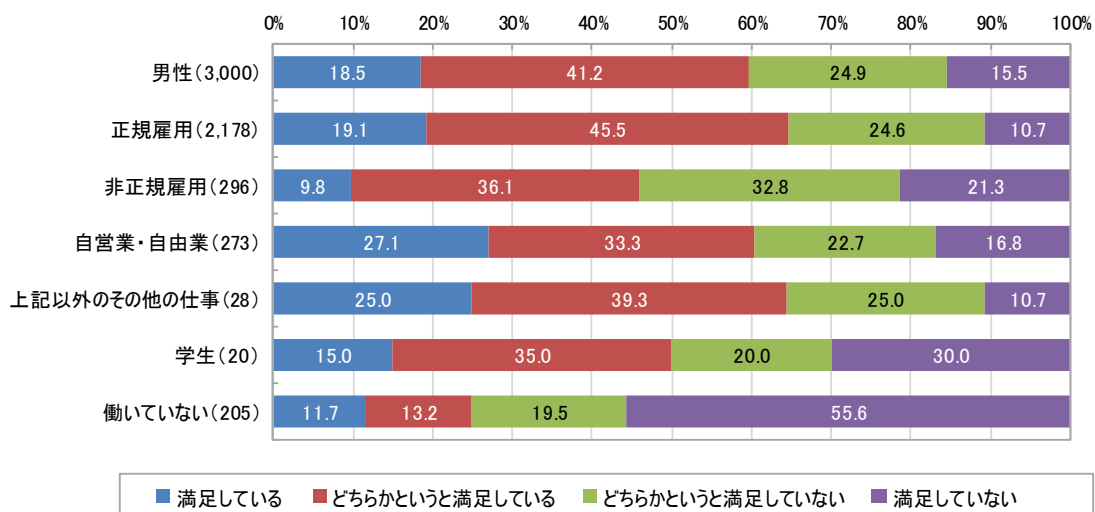
○ただし、女性に関しては、「働いていない」場合には、「満足している」と「どちらかという満足している」の合計は52.1%であり、「正規雇用」、「非正規雇用」、「自営業・自由業」に比べて少ない。

○男性も満足度が5割を上回る就労状況が多いが、「非正規雇用」の場合に45.9%で5割を下回る他、「働いていない」場合には24.9%となる。

図表25 就労状況別にみた就労状況に対する満足度(女性)



図表26 就労状況別にみた就労状況に対する満足度(男性)



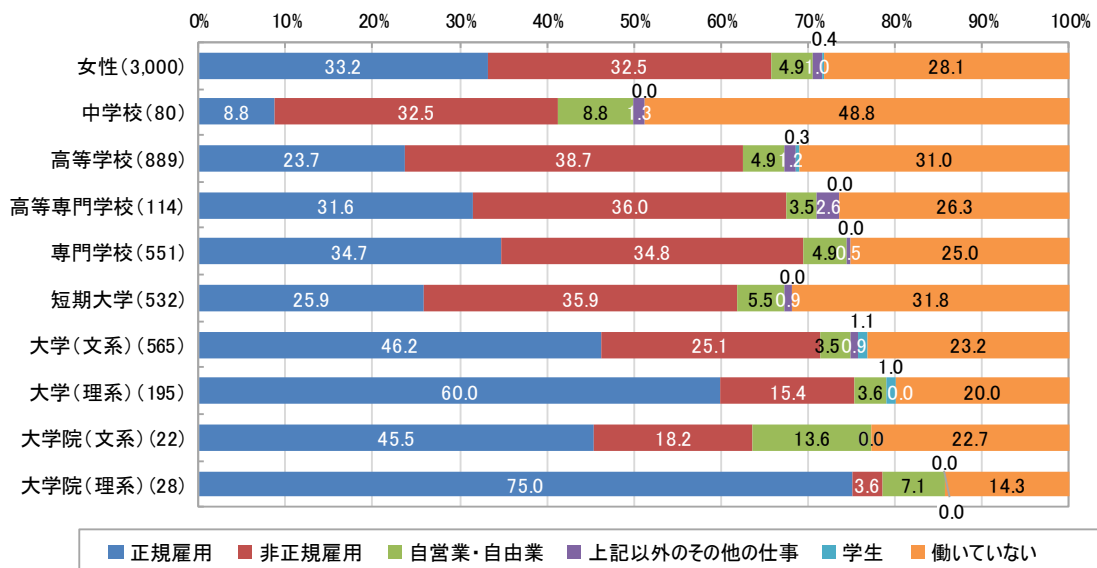
## (2)最終学歴と就労状況

- 【ポイント】 ■最終学歴と就労状況の関係をみると、女性では大卒以上は正規雇用が多く、大卒未満は非正規雇用が多い。
- 女性については、20代・30代で子どもの有無によって就労状況に違いが見られ、子どもがいる人では働いていない(有償労働をしていない)人が多い。

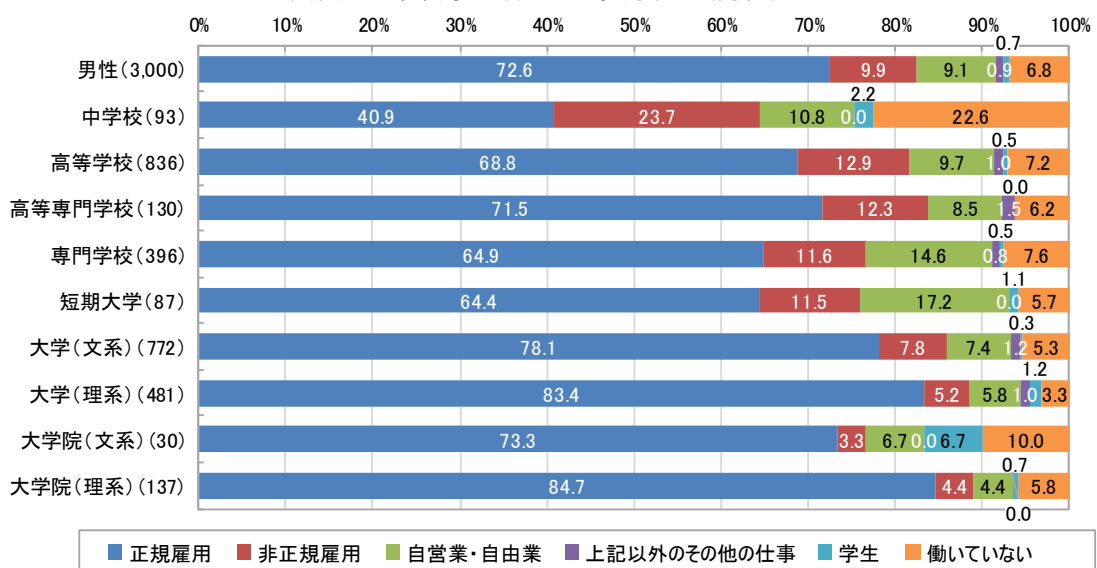
### 最終学歴と就労状況の関係

- 最終学歴別に就労状況を見ると、女性では、大卒以上では「正規雇用」が最も多いが、大卒未満では「非正規雇用」が多い。最終学歴が「中学校」の場合は「働いていない」が最も多い。
- 女性については、大卒以上の場合も「働いていない」は1割半ば～2割強である。
- 男性については、最終学歴に関わらず「正規雇用」が最も多い。大卒未満では、最終学歴が「中学校」の場合に「非正規雇用」が最も多く23.7%である。

図表27 最終学歴別にみた就労状況(女性)



図表28 最終学歴別にみた就労状況(男性)



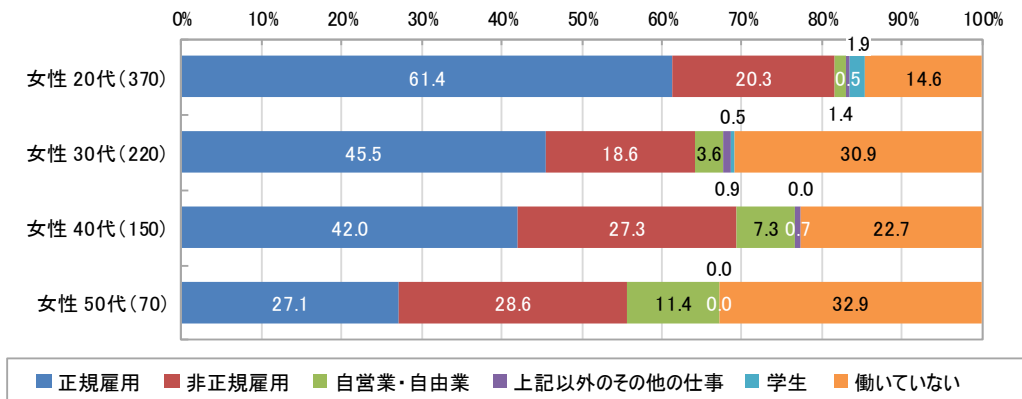
## 年代別にみた大卒以上の女性の就労状況

○大卒以上の女性の就労状況を年代別にみると、「正規雇用」は若い年代ほど多く、20代で61.4%、30代で45.5%、40代で42.0%、50代で27.1%である。

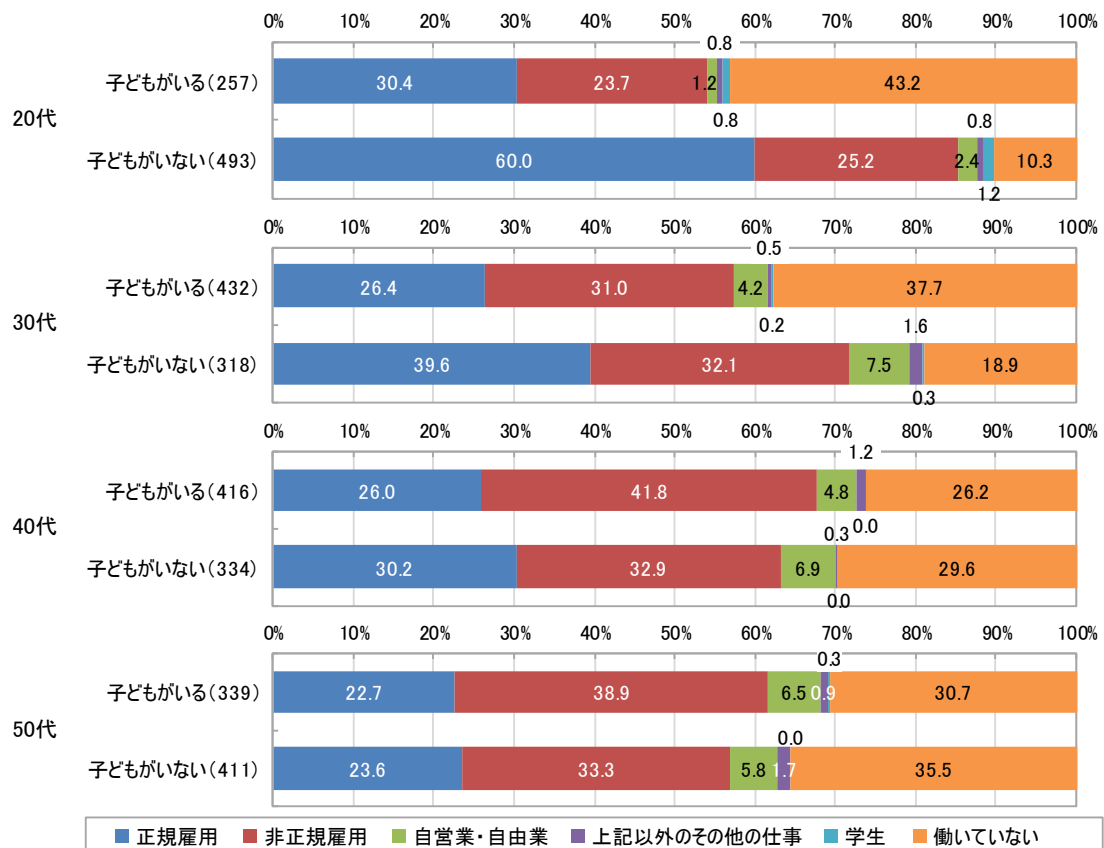
○「働いていない」女性は、20代で14.6%、30代で30.9%、40代で22.7%、50代で32.9%である。

○子どもの有無で女性(学歴は問わない)の就労状況をみると、20代・30代では「子どもがいる」女性の方が「働いていない」が多い。

図表29 年代別にみた大卒以上の女性の就労状況



図表30 年代・子どもの有無でみた女性の就労状況



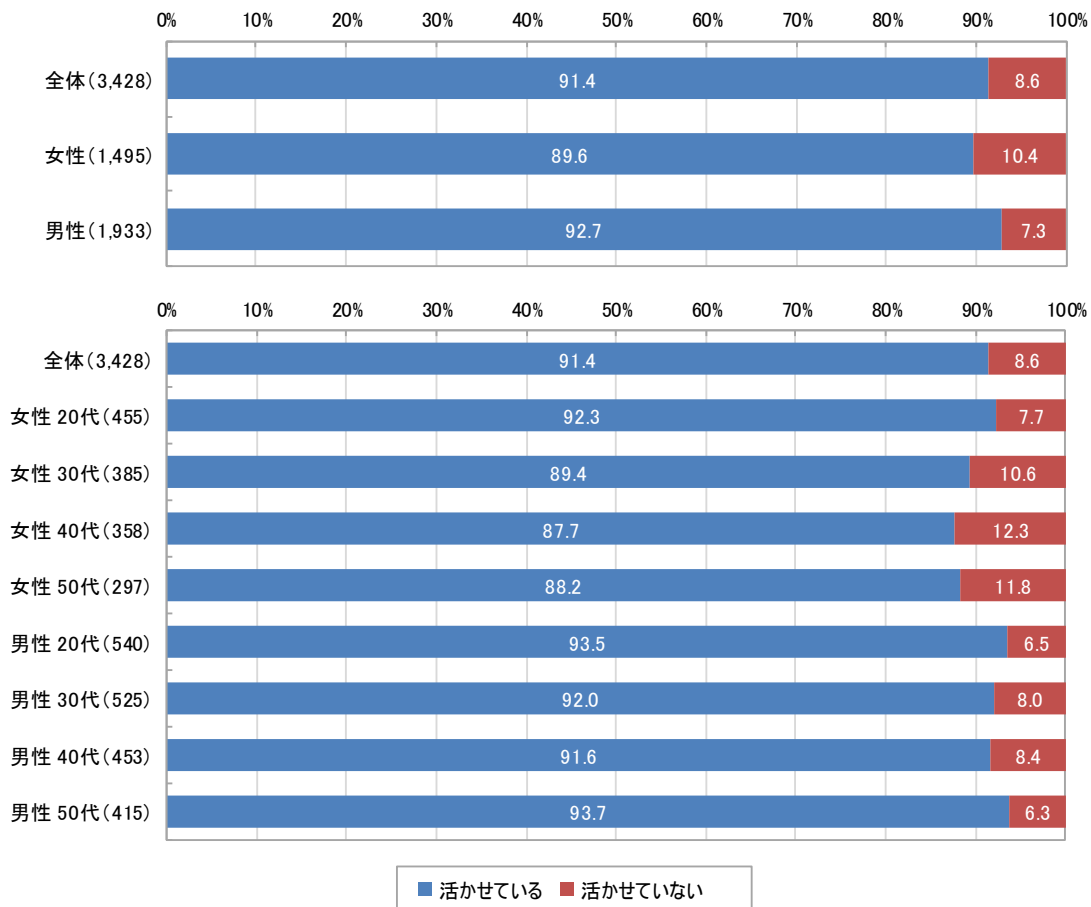
### (3)就労以前の学びと仕事のつながり

- 【ポイント】**
- 男女ともに9割程度の人が大学等の教育機関で学んだことが活かされていると思っている。活かされている内容をみると、「大学(文系)」、女性の「高等専門学校」、「短期大学」、「大学院(理系)」以外では専門的な知識・技術が活かされているという回答割合が最も高い。
  - 仕事に必要な知識の習得機会としては、最終学歴に関わらず、「仕事をするなかで」であると思う人が7～8割程度と多い。
  - 「専門学校」や「大学院(文系)」、「大学院(理系)」を卒業した人では、男女ともに、学校において仕事に必要な知識・技能を習得したと思う人は4割を上回る。女性では「大学(理系)」も4割を上回る。

#### 大学等の教育期間で学んだことと仕事のつながりの有無

○大学等(高等専門学校以上)の教育機関で学んだことが仕事に活かされていると思う人は、女性で89.6%、男性で92.7%である。

図表31 性別・年代別にみた大学等の教育機関で学んだことが仕事に活かしているかどうか<sup>10</sup>

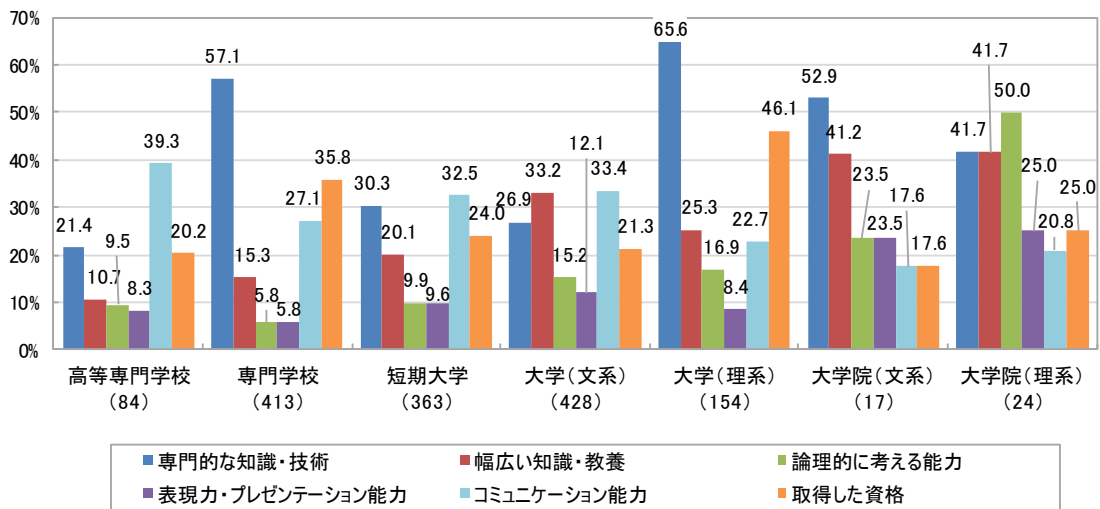


<sup>10</sup> 最終学歴が「高等専門学校」、「専門学校」、「短期大学」、「大学(文系)」、「大学(理系)」、「大学院(文系)」、「大学院(理系)」を選択した3,428人が回答している。

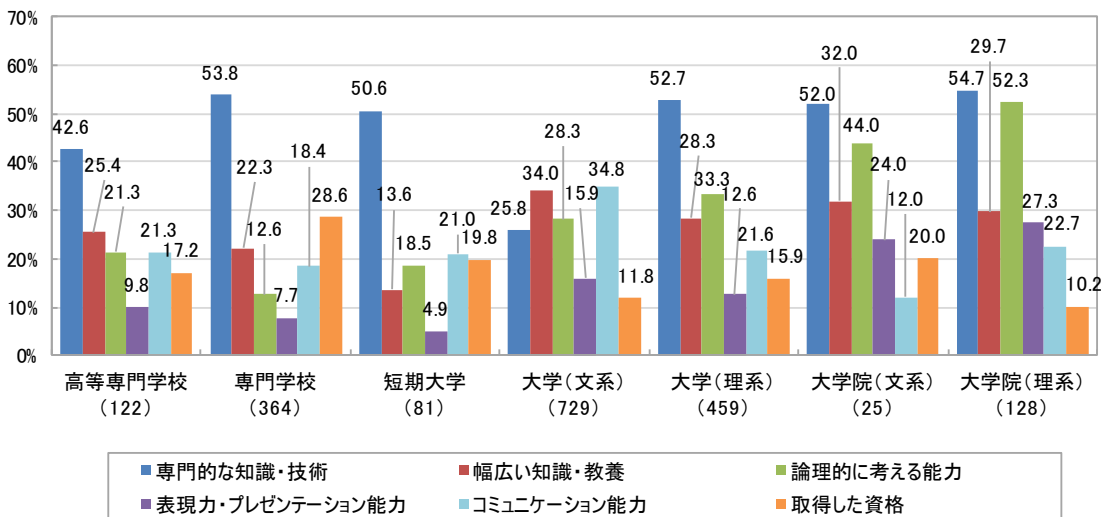
## 最終学歴と学んだことと仕事のつながりの関係

- 女性については、最終学歴が「高等専門学校」、「短期大学」、「大学(文系)」の場合には「コミュニケーション能力」が最も多く、「大学院(理系)」では「論理的に考える力」が最も多い。その他の学歴である場合は「専門的な知識・技術」が最も多い。
- 男性については、最終学歴が「大学(文系)」の場合に「コミュニケーション能力」が最も多く、その他の学歴である場合は「専門的な知識・技術」が最も多い。
- 「専門的な知識・技術」の割合を最終学歴別にみると、女性では、「大学(理系)」で65.6%と最も多く、「専門学校」が57.1%、「大学院(文系)」が52.9%で続く。男性では、「高等専門学校」と「大学(文系)」以外は5割台である。

図表32 最終学歴別にみた仕事に活かされている教育機関で得たこと(女性)



図表33 最終学歴別にみた仕事に活かされている教育機関で得たこと(男性)



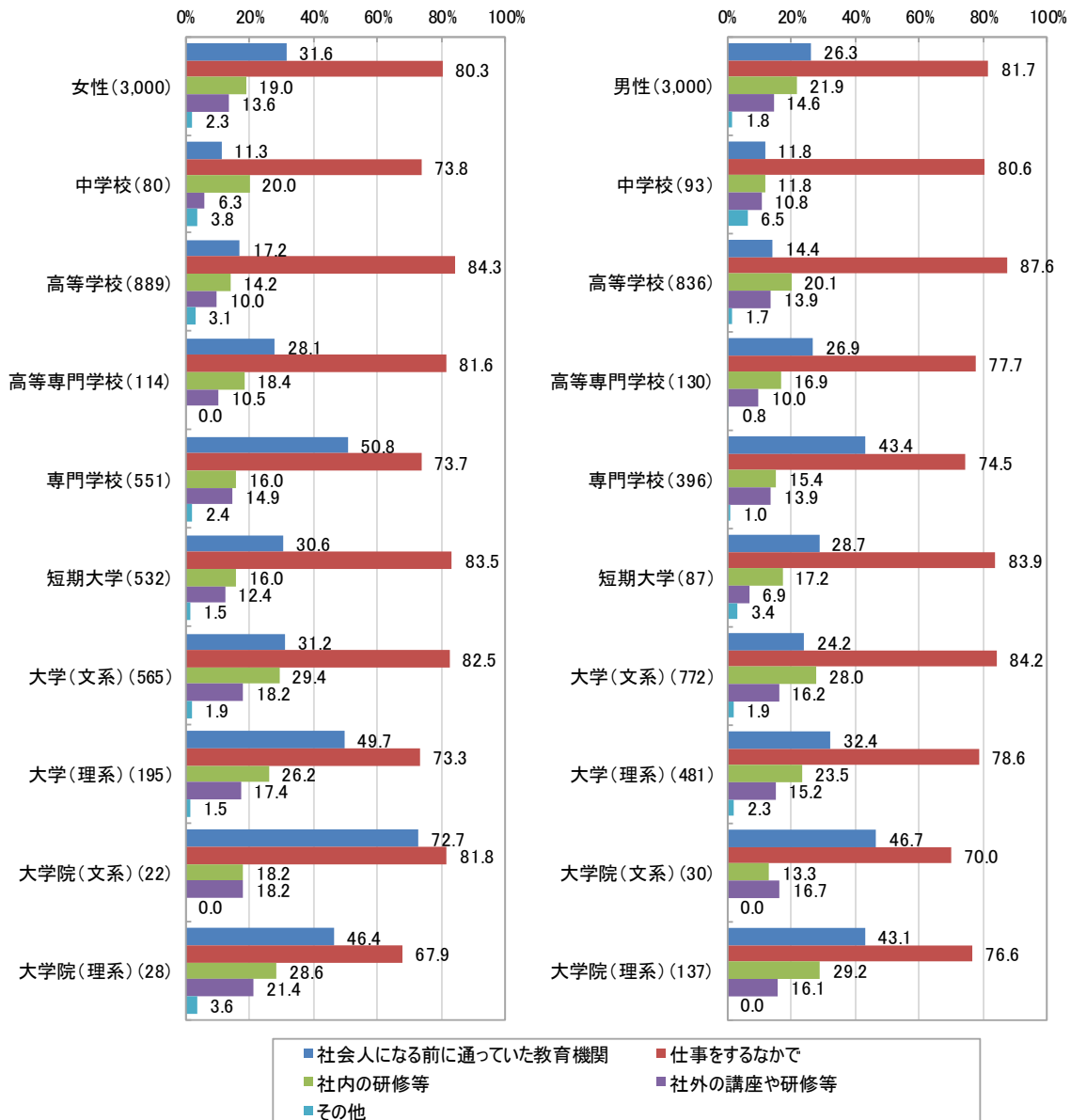
## 最終学歴と仕事に必要な知識等の習得機会の関係

○最終学歴に関わらず、「仕事をするなかで」が最も多い。

○「社会人になる前に通っていた教育機関」については、女性では「大学院(文系)」が72.7%で最も多く、次いで「専門学校」が50.8%、「大学(理系)」が49.7%、「大学院(理系)」が46.4%で続く。

○男性に関しては、「大学院(文系)」が46.7%で最も多く、次いで「専門学校」が43.4%、「大学院(理系)」が43.1%で続く。

図表34 最終学歴別にみた仕事に必要な知識等の習得機会(左:女性、右:男性)



#### (4)今後の就労意向

- 【ポイント】 ■女性では、ほとんどの就労状況で現状維持を希望する傾向が見られる。男性については非正規雇用で働く人に関しては、現状維持と転職意向が同程度となっている。
- 女性に関しては、今の勤め先で勤務し続けながら、家庭との両立を望む傾向が見られる。
- 働いていない(有償労働をしていない)ことに不満である女性は、正規雇用よりも非正規雇用を望んでいる。
- 働いていない(有償労働をしていない)が、就労意向を持つ女性は若い年代ほど多く、20代・30代では8～9割が働きたいと思っている。若い年代においても非正規雇用を望む傾向が見られる。

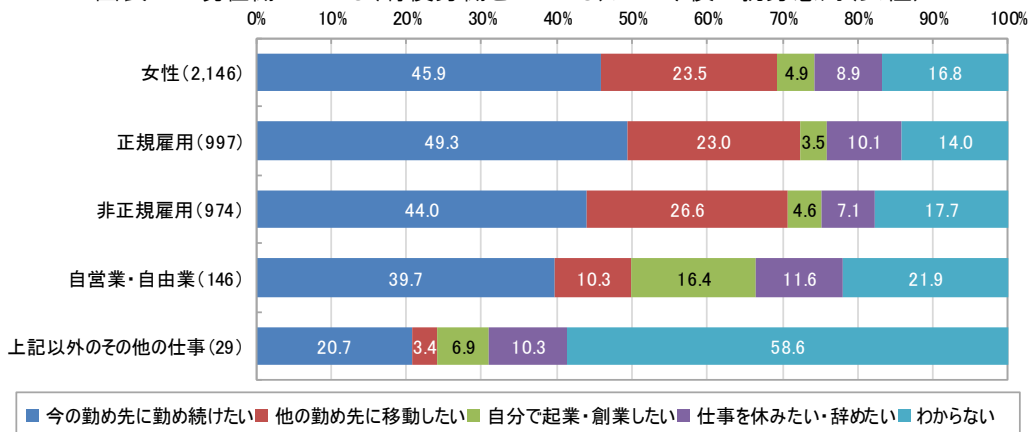
#### 現在働いている(有償労働をしている)人の就労意向

○女性については、「上記以外のその他の仕事」以外の就労状況において、「今の勤め先に勤め続けたい」が最も多い。「上記以外のその他の仕事」についても、「わからない」を除くと「今の勤め先に勤め続けたい」が最も多い。

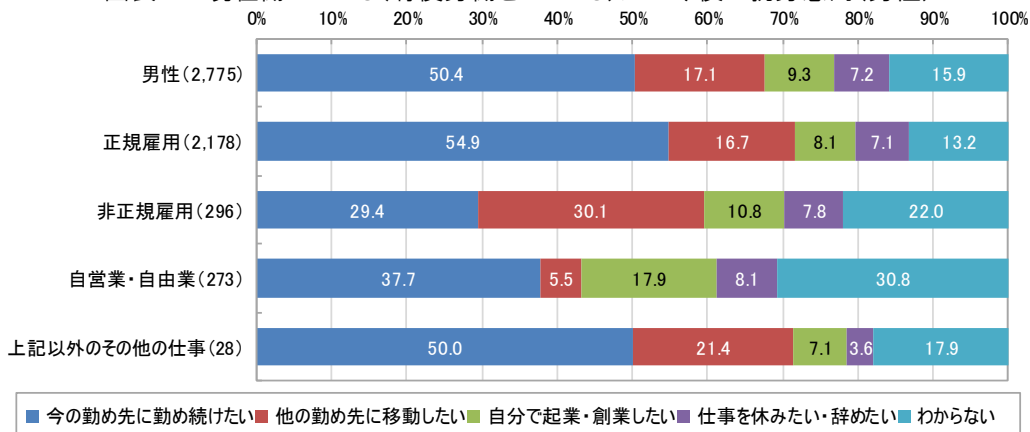
○男性については、「非正規雇用」である場合には「今の勤め先に勤め続けたい」と「他の勤め先に移動したい」がほぼ同じ割合となり、それぞれ29.4%、30.1%である。その他の就労状況では「今の勤め先に勤め続けたい」が最も多い。

○「自分で起業・創業したい」人については、女性で4.9%、男性で9.3%と、男性の方が女性よりも多い。

図表35 現在働いている(有償労働をしている)人の今後の就労意向(女性)<sup>11</sup>



図表36 現在働いている(有償労働をしている)人の今後の就労意向(男性)



<sup>11</sup> 働いている(有償労働をしている)人(女性2,146人、男性2,775人)が回答している。



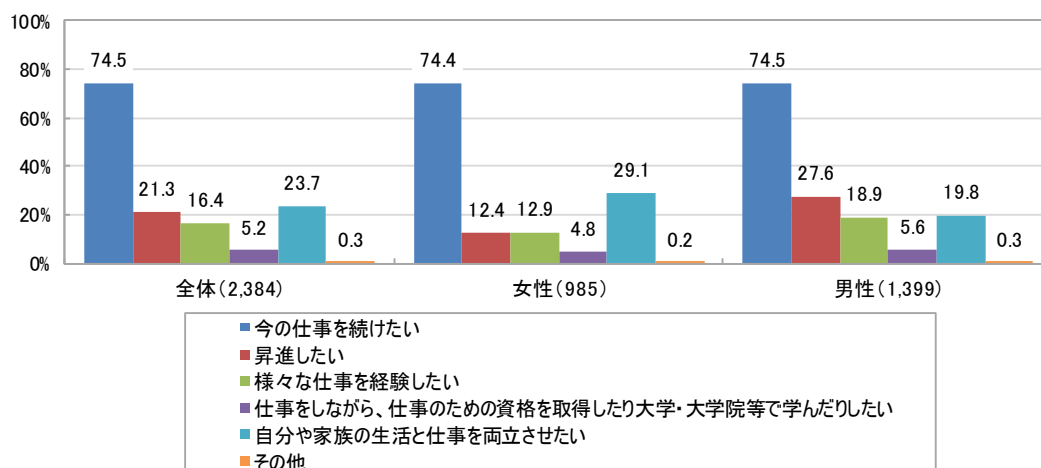
## 今の勤め先に勤め続けたい人のキャリア志向

○今の勤め先に勤め続けたいと思う人のなかでは、男女ともに「今の仕事を続けたい」が最も多い。

○「昇進したい」については、女性が12.4%、男性が27.6%であり、女性よりも男性の方が多い。

○女性では、男性に比べて「自分や家族の生活と仕事を両立させたい」が多く、29.1%である。

図表37 性別でみた今の仕事を続けたい人が望む職業生活<sup>12</sup>

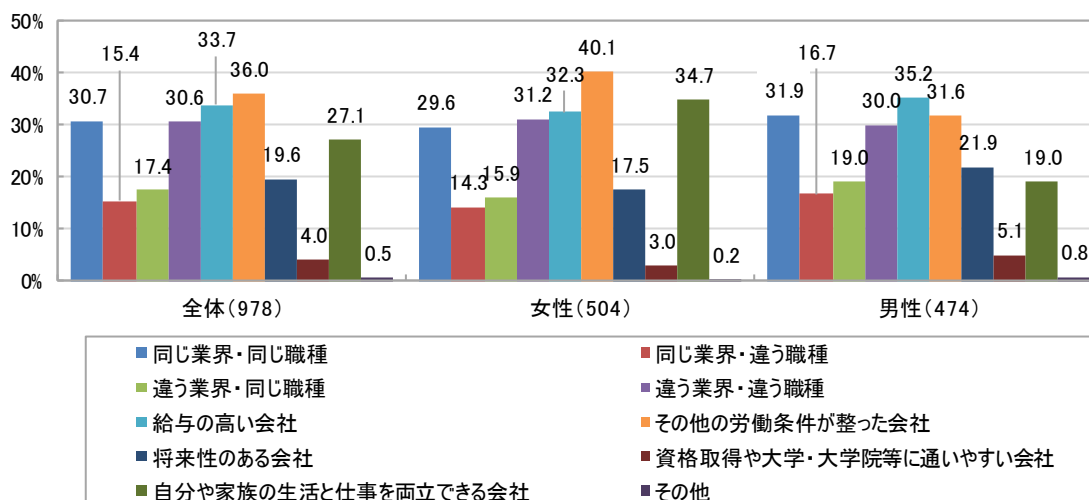


## 他の勤め先に移動したい人のキャリア志向

○他の勤め先に移動したい人については、女性では「その他の労働条件が整った会社」が40.1%で最も多く、「自分や家族の生活と仕事を両立できる会社」が34.7%で続く。

○男性では、「給与の高い会社」が35.2%で最も多く、「同じ業界・同じ職種」が31.9%で続く。

図表38 性別でみた他の勤め先に移動したい人の意向<sup>13</sup>



<sup>12</sup> 図表35・36中の選択肢「今の勤め先に勤め続けたい」を選択した2,384人が回答している。

<sup>13</sup> 図表35・36中の選択肢「他の勤め先に移動したい」を選択した978人が回答している。

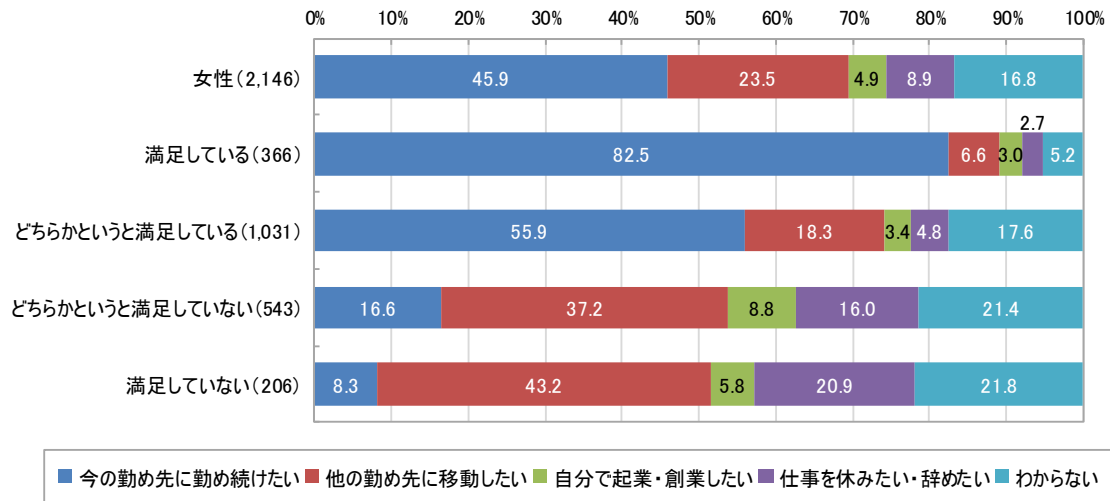
## 就労状況に対する満足度と就労意向の関係

○就労状況に対する満足度から就労意向をみると、男女とも、満足している人ほど「今の勤め先に勤め続けたい」が多い。

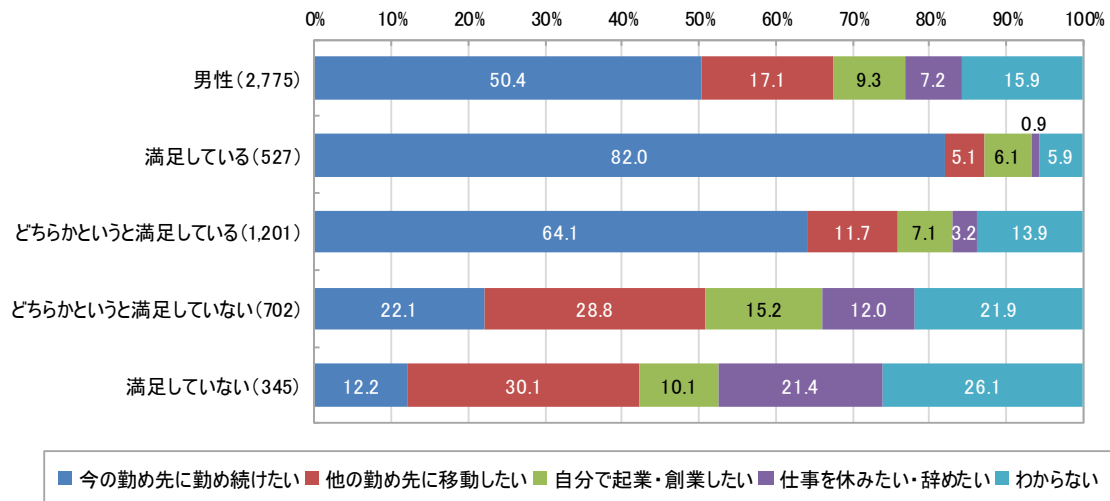
○ただし、「どちらかという満足している」場合、男性よりも女性の方が「他の勤め先に移動したい」が多い。

○満足度でみると、男女ともに「どちらかという満足していない」場合に、「自分で起業・創業したい」が最も多い。

図表39 就労状況に対する満足度からみた働いている(有償労働をしている)人の就労意向(女性)



図表40 就労状況に対する満足度からみた働いている(有償労働をしている)人の就労意向(男性)



## 働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向

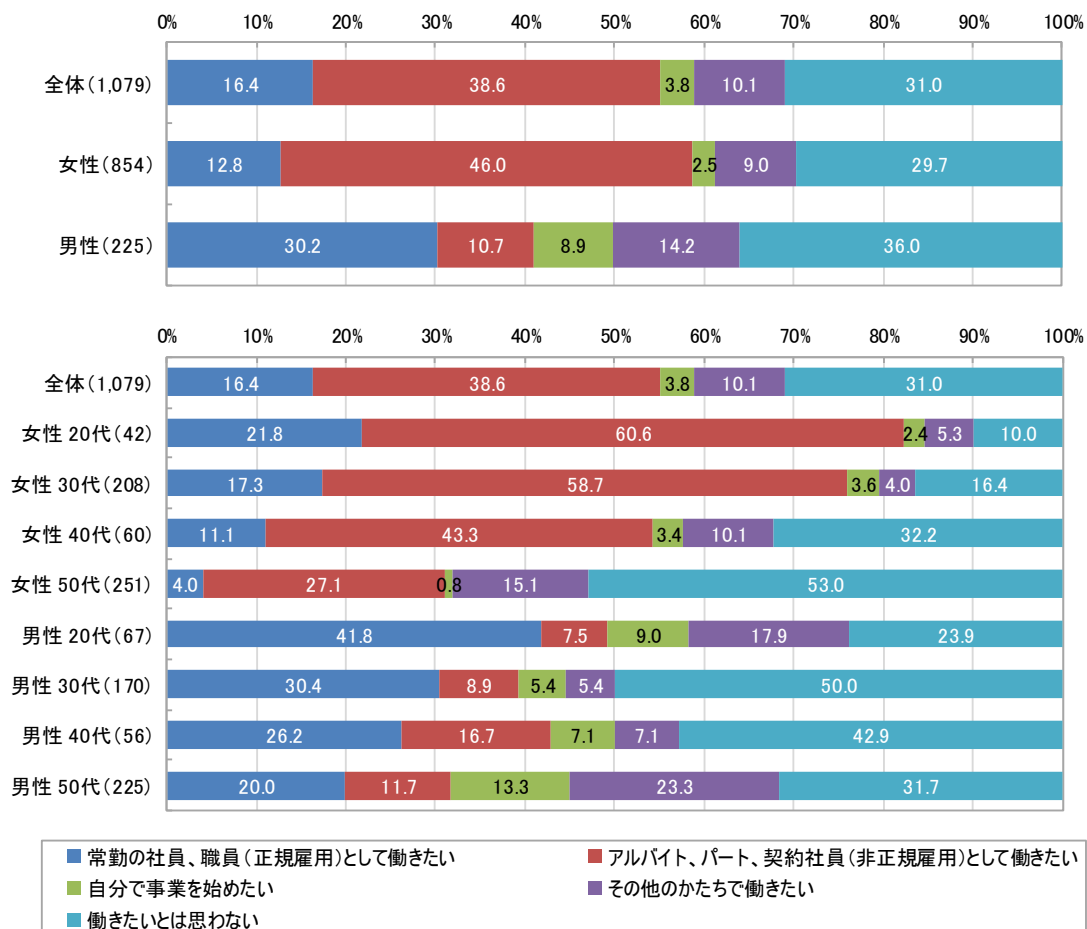
○働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向については、女性では「アルバイト、パート、契約社員(非正規雇用)として働きたい」が46.0%で最も多く、「働きたいとは思わない」が29.7%で続く。

○男性では「働きたいとは思わない」が36.0%で最も多く、「常勤の社員、職員(正規雇用)として働きたい」が30.2%で続く。

○女性について年代別にみると、20代・30代では「働きたいとは思わない」がそれぞれ10.0%、16.4%であり、40代(32.2%)・50代(53.0%)に比べて少ない。

○女性の20代・30代・40代では「アルバイト、パート、契約社員(非正規雇用)として働きたい」が最も多く、20代で60.6%、30代で58.7%、40代で43.3%である。50代は「働きたいとは思わない」が最も多い。

図表41 性別・年代別にみた働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向<sup>14</sup>



<sup>14</sup> 働いていない(有償労働をしていない)人(1,079人)が回答している。

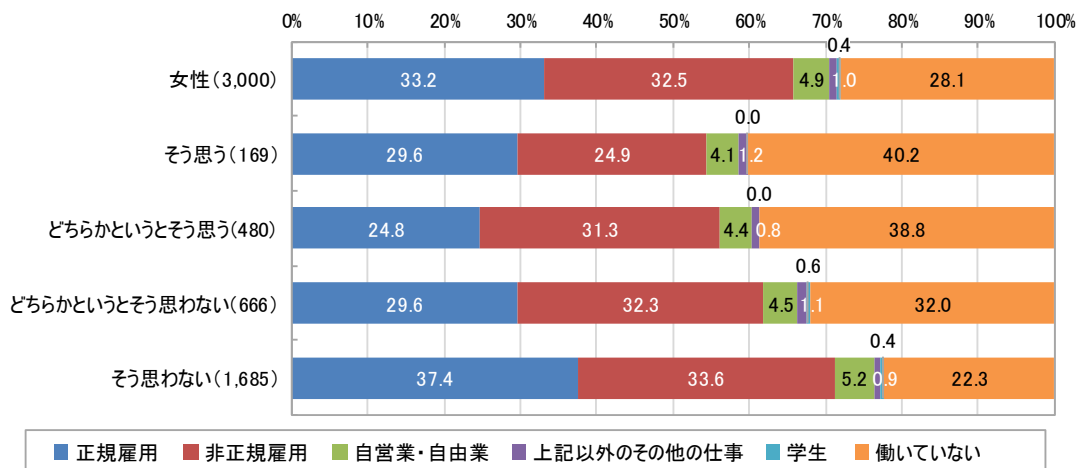
## (5)ジェンダー意識と女性の就労状況

- 【ポイント】**
- 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという考え方(固定的性別役割分担意識)ないしは育児に女性が専念すべきだという考え方に対して肯定しない女性(「そう思わない」を選択した女性)であっても、実際には4(有償労働をしていない)人が、それぞれ2割強である。
  - また、結婚・出産に関わらず仕事を続けることが望ましいと考える女性であっても、実際には働いていない(有償労働をしていない)人が、2割前後である。
  - 働いていない(有償労働をしていない)が、女性が働くことに対して肯定的である女性は、その他の働いていない(有償労働をしていない)女性に比べて就労意向を持つ割合が高い傾向が見られる。

### 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという考え方と女性の就労状況の関係

○夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという考え方について、肯定的でない回答になるほど「働いていない」は少なくなり、「そう思わない」とする女性では「働いていない」は22.3%である。

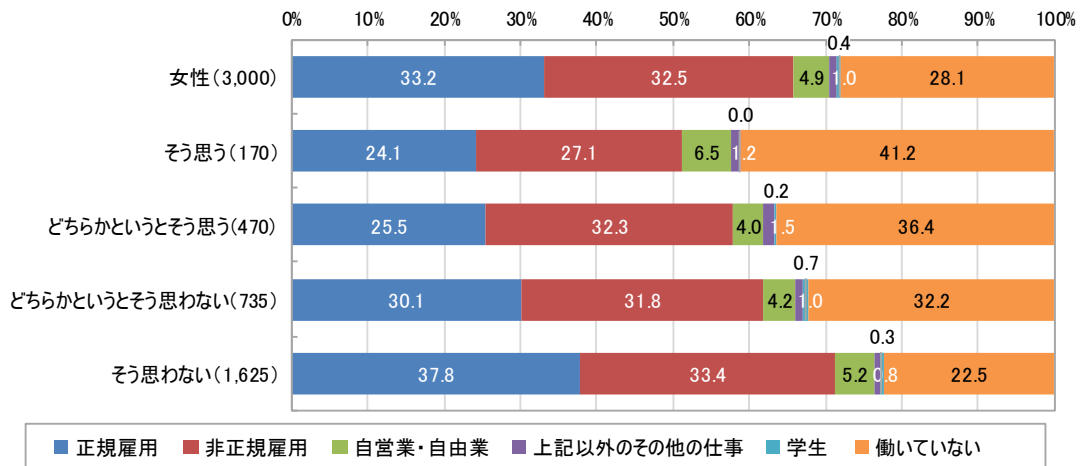
図表42 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという考え方からみた就労状況(女性)



## 女性は育児に専念すべきだという考え方と女性の就労状況の関係

○女性は育児に専念すべきだという考え方に肯定的でない回答になるほど「働いていない」は少なくなり、「そう思わない」とする女性では「働いていない」は22.5%である。

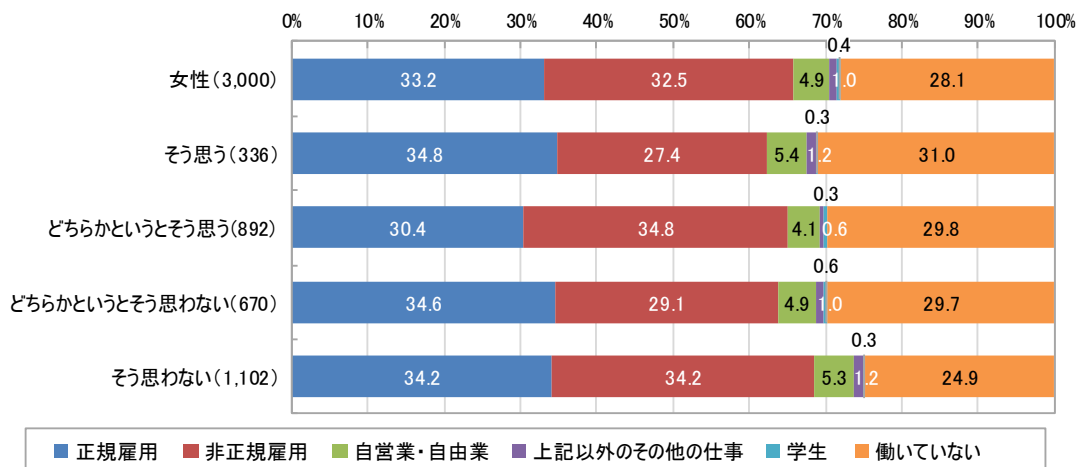
図表43 女性は育児に専念すべきだという考え方からみた就労状況(女性)



## 性別に合った職業があるとする考え方と女性の就労状況の関係

○性別に合った職業があるとする考え方については、就労状況に違いは見られない。

図表44 性別に合った職業があるとする考え方からみた就労状況(女性)

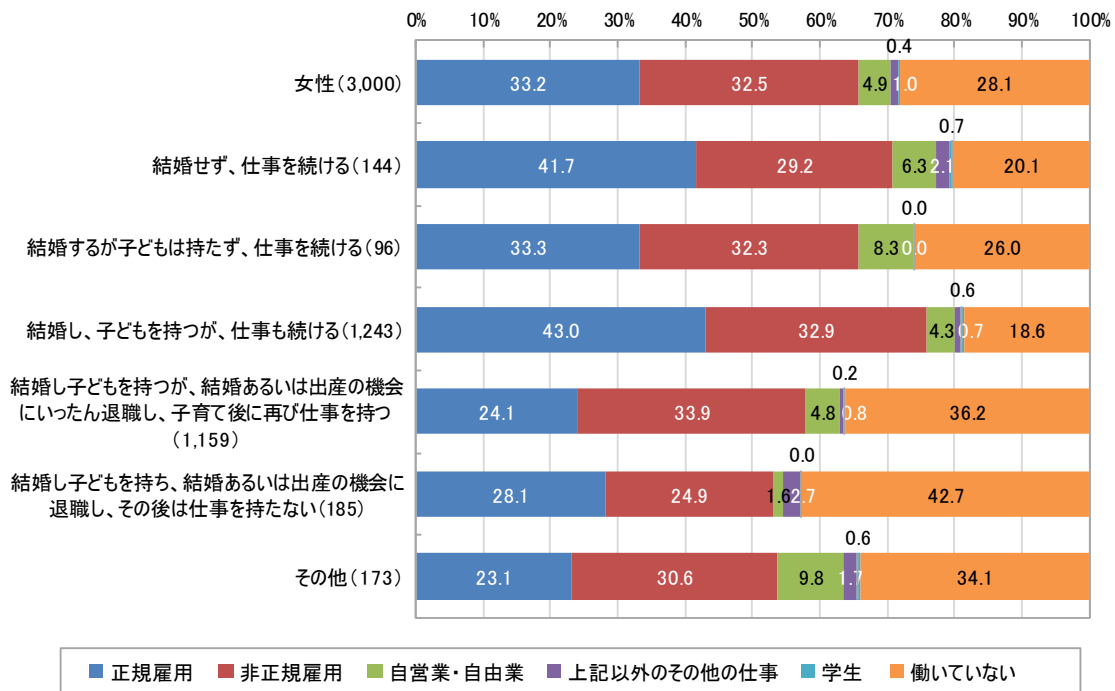


## 望ましい女性のライフコースに関する意識と女性の就労状況の関係

○結婚・出産に関わらず仕事を続けることを望む女性の方が、そうでない女性に比べて「働いていない」の割合は少ない<sup>15</sup>。

○結婚・出産に関わらず仕事を続けることを望む女性での「働いていない」の割合は2割弱または2割半ばであるのに対して、そうでない女性では3割半ばから4割強である。

図表45 望ましい女性のライフコースに関する意識からみた就労状況(女性)

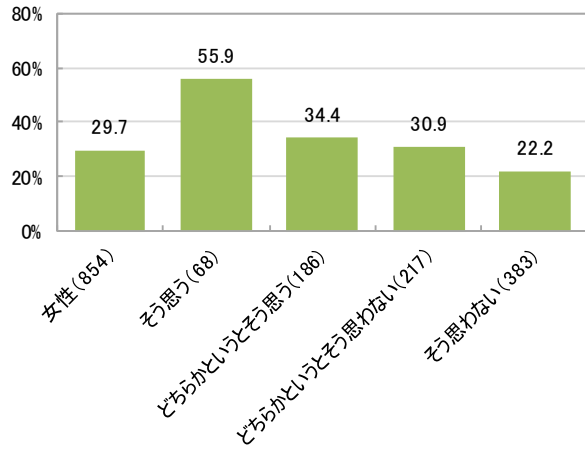


<sup>15</sup> ここでいう「結婚・出産に関わらず仕事を続けることを望む女性」は、「結婚せず、仕事を続ける」、「結婚するが子どもは持たず、仕事を続ける」のいずれかを選択した回答した人である。

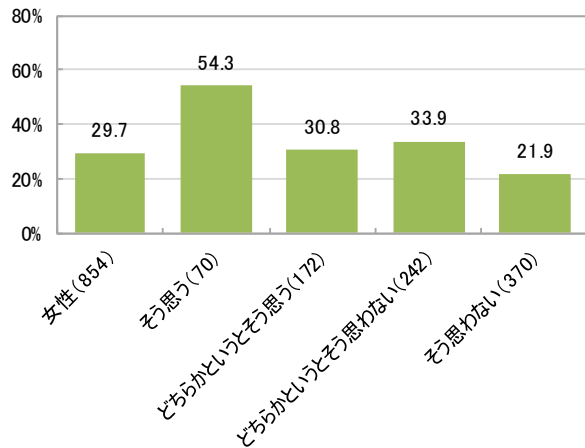
## 働いていない(有償労働をしていない)女性のジェンダー意識と就労意向の関係

- 働いていない(有償労働をしていない)女性のうち、夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという考え方に対して肯定的でない回答になるほど働きたいと思わない割合が少なくなり、「そう思わない」とする女性における「働きたいと思わない」は22.2%である。
- 育児に女性が専念すべきだという考え方について、「そう思う」とする女性では54.3%が「働きたいと思わない」のに対して、「そう思わない」とする女性では21.9%である。
- 性別に合った職業があるとする考え方については、就労意向により違いは見られない。

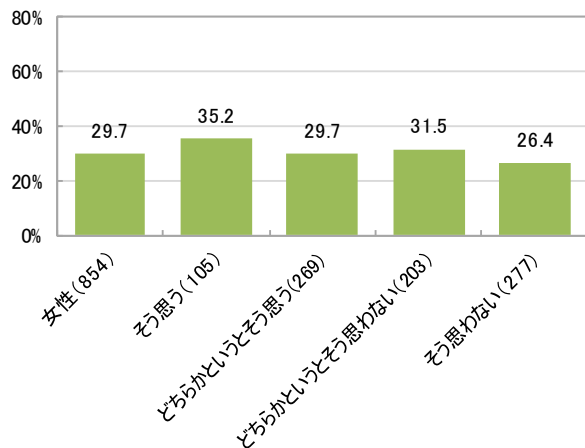
図表46 固定的性別役割分担意識からみた働きたいと思わない女性の割合



図表47 女性は育児に専念すべきだという考え方からみた働きたいと思わない女性の割合



図表48 性別に合った職業があるとする考え方からみた働きたいと思わない女性の割合



## 4. 社会人の学び直しに関する分析

### (1) 学び直し全般

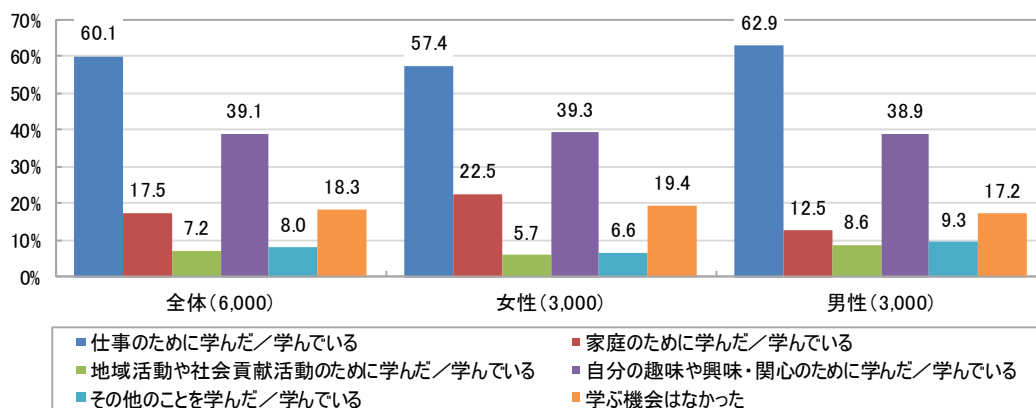
- 【ポイント】
- 過去1年間に何らかの学び(読書やインターネットで検索して自主的に学んだ場合を含む)を行った人は女性で7割半ば、男性で8割半ばである。
  - 過去1年間に何らかのことを学ぶ機会がなかった人は、男性よりも女性の方が多い。
  - 学びの内容をみると、男女ともに仕事のための学びが他の目的よりも多い。

○学校卒業後に何らかのことを学んだ人(「学ぶ機会がなかった」以外を選択した人)は、女性で80.6%、男性で82.8%である。過去1年間では、女性で75.8%、男性で85.0%となり、女性よりも男性の方が多い。

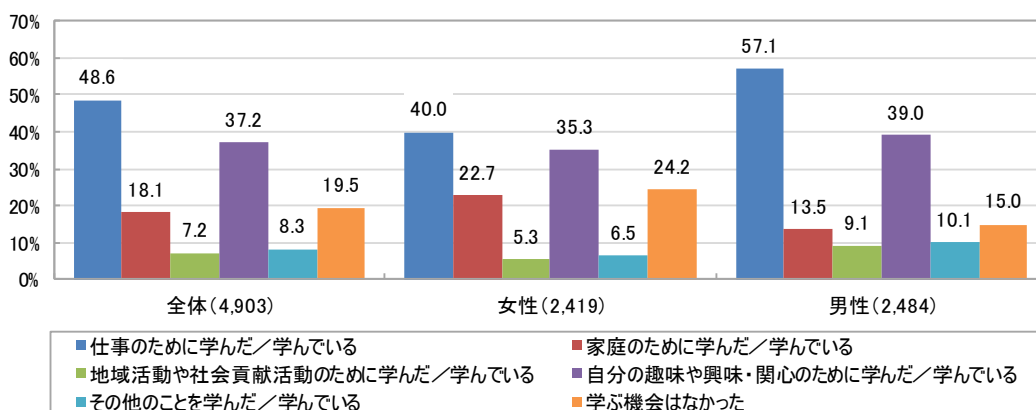
○過去1年間における学びの内容をみると、男女ともに「仕事のために学んだ/学んでいる」が最も多く、女性で40.0%、男性で57.1%である。女性よりも男性の方が多い。

○「家庭のために学んだ/学んでいる」については、女性で22.7%、男性で13.5%と、男性よりも女性の方が多い。

図表49 性別でみた学校卒業後の学び



図表50 性別でみた過去1年間における学び<sup>16</sup>



<sup>16</sup> 過去1年間における学びの状況は、学校卒業後に何らかのことを学んだ人(「学ぶ機会がなかった」以外を選択した人4,903人)が回答している。



## (2) 仕事のための学び

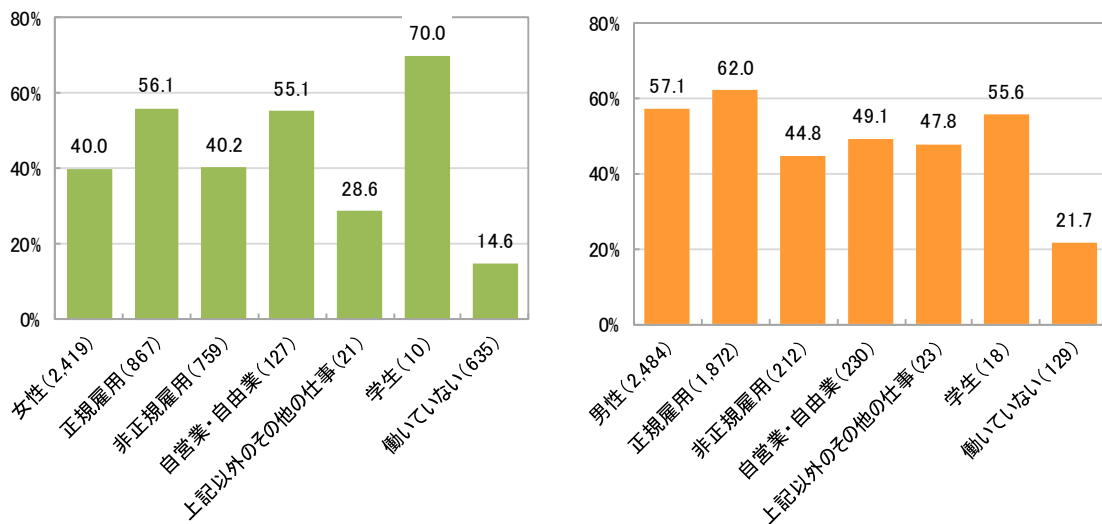
### i) 仕事のための学びの実態

- 【ポイント】**
- 男性に関しては正規雇用で働く人は、非正規雇用で働く人、自営業・自由業の人に比べて、過去1年間に仕事のための学びをしている傾向が見られる。女性では正規雇用と自営業・自由業で働く人が同じ程度学んでいる。
  - 正規雇用で働く人では、女性よりも男性の方が仕事のための学びをしている。
  - 仕事に関する知識・技能を身につける機会として社内研修を選択した割合は、正規雇用が他の雇用形態に比べて多い。また、読書などの手軽な学びや社内研修を除いた学びの機会をみても正規雇用で働く人の方が学んでいる傾向が見られる。
  - 居住地区別に女性の仕事のための学びをみると、東北地区が最も多く、東海地区で最も少ない。

### 就労状況と仕事のための学びの関係

- 就労状況から過去1年間における仕事のための学びの実態をみると、女性では「正規雇用」である場合と「自営業・自由業」である場合が同程度で、それぞれ56.1%、55.1%である。
- 男性では「正規雇用」である場合に、「非正規雇用」、「自営業・自由業」である場合に比べて「仕事のために学んだ／学んでいる」が多く、62.0%である。
- 「正規雇用」である場合は、女性よりも男性の方が「仕事のために学んだ／学んでいる」が多い。
- 男女ともに「働いていない」の場合には「仕事のために学んだ／学んでいる」が働いている(有償労働をしている)人に比べて少なく、女性で14.6%、男性で21.7%である。

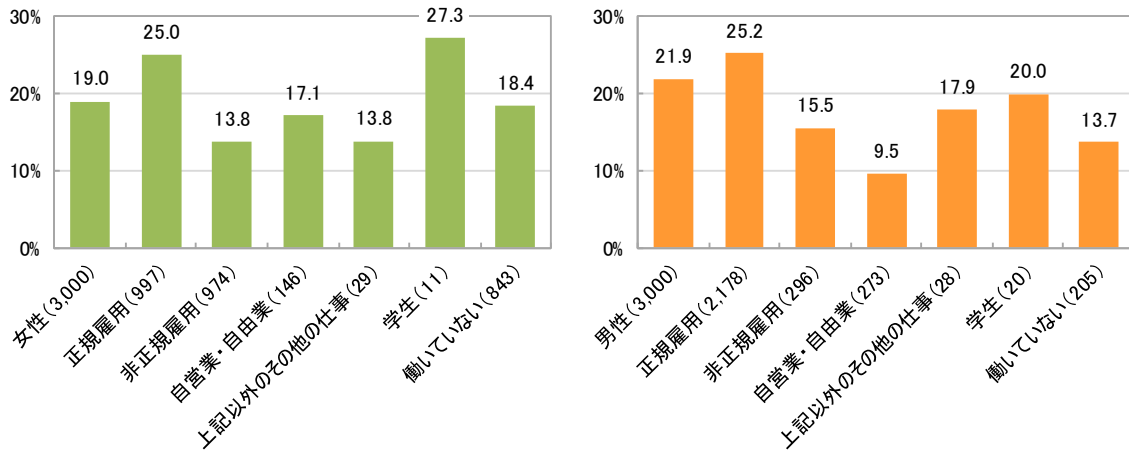
図表51 就労状況別にみた過去1年間における仕事のための学びの割合(左:女性、右:男性)



## 就労状況と社内研修の機会の関係

○仕事のための学びの方法のひとつである社内研修について就労状況別にみると、男女ともに「正規雇用」である場合に、他の就労状況と比べて「社内での研修等」が多く、女性で25.0%、男性で25.2%である。

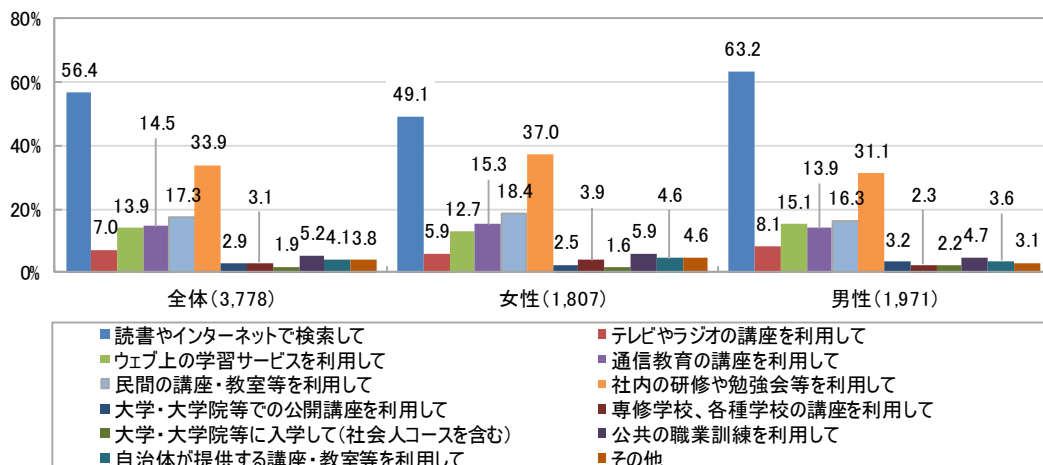
図表52 就労状況別にみた社内の研修等の割合(左:女性、右:男性)



## 就労状況と学習方法を加味した仕事のための学びの関係

○図表49～52における「仕事のために学んだ／学んでいる」は、読書やインターネットで検索した場合や会社や団体などでの研修で学んだ場合も含んでおり、仕事のために学習方法をみると、男女ともに「読書やインターネットで検索して」が最も多く、次いで「社内の研修や勉強会等を利用して」が続く。

図表53 性別でみた過去1年間における仕事のための学びの方法



○前述を踏まえ、時間的・経済的なコストが比較的少ない学びや受動的な学びと、自主的かつコストをかけて学んでいる場合を分けて捉え、後者のかたちで学んでいる人の割合を把握するために、学習方法を分類すると、図表54の通りとなった。

図表54 学習方法に基づく仕事のための学びの分類

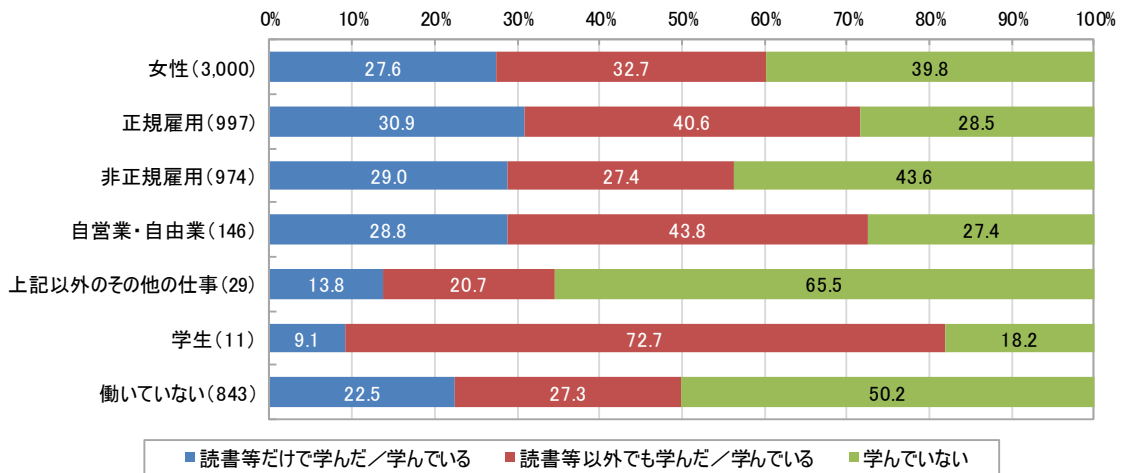
分類	該当する選択肢
読書等だけで学んだ／学んでいる	下記のいずれかだけを選択した場合 <input type="checkbox"/> 読書やインターネットで検索して <input type="checkbox"/> テレビやラジオの講座を利用して <input type="checkbox"/> 社内の研修や勉強会等を利用して
読書等以外でも学んだ／学んでいる	下記のいずれかを選択した場合 <input type="checkbox"/> ウェブ上の学習サービスを利用して <input type="checkbox"/> 通信教育の講座を利用して <input type="checkbox"/> 民間の講座・教室等を利用して <input type="checkbox"/> 大学・大学院等での公開講座を利用して <input type="checkbox"/> 専修学校、各種学校の講座を利用して <input type="checkbox"/> 大学・大学院等に入学して(社会人コースを含む) <input type="checkbox"/> 公共の職業訓練を利用して <input type="checkbox"/> 自治体が提供する講座・教室等を利用して <input type="checkbox"/> その他 ※「読書等だけで学んだ／学んでいる」に該当する3つを選択した場合も、上記の選択肢を選んでいる場合は「読書等以外でも学んだ／学んでいる」に該当する。

○「読書等以外でも学んだ／学んでいる」は、女性で32.7%、男性で32.6%である。

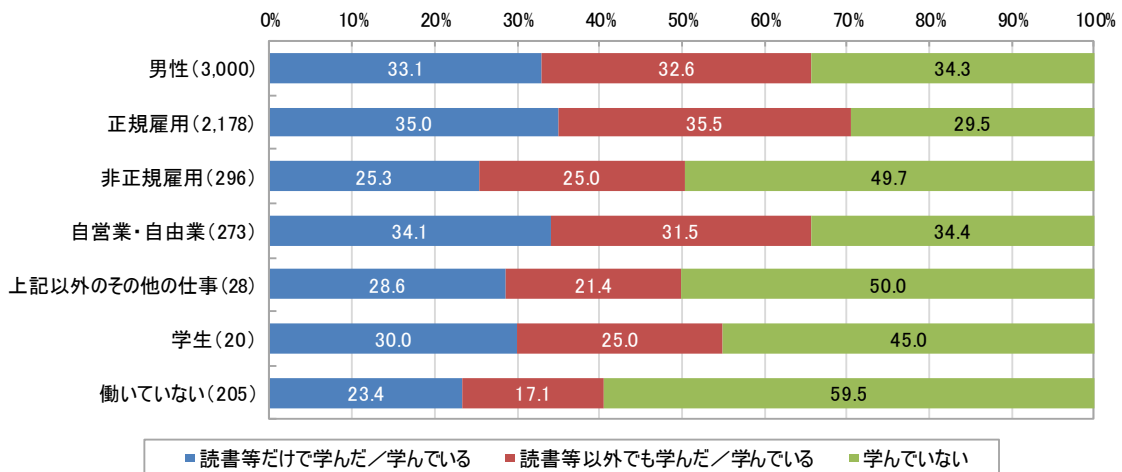
○就労状況別にみると、「正規雇用」である場合に、「非正規雇用」や「働いていない」場合に比べて「読書等以外でも学んだ／学んでいる」が多く、女性で40.6%、男性で35.5%である。

○学習方法に関わらず仕事のための学びの実態をみた場合には、男性の方が女性よりも仕事のための学びを行っているが、「読書等以外でも学んだ／学んでいる」に関しては男女の違いは見られない。また「正規雇用」である場合には、女性の方が多い。

図表55 就労別にみた学習方法を加味した過去1年間における仕事のための学び(女性)



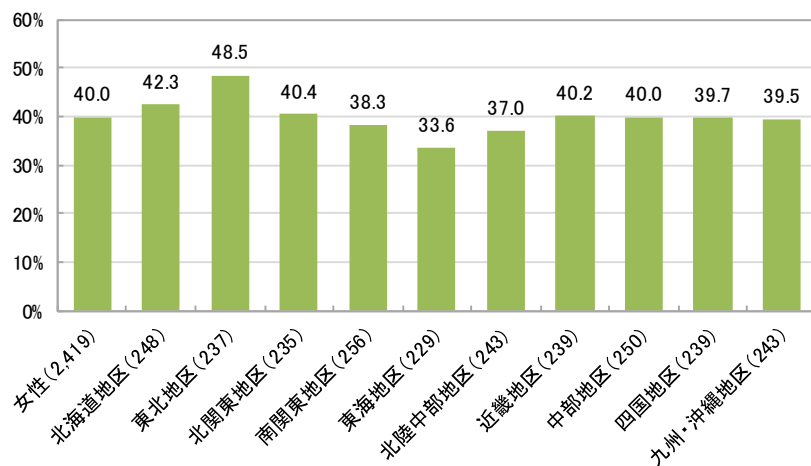
図表56 就労別にみた学習方法を加味した過去1年間における仕事のための学び(男性)



### 居住地区と仕事のための学びの関係

○居住地区別に女性の仕事のための学びをみると、「東北地区」に住む女性で最も多く48.5%である。最も少ないのは「東海地区」に住む女性で33.6%である。

図表57 居住地区でみた過去1年間における仕事のための学びの割合(女性)



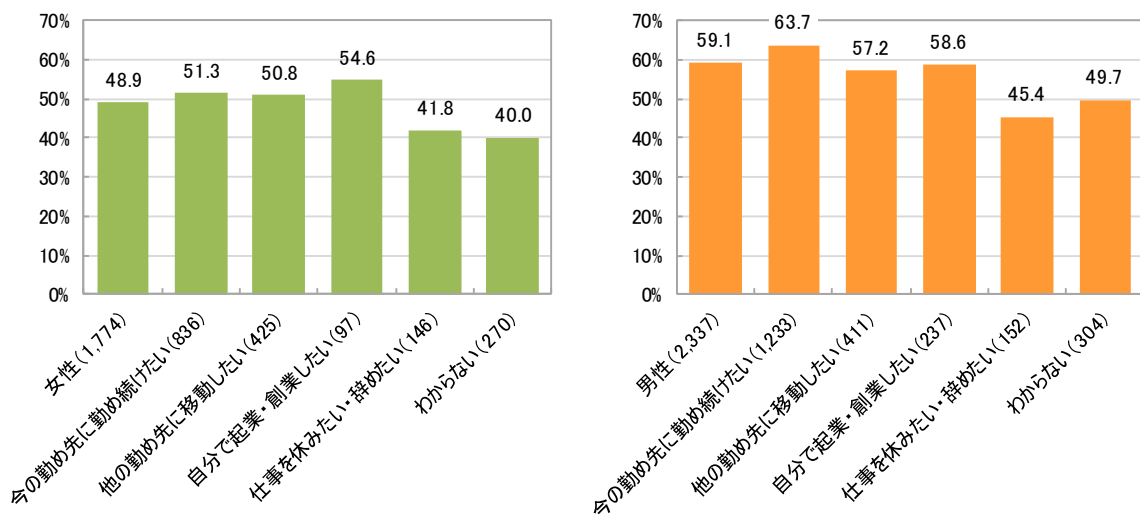
## ii) 就労意向からみた仕事のための学びの実態

- 【ポイント】**
- 働いている(有償労働をしている)人に関しては、男女ともに仕事を休みたい・辞めたいと思っている場合よりも、何らかのかたちで働き続けたいと思う場合の方が仕事のための学びを行っている。
  - 働いていない(有償労働をしていない)人に関しては女性において、正規雇用を志向する場合に、非正規雇用を志向する場合や働きたいと思わない場合に比べて、仕事のための学びを行っている。
  - 働いておらず、何らかのかたちで働きたいと思う女性は、働きたいと思わない女性に比べて、読書などの手軽な学び以外の方法で学ぶ傾向が見られる。
  - 就労状況に対して不満を感じているために仕事に対して学ぶという傾向は見られず、男女ともに就労状況に満足している方が学びを行っている。

### 働いている(有償労働をしている)人の就労意向と仕事のための学びの関係

- 働いている(有償労働をしている)人について今後の就労意向から仕事のための学びをみると、女性では何らかのかたちで働き続けたいと思っている場合に仕事のための学びを行っている。そのうち、「自分で起業したい・創業したい」と思う場合が最も多く、54.6%である。
- 男性では「今の勤め先に勤め続けたい」と思う場合、「他の勤め先に移動したい」に比べて「仕事のために学んだ／学んでいる」が多く、63.7%である。
- 男女ともに、「仕事を休みたい・辞めたい」と思う場合に、他に比べて「仕事のために学んだ／学んでいる」は少なく、女性で41.8%、男性で45.4%である。
- 男女ともに、「他の勤め先に移動したい」と思う人で特に「仕事のために学んだ／学んでいる」が多くなっているということは見られない。

図表58 働いている(有償労働をしている)人の就労意向からみた過去1年間における仕事の学びの割合  
(左:女性、右:男性)



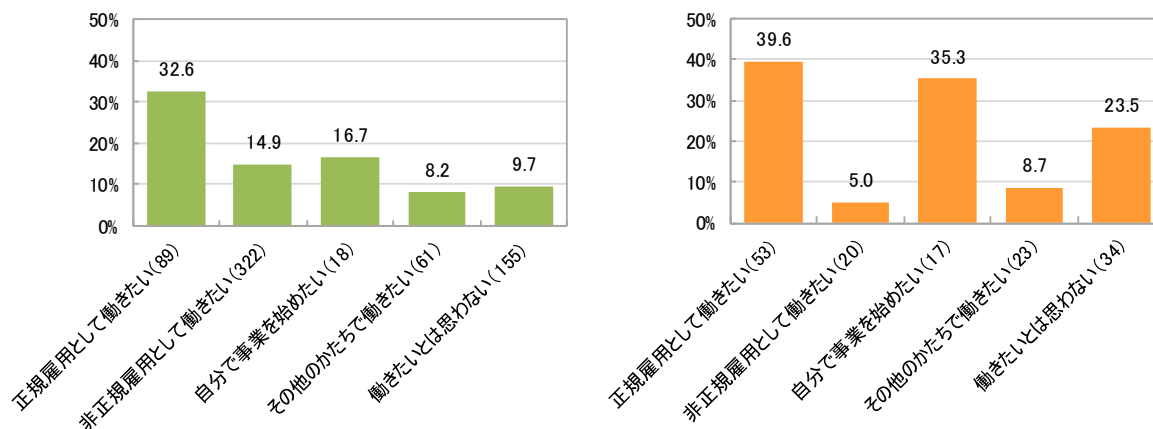
### 働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向と仕事のための学びの関係

○働いていない(有償労働をしていない)人については、男女ともに「正規雇用として働きたい」という場合で最も多く、女性で32.6%、男性で39.6%である。女性では、「正規雇用として働きたい」という場合の方が、「非正規雇用として働きたい」、「働きたいとは思わない」に比べて多い。

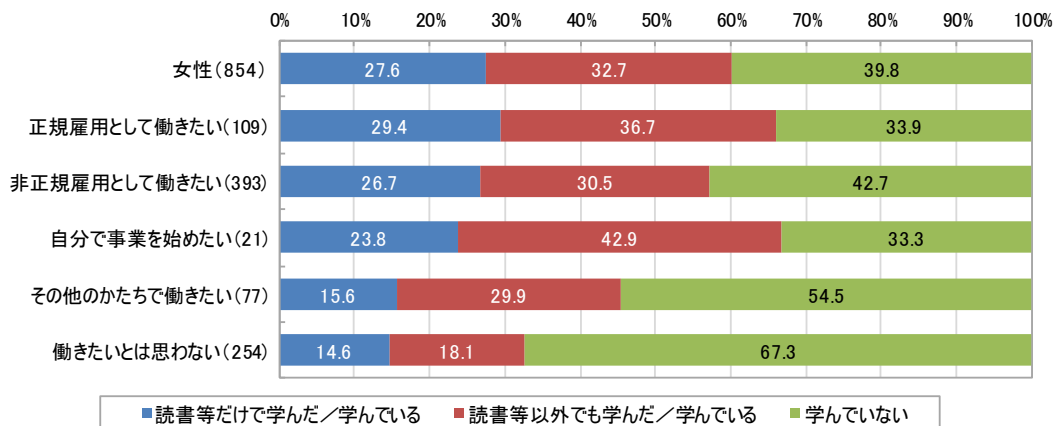
○学習方法を加味して学びの実態をみると、「読書等以外でも学んだ／学んでいる」の割合は男女ともに「正規雇用として働きたい」という場合に多く、女性で36.7%、男性で27.9%である。

○女性に関しては、「働きたいとは思わない」という場合に、「読書以外でも学んだ／学んでいる」が他の場合に比べて少ない。

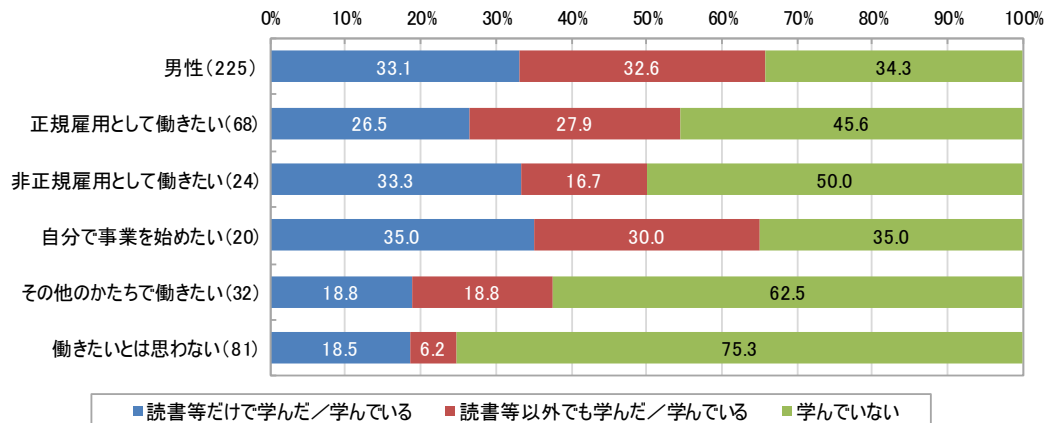
図表59 働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向からみた過去1年間における仕事の学びの割合 (左:女性、右:男性)



図表60 働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向からみた学習方法を加味した学び(女性)



図表61 働いていない(有償労働をしていない)人の就労意向からみた学習方法を加味した学び(男性)

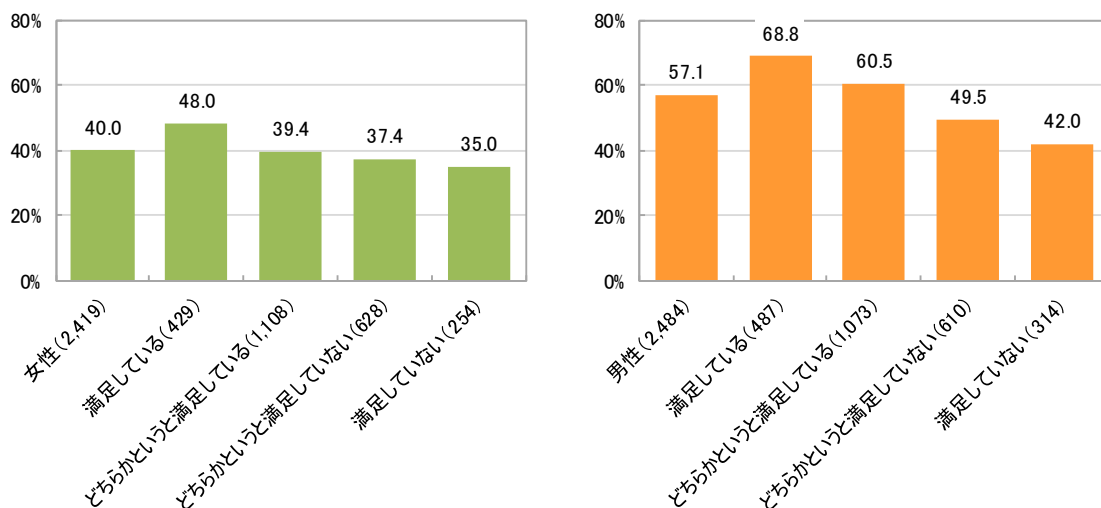


### 就労状況に対する満足度と仕事のための学びの関係

○現在の就労状況に対する満足度から過去1年間における仕事の学びをみると、男女ともに「満足している」方が、「満足していない」場合よりも「仕事のために学んだ／学んでいる」が多い。

○女性では、「満足している」場合は48.0%、「満足していない」場合は35.0%であり、満足度による差は女性よりも男性の方が大きい。男性については、「満足している」場合には「仕事のために学んだ／学んでいる」は68.8%であり、「満足していない」場合の42.0%である。

図表62 就労状況に対する満足度からみた過去1年間における仕事のための学びの割合(左:女性、右:男性)



### iii) 仕事のための学びの効果

**【ポイント】** ■男性に比べると女性の方が学習活動を仕事やキャリアに活かしていないと思う傾向が見られる。ただし、将来的なキャリアアップにつながると期待している割合に男女間の差は見られない。

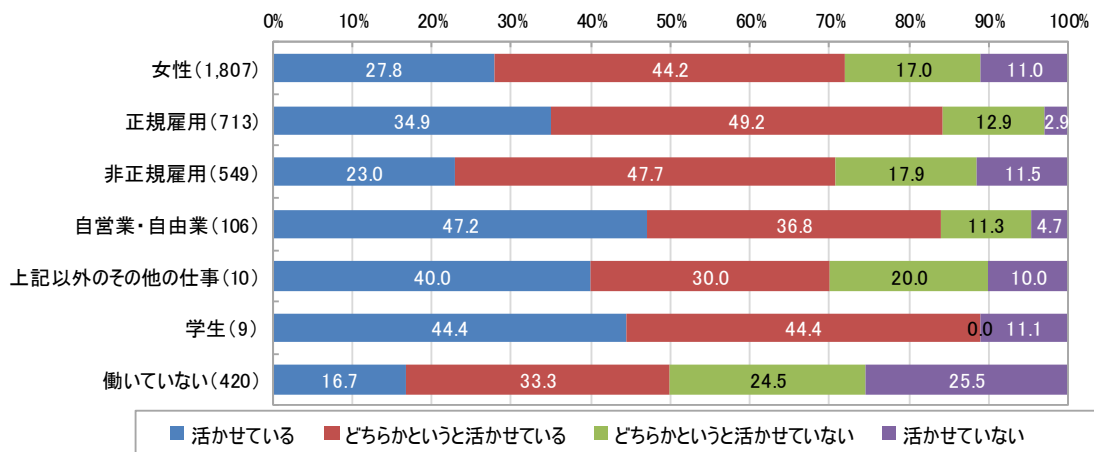
■学習方法別に仕事のための学びを活かしているかどうかという実感をみると、教育機関での講座や大学・大学院等で学び直すことが効果があると実感されていることが分かる。

#### 現在の仕事・キャリアアップに対する効果

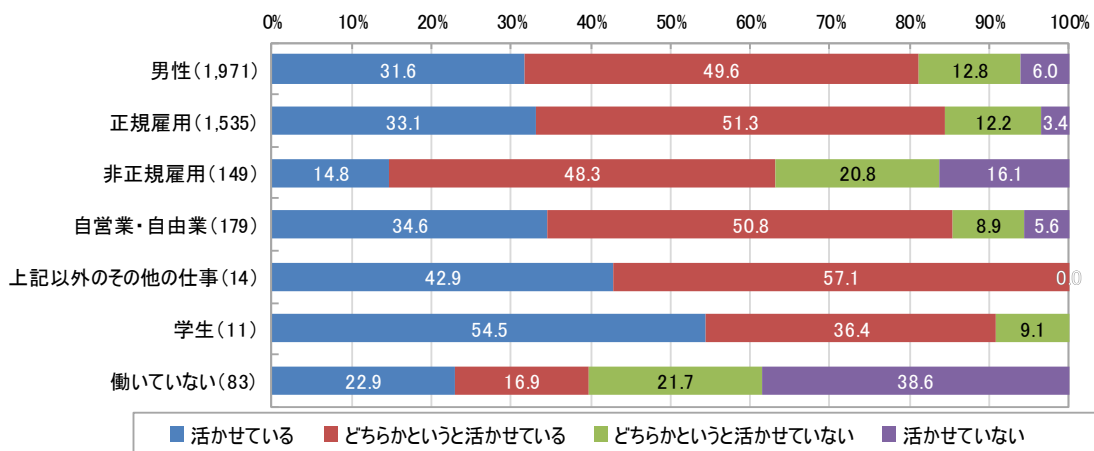
○仕事のための学びが活かしていると思う人の割合（「活かしている」と「どちらかという活かしている」の合計）をみると、女性で72.0%、男性で81.2%である。女性よりも男性の方が活かしていると思う人の割合は多い。

○就労状況別にみると、「正規雇用」である場合に、「非正規雇用」、「働いていない」場合に比べて多く、女性で84.1%、男性で84.4%である。「正規雇用」である場合には男女で同程度となる。

図表63 就労状況別にみた仕事のための学びが活かしているという実感(女性)



図表64 就労状況別にみた仕事のための学びが活かしているという実感(男性)



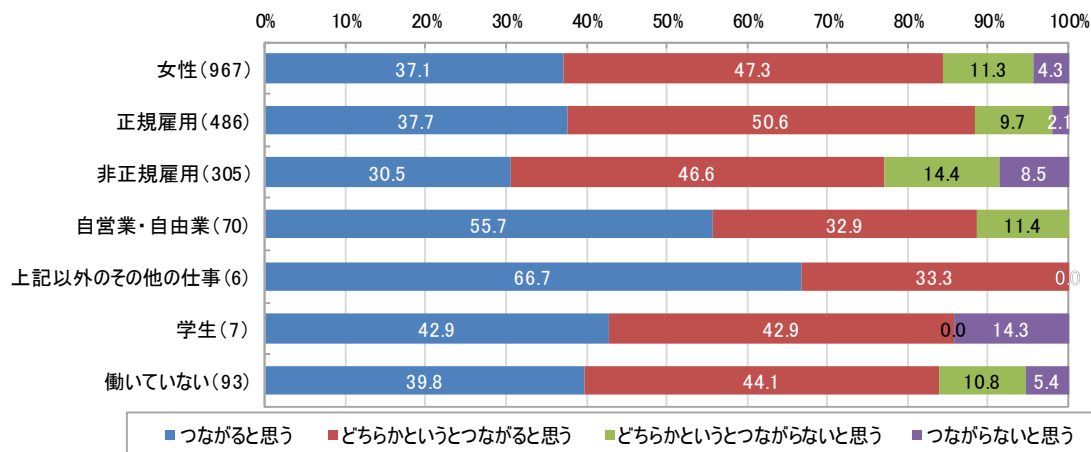


## 将来の仕事・キャリアアップに対する効果

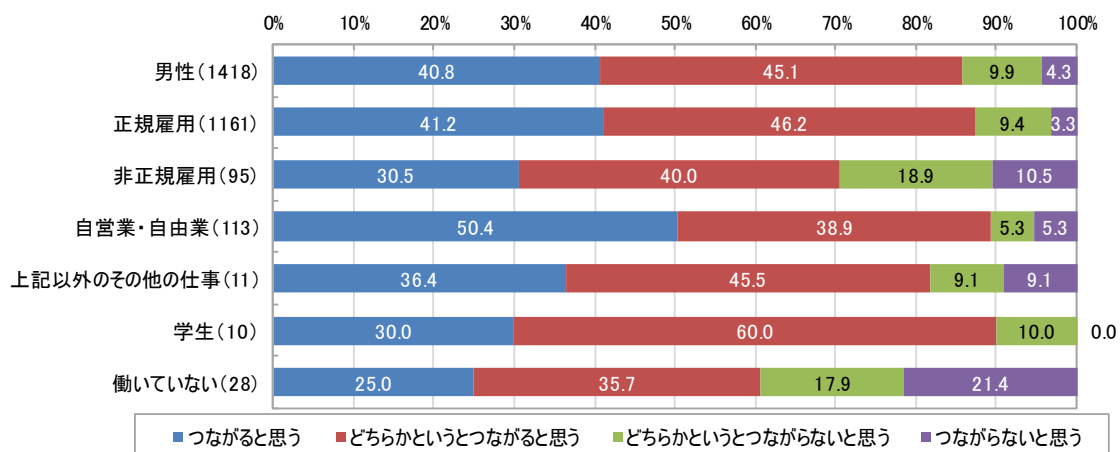
○仕事のための学びが将来につながると思う人の割合（「つながると思う」と「どちらかというにつながると思う」の割合の合計）は、女性で84.4%、男性で85.9%である。

○現在の仕事に活かせていると思う人の割合とは異なり、男女間の差は見られない。

図表65 就労状況別にみた仕事のための学びが将来につながるという実感(女性)



図表66 就労状況別にみた仕事のための学びが将来につながるという実感(男性)

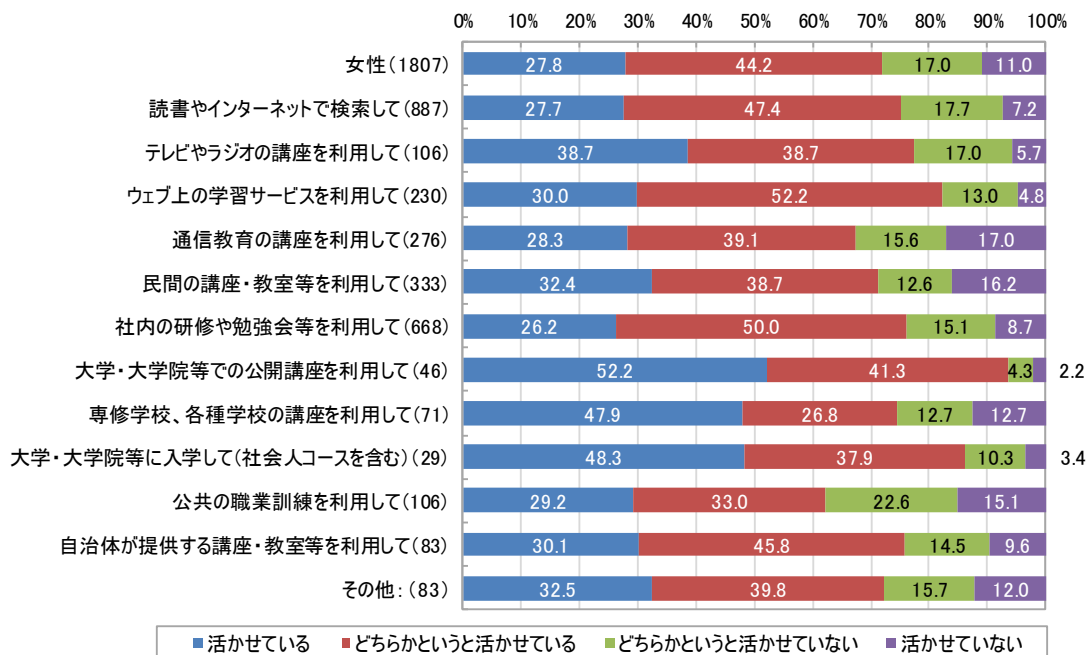


## 学習方法と活かしているかどうかという実感の関係

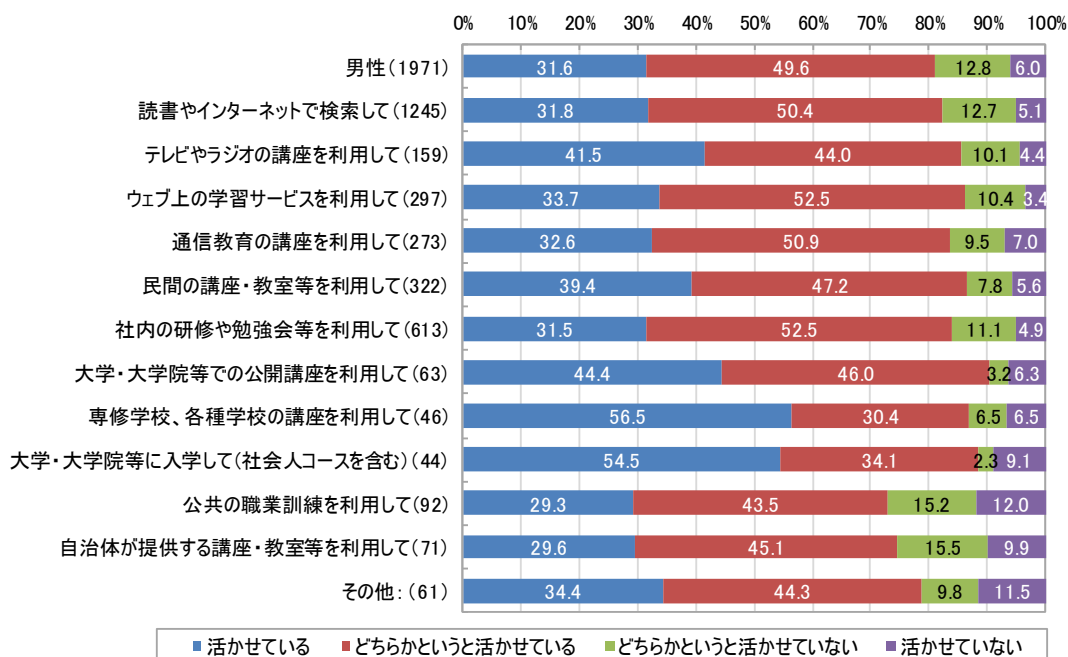
○学習方法別に仕事のための学びの効果の実感をみると、女性において「活かしている」が最も多いのは、「大学・大学院等での公開講座を利用して」で52.2%である。次いで「大学・大学院等に入学して」が48.3%、「専修学校、各種学校の講座を利用して」が47.9%である。

○男性では、「専修学校、各種学校の講座を利用して」が56.5%で最も多く、「大学・大学院等に入学して」が54.5%で続く。

図表67 学習方法別にみた仕事のための学びが活かしているという実感(女性)



図表68 学習方法別にみた仕事のための学びが活かしているという実感(男性)



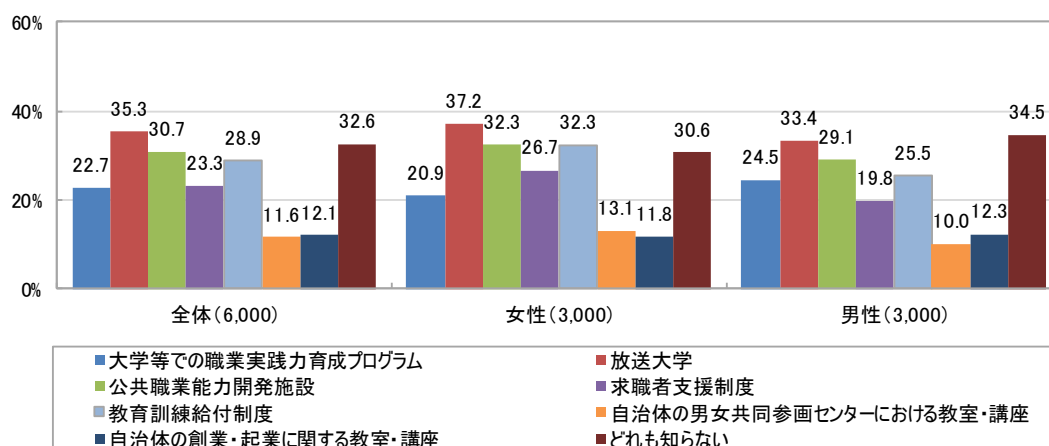
#### iv) 学びの方法に対する認知

- 【ポイント】**
- 大学等での学び直しの機会に関しては、職業実践力育成プログラムの認知度は全体で2割である(放送大学が3割)。女性より男性の方に認知されており、また若い年代の方が知られている。
  - その他、求職者支援制度に関しては、男女ともに非正規雇用で働く人で認知度がやや高い。
  - 男女共同参画センターについては男女ともに1割程度の認知度で、他の学びの機会に比べて低い。

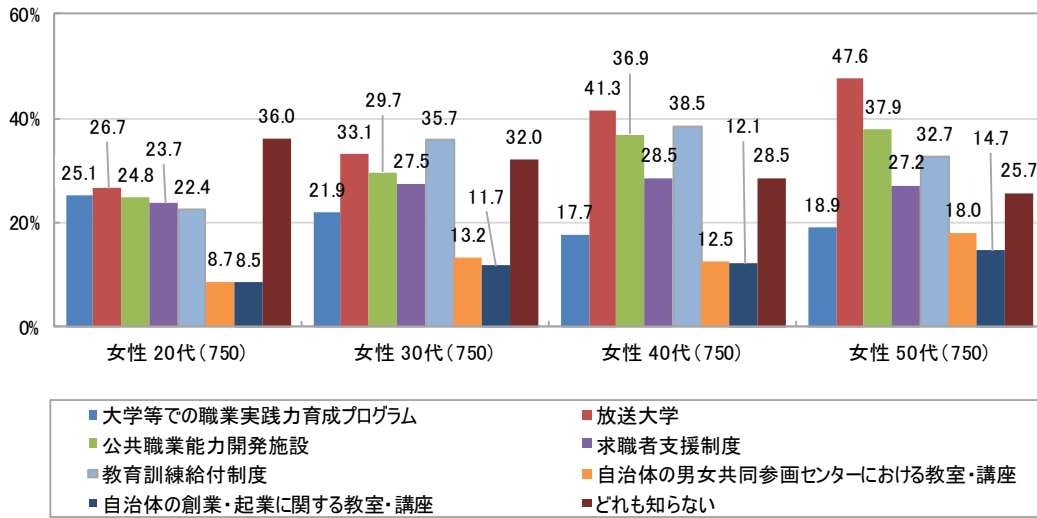
#### 学びの方法に対する認知

- 女性では「放送大学」が37.2%で最も多く、次いで「公共職業能力開発施設」と「教育訓練給付制度」が32.3%で続く。これらは「どれも知らない」よりも多い。
- 男性では「どれも知らない」が34.5%で最も多い。具体的な方法のうち最も知られているのは「放送大学」で33.4%、次いで「公共職業能力開発施設」が29.1%で続く。
- 「大学等での職業実践力育成プログラム」は、女性で20.9%、男性で24.5%である。「自治体の男女共同参画センターにおける教室・講座」は女性で13.1%、男性で10.0%である。男女ともに若い世代の方が認知されている。
- 年代別にみると、女性では若い年代の方が「どれも知らない」が多く、50代で25.7%であるのに対して、20代で36.0%である。男性では20～40代で「どれも知らない」が最も多い。

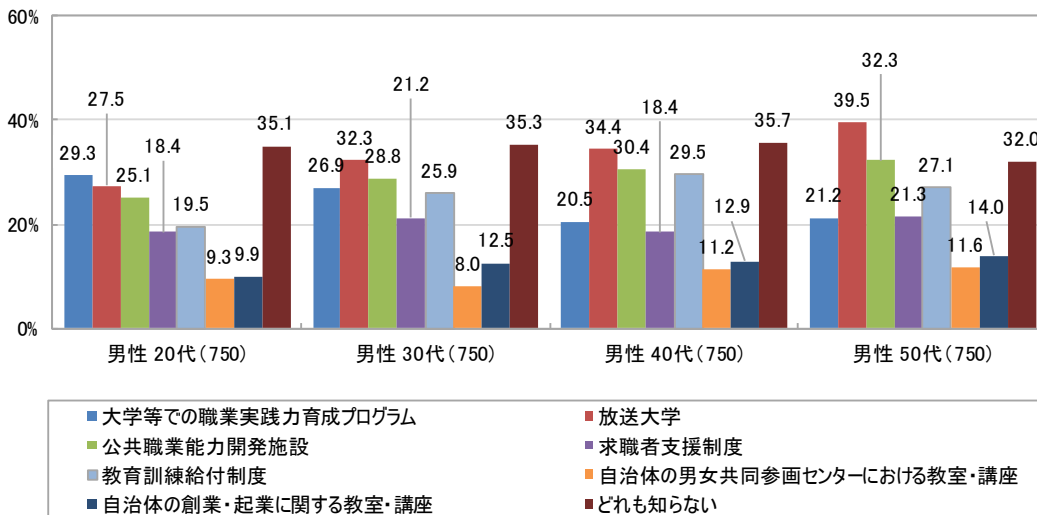
図表69 性別でみた学びの方法の認知



図表70 性別・年代別にみた学びの方法の認知(女性)



図表71 性別・年代別にみた学びの方法の認知(男性)



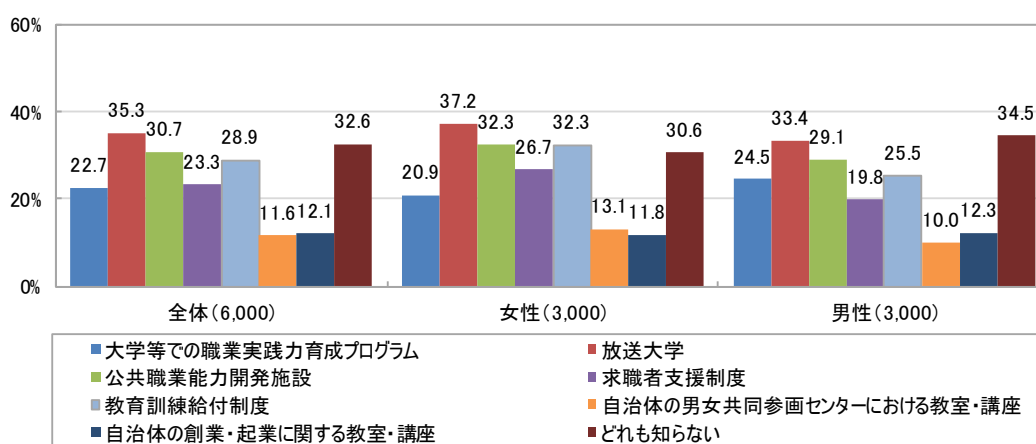
## 就労状況と学びの方法に対する認知

○就労状況別に学びの方法に対する認知をみると、女性では「正規雇用」及び「自営業・自由業」である場合には「放送大学」が最も多く、それぞれ36.9%、41.8%である。「非正規雇用」である場合に最も多いのは「教育訓練給付制度」で35.1%である。

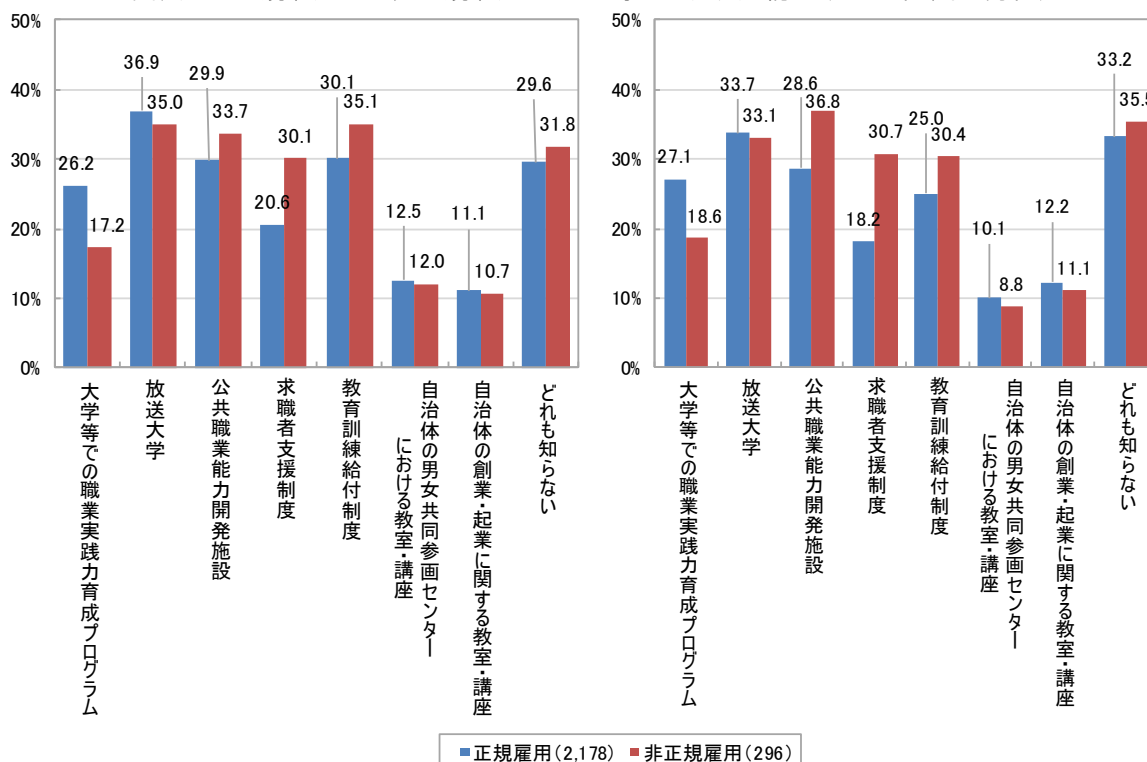
○男性では「正規雇用」である場合には「放送大学」が33.7%で最も多く、「非正規雇用」である場合には「公共職業能力開発施設」が36.8%で最も多い。

○「正規雇用」と「非正規雇用」の間での方法別の認知の差をみると、男女ともに、「正規雇用」である方が「大学等での職業実践力育成プログラム」が多く、「非正規雇用」である方が「求職者支援制度」が多い。また、男性に関しては「公共職業能力開発施設」についても「非正規雇用」の方が多い。

図表72 性別でみた学びの方法の認知



図表73 正規雇用及び非正規雇用における学びの方法の認知(左:女性、右:男性)



## v) 仕事のための学びのハードル

【ポイント】 ■女性では「経済的な支援があること」が最も多く、男性では「仕事にかかる負担が少なくなること」が最も多い。

■男女間の差をみると家事の負担軽減に対するニーズに差が見られる。特に未就学児と同居している場合に顕著である。

### 仕事のための学びのハードル

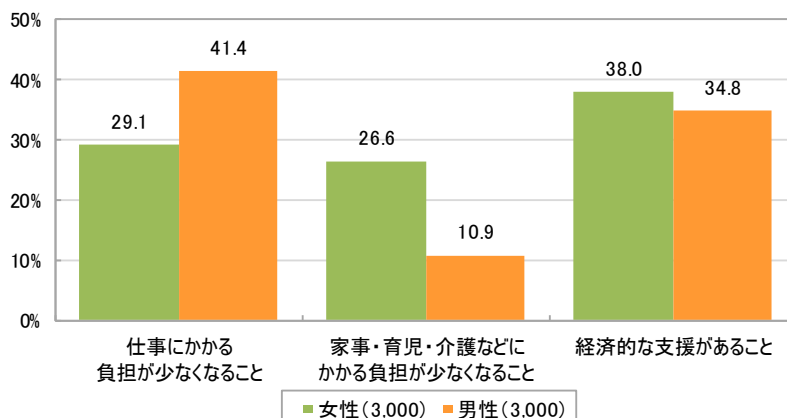
○過去1年間における仕事のための学びの有無を問わず、仕事のための学びに必要な支援をみると、女性では「経済的な支援があること」が38.0%で最も多く、男性で最も多いのは「仕事にかかる負担が少なくなること」で41.4%である。

○男女間の差をみると、女性の方が男性よりも「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」が多く、女性で26.6%、男性で10.9%となっている。

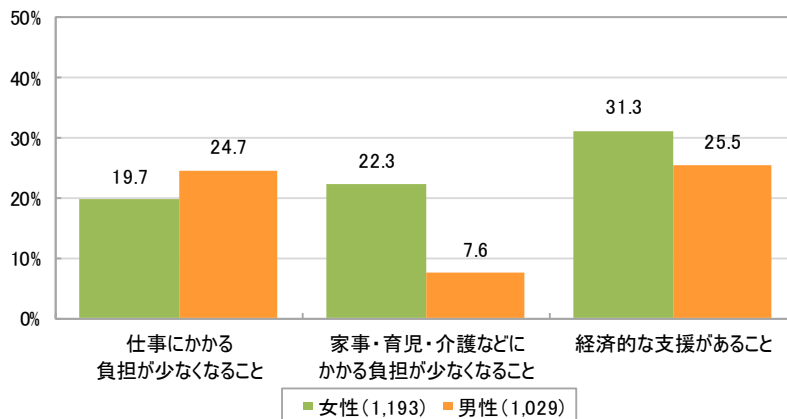
○過去1年間において仕事のための学びをしていない人が求める支援をみると、男女ともに「経済的な支援があること」が最も多く、女性で31.3%、男性で25.5%である。

○「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」における男女間の差は、全体と同様の傾向が見られる。

図表74 性別でみた仕事のための学びに必要な支援<sup>17</sup>



図表75 性別でみた仕事のための学びに必要な支援(仕事のための学びをしていない人)

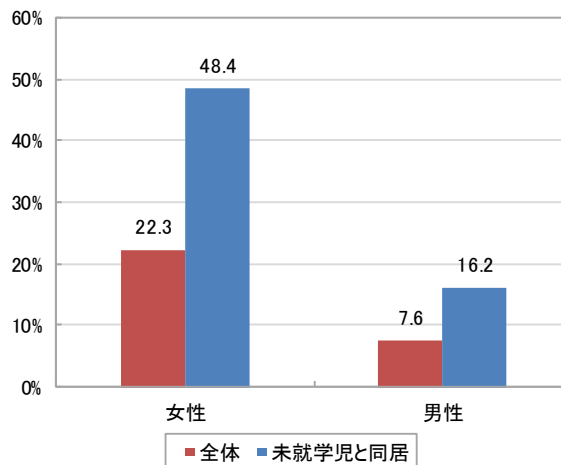


<sup>17</sup> 図表74は、選択肢のうち「わからない」を除いた、上位3位のみを抽出して図表にしている。

### 未就学児と同居する場合における家事負担の軽減を求める割合の男女間の差

- 「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」における男女間の差が大きいことを踏まえ、さらに未就学児と同居している場合の差を分析すると、未就学児と同居する女性の場合、「家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなること」は48.4%であり、全体の22.3%に比べて多い。
- 未就学児と同居する男性では16.2%であり、全体に比べると多いが、未就学児と同居する女性と比べると少ない。

図表76 未就学児との同居の有無からみた家事・育児・介護などにかかる負担が少なくなる支援に対するニーズ  
(仕事のための学びをしていない人)



### (3) 仕事以外の活動のための学び

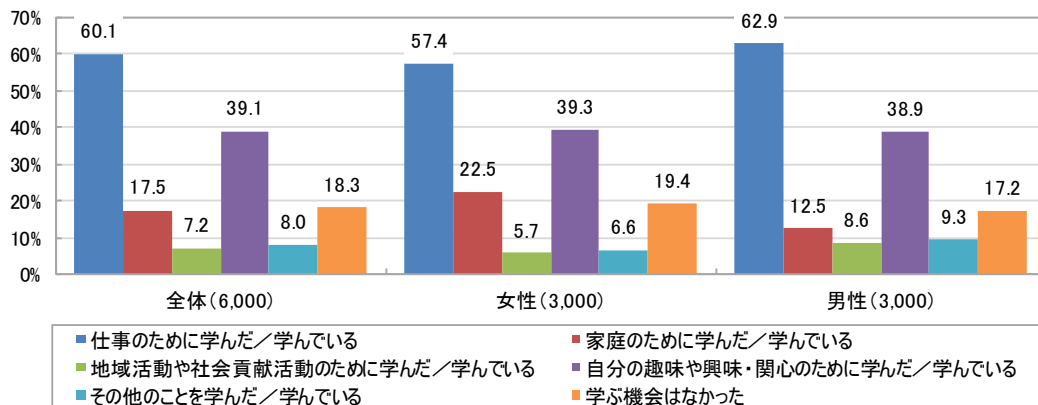
#### i) 仕事以外の活動のための学びの内容

- 【ポイント】 ■家庭のための学びは女性の方が男性に比べて行っており、いずれの年代にも同様の傾向が見られる。
- 男性における仕事以外の活動のための学びを年代別にみると、30代では家庭のために学んでおり、20代では地域活動等のための学びを行っている傾向が見られる<sup>18</sup>。
- 女性については20代・30代で家庭のために学ぶ傾向が見られる。

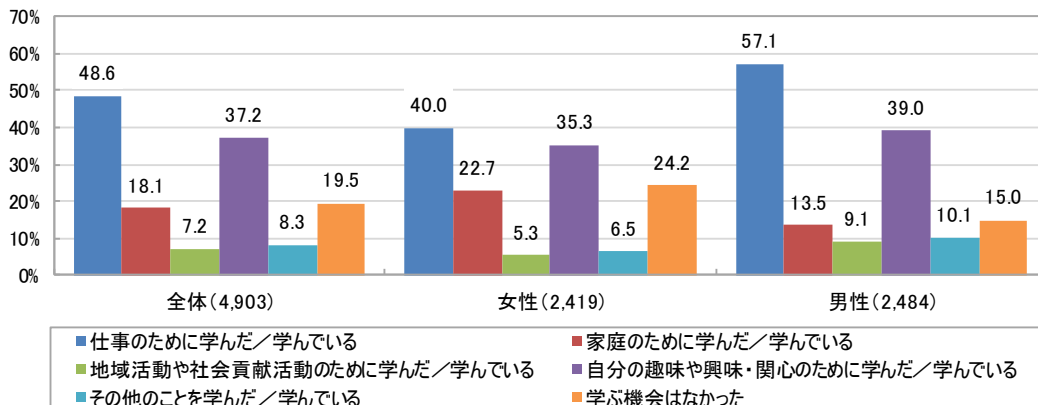
○学校卒業後における仕事以外の活動のための学びをみると、男女ともに「自分の趣味や興味・関心のために学んだ／学んでいる」が最も多く、女性で39.3%、男性で38.9%である。次いで「家庭のために学んだ／学んでいる」が多く、女性が22.5%、男性が12.5%である

○過去1年間においては「家庭のために学んだ／学んでいる」については女性が22.7%、男性が13.5%で、男性よりも女性の方が多い。「自分の趣味や興味・関心のために学んだ／学んでいる」は女性が35.3%、男性が39.0%であり、女性よりも男性の方が多い。

図表77 性別でみた学校卒業後の学び(再掲)



図表78 性別でみた過去1年間における学び(再掲)



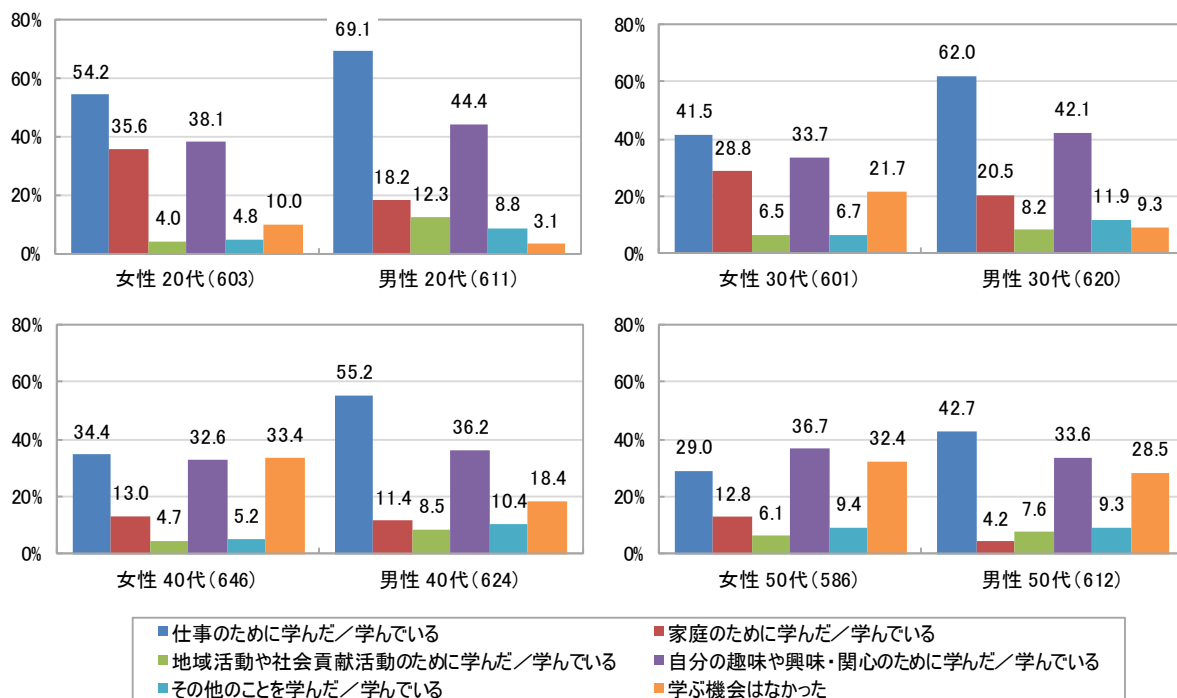
<sup>18</sup> ここでいう「仕事以外の活動のための学び」とは、図表77中の「家庭のために学んだ／学んでいる」、「地域活動や社会貢献活動のために学んだ／学んでいる」、「自分の趣味や興味・関心のために学んだ／学んでいる」、「その他のことを学んだ／学んでいる」である。



○年代別にみると、「家庭のために学んだ／学んでいる」は40代以外の年代で、男性よりも女性の方が  
多い。また、女性のなかでは20代・30代がその上の年代に比べて多い。

○その他、「地域活動や社会貢献活動のための学んだ／学んでいる」については男性20代が他に比べ  
て多い。

図表79 性別・年代別にみた過去1年間における学び  
(左上:20代、右上:30代、左下:40代、右下:50代)

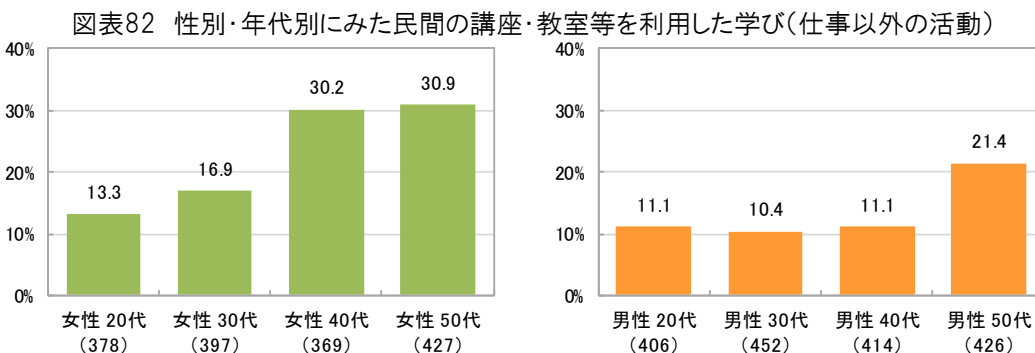
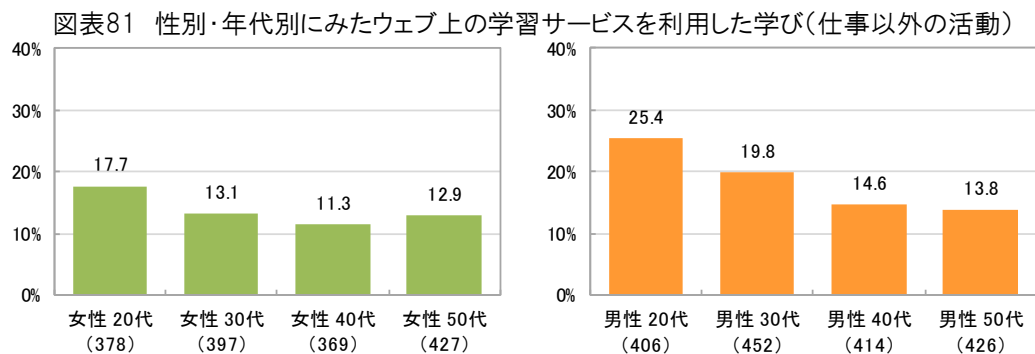
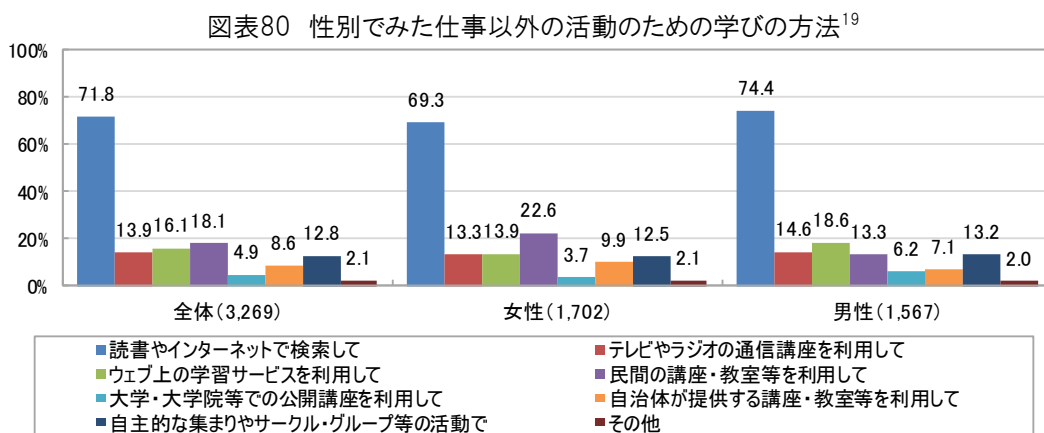


## ii) 仕事以外の活動のための学びの方法

【ポイント】 ■ 仕事以外の活動のための学びは読書やインターネットが使われることが多い。

■ 若い男性ではウェブ上の学習サービスが利用される傾向にあり、女性の40代・50代では民間の講座・教室等が利用されることが多い。

- 仕事以外の活動のための学びの方法としては、男女ともに「読書やインターネットで検索して」が多く、女性で69.3%、男性で74.4%である。
- 性別・年代別に学習方法をみると、「ウェブ上の学習サービスを利用して」は20代・30代で男性の方が多く、男性においては若い年代の方が多。
- 「民間の講座・教室等を利用して」は30代以上では女性の方が多く、女性においては40代・50代でそれより若い年代よりも多。



<sup>19</sup> 図表77の選択肢「家庭のために学んだ／学んでいる」、「地域活動や社会貢献活動のために学んだ／学んでいる」、「自分の趣味や興味・関心のために学んだ／学んでいる」、「その他のことを学んだ／学んでいる」を選択した3,269人が回答している。

### iii) 仕事以外の活動のための学びの効果

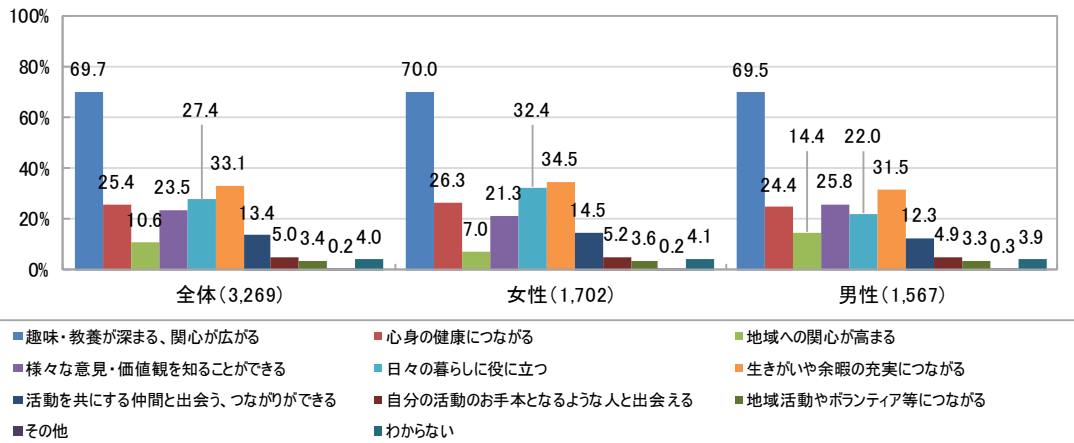
【ポイント】 ■男女ともに趣味・教養の深まりや関心の広がりを効果として感じている。

■男性では、女性に比べて、地域への関心の高まりを効果と感じており、女性では日々の暮らしに役立つと感じている。女性では特に若い世代で割合が多い。

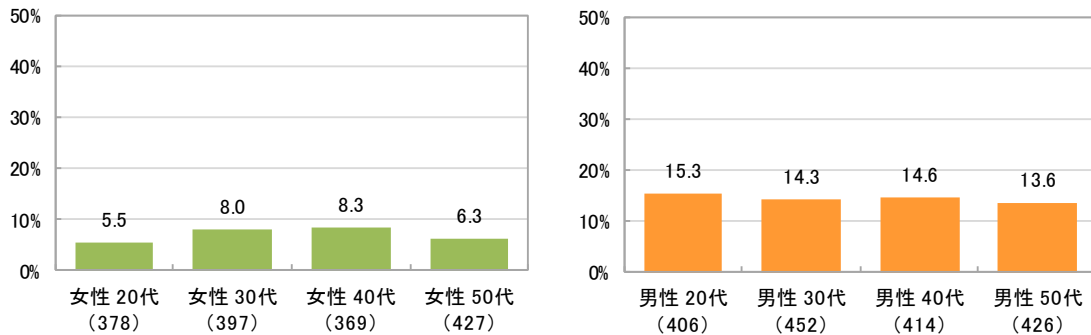
○女性の方が「日々の暮らしに役に立つ」が多く、年代別にみてもいずれの年代も女性の方が多く、男女ともに若い世代の方が多く。

○男性の方が「地域への関心が高まる」が多く、年代別にみてもいずれの年代も男性の方が多く。

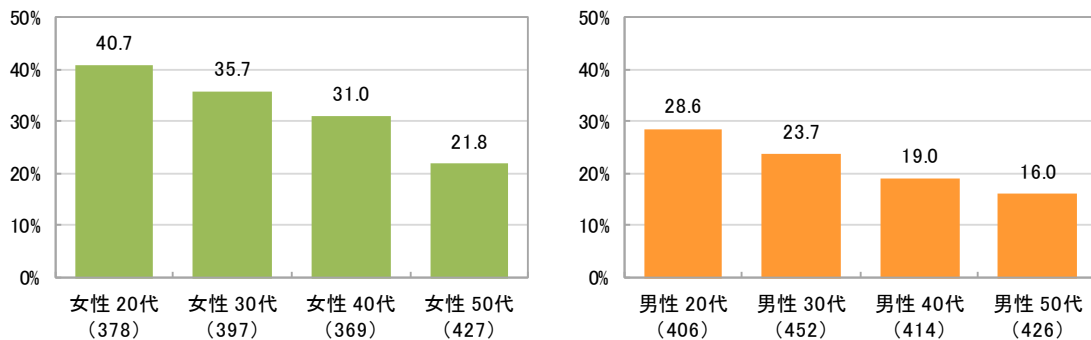
図表83 性別でみた仕事以外の活動のための学びの効果



図表84 性別・年代別にみた地域への関心が高まる効果を感じる人の割合



図表85 性別・年代別にみた日々の暮らしに役に立つという効果を感じる人の割合

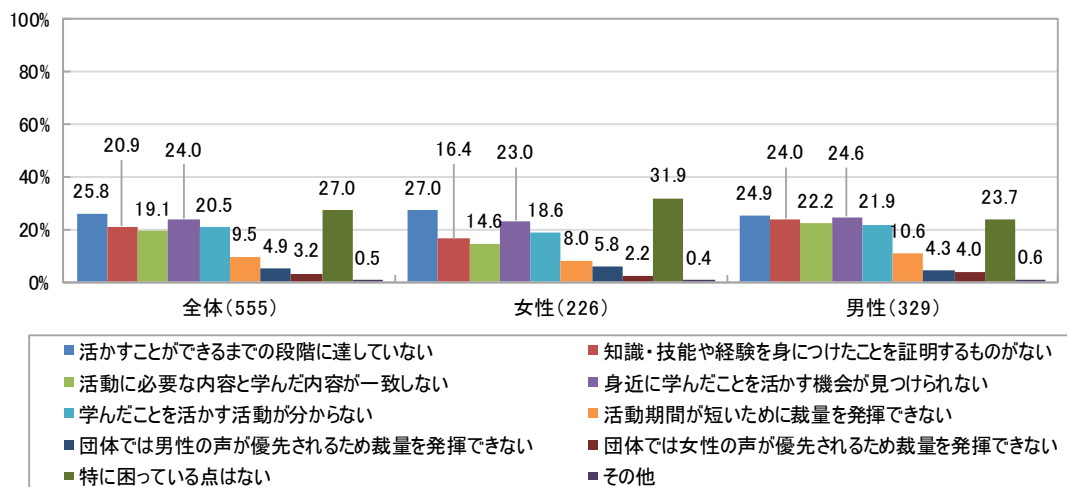


#### iv)地域活動や社会貢献活動のための学びを活かす上でのハードル

- 【ポイント】 ■地域活動や社会貢献活動のために学んでいる人がその学習成果を活かす上では、男性よりも女性の方が、「特に困っている点はない」という回答が多い。
- また、男女ともに、若い年代ほど、「特に困っている点はない」という回答が少ない傾向が見られる。
- 学習成果を活かそうとする上で、地域活動等を行う団体における性差による裁量の違いによって活かせていないと感じる人は1割未満と少ない。

- 女性では「特に困っている点はない」が31.9%で最も多く、次いで「活かすことができるまでの段階に達していない」が27.0%で続く。
- 男性における「特に困っている点はない」は23.7%であり、女性の方が多い。
- 男性では「活かすことができるまでの段階に達していない」が24.9%で最も多く、次いで「身近に学んだことを活かす機会が見つけれない」が24.6%で続く。
- 男女間の差をみると、「特に困っている点はない」の他には、「知識・技能や経験を身につけたことを証明するものがない」、「活動に必要な内容と学んだ内容が一致しない」が女性よりも男性の方が多い。
- 「団体では男性の声が優先されるため裁量を発揮できない」、「団体では女性の声が優先されるため裁量を発揮できない」は、男女ともに1割未満と少ない。

図86 性別でみた仕事以外の活動の学びを活かす上でのハードル<sup>20</sup>



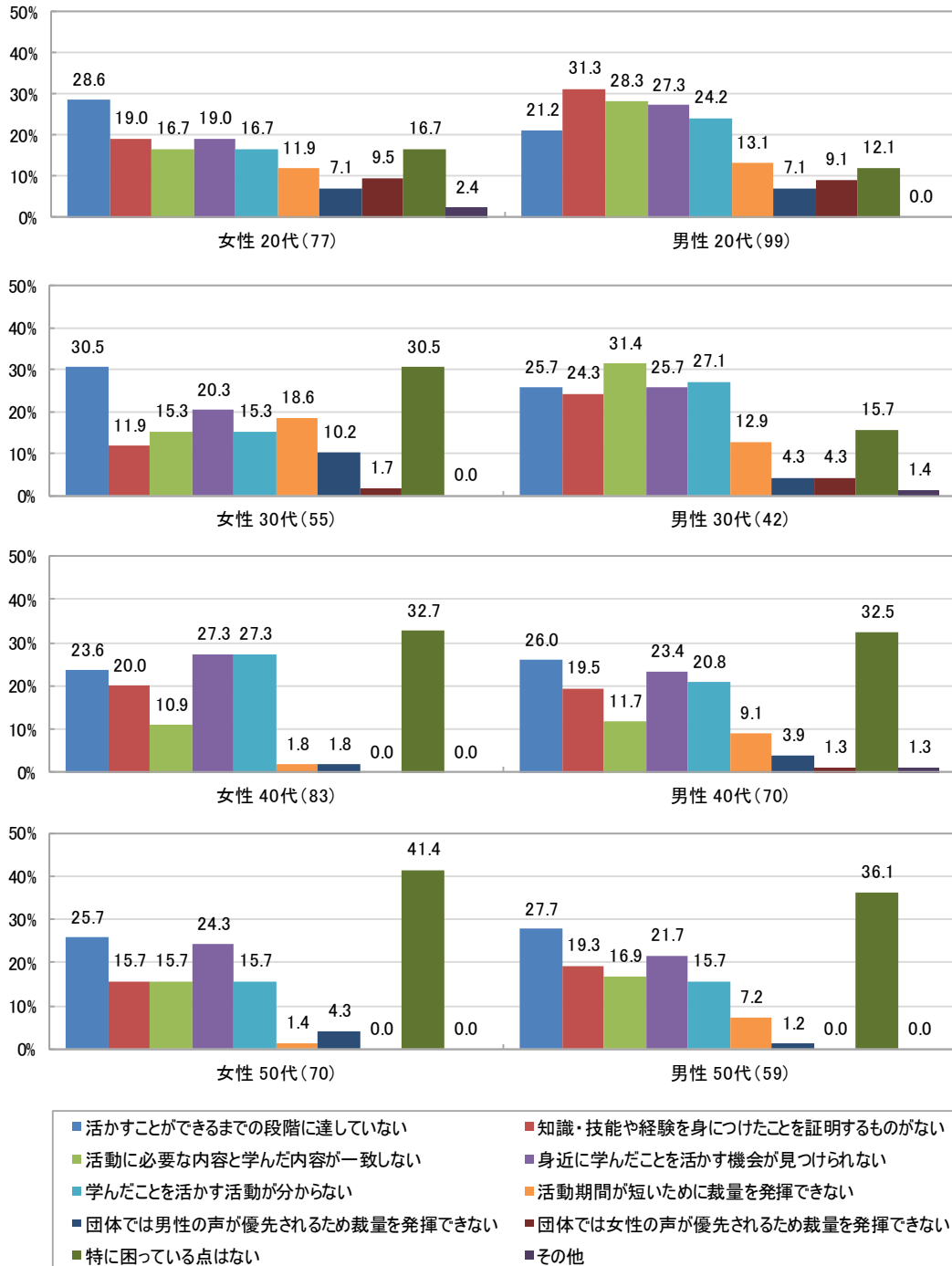
<sup>20</sup> 図表77の選択肢「地域活動や社会貢献活動のために学んだ／学んでいる」を選択した555人が回答している。

○年代別にみると、男女ともに、若い年代ほど「特に困っている点はない」が少ない。女性では30代から多くなり、男性では40代から多くなる。

○女性に関しては、20代・30代で、他の年代に比べて「活かすことができるまでの段階に達していない」が多いことが伺え、それぞれ28.6%、30.5%である。

○男性では、20代・30代で「知識・技能や経験を身につけたことを証明するものがない」が、他の年代に比べて多く、20代で31.3%、30代で24.3%である。

図87 性別・年代別にみた仕事以外の活動の学びを活かす上でのハードル



## v) 仕事以外の活動のための学びのハードル

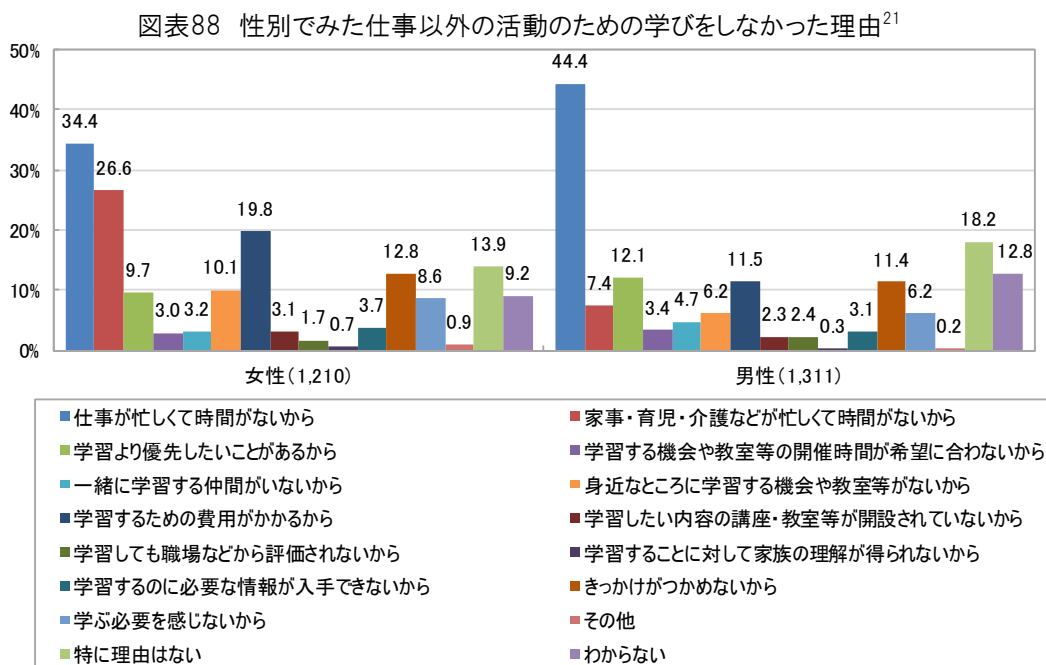
【ポイント】 ■仕事以外の活動のための学びをしなかった理由としては、男女ともに仕事で時間がなかったことが最も多い。

■女性では、男性に比べて、家事・育児・介護等で時間がないことや費用面の理由が多い。家事・育児・介護等で時間がないという理由は特に女性の30代に多い。

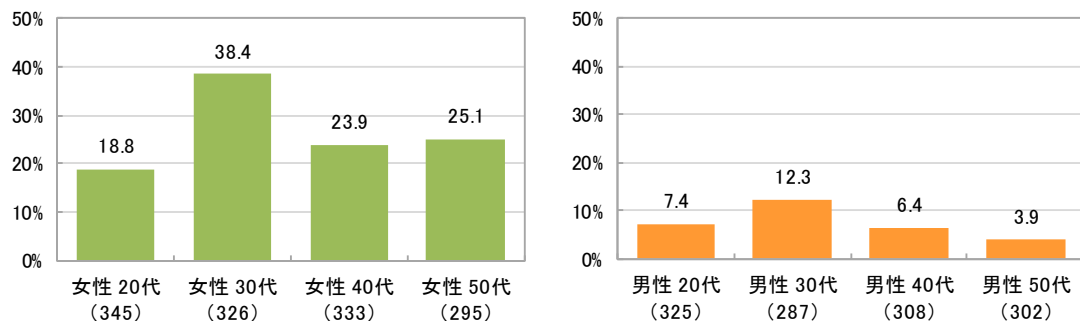
○仕事以外の活動のための学びを行わなかった理由としては、男女ともに「仕事が忙しくて時間がないから」が最も多く、女性で34.4%、男性で44.4%である。

○女性では、男性に比べて「家事・育児・介護などが忙しくて時間がないから」、「学習するための費用がかかるから」が多く、特に前者は女性は26.6%であるのに対して、男性が7.4%である。

○「家事・育児・介護などが忙しくて時間がないから」について性別・年代別にみると、いずれの年代も女性の方が多く、女性では30代で最も多く38.4%である。



図表89 性別・年代別にみた家事・育児・介護等を理由に学ばなかった人の割合



<sup>21</sup> 図表77の選択肢「家庭のために学んだ／学んでいる」、「地域活動や社会貢献活動のために学んだ／学んでいる」、「自分の趣味や興味・関心のために学んだ／学んでいる」、「その他のことを学んだ／学んでいる」を選択しなかった1,210人が回答している。

## 5. ジェンダー意識に関する分析

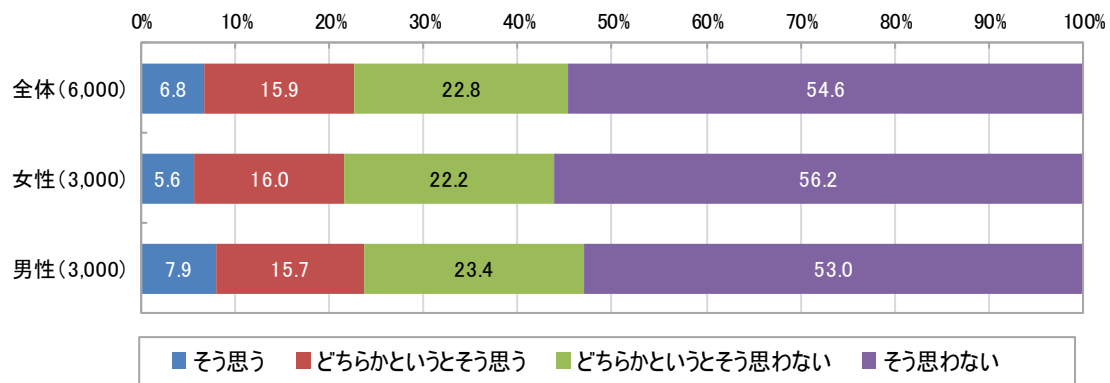
### (1) 性別とジェンダー意識

- 【ポイント】 ■ 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方と女性は育児に専念すべきだという考え方については、男女ともに肯定しない人(「そう思わない」)が5割を上回っている。
- 性別に合った職業があるとする考え方に関しては、男女ともに肯定的でない人(「そう思わない」と「どちらかというと思わない」の合計)の割合が5割を上回っている。女性の方が男性よりも肯定的でない人の割合は多い。
- 望ましい女性のライフコースに関する意識については、男女ともに、結婚・出産を前提としつつ離職しないで働き続けることを望ましいと考える人が多い。

#### 夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方について

○「そう思う」は女性で5.6%、男性で7.9%であり、「そう思わない」が男女ともに5割を上回っている。

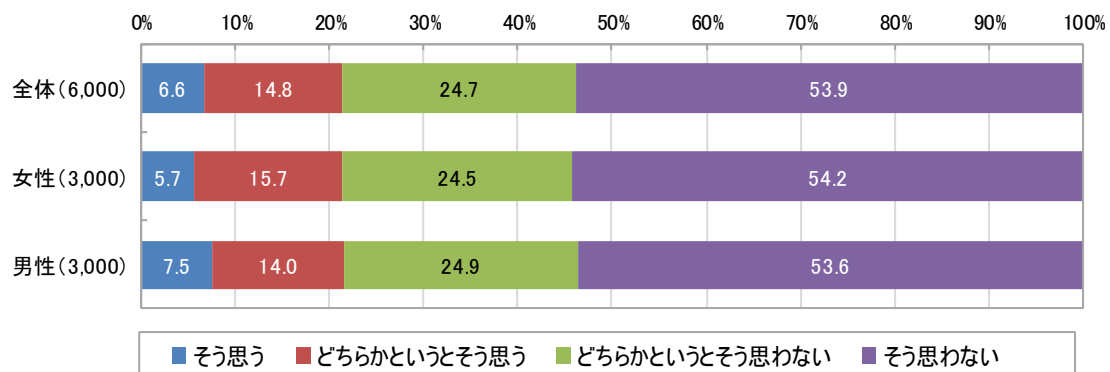
図表90 性別でみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方



#### 女性は育児に専念すべきだという考え方について

○「そう思う」は女性で5.7%、男性で7.5%であり、「そう思わない」が男女ともに5割を上回っている。

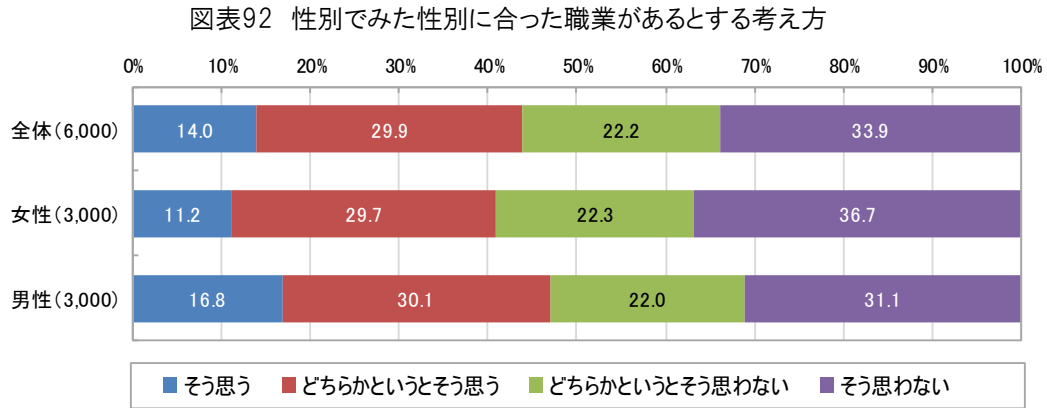
図表91 性別でみた女性は育児に専念すべきだという考え方



## 性別に合った職業があるとする考え方

○「そう思う」は女性で11.2%、男性で16.8%である。「そう思わない」は女性で36.7%、男性で31.1%である。

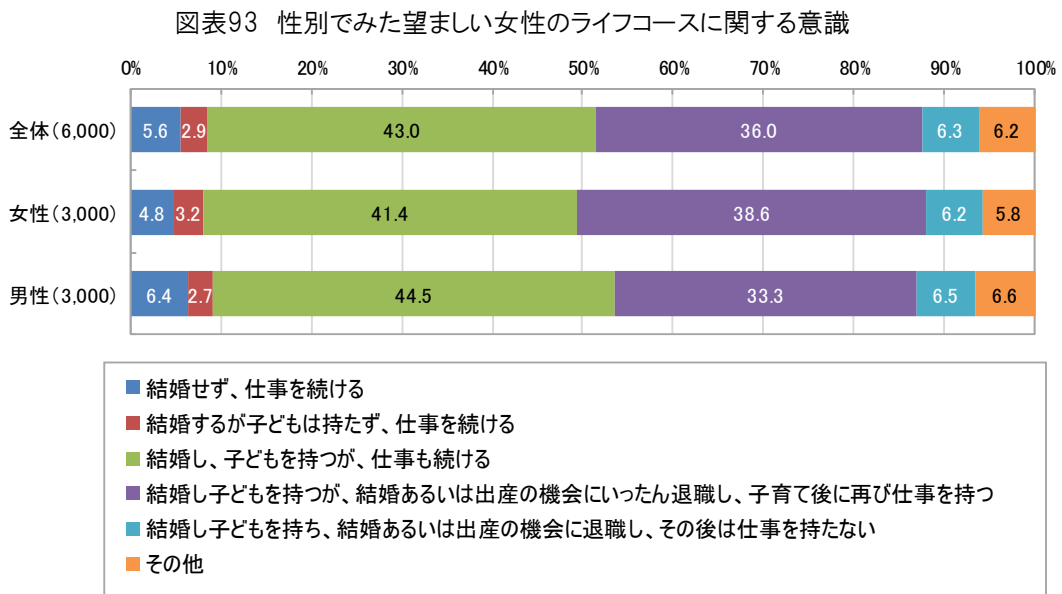
○「そう思う」は男性の方が多く、「そう思わない」は女性の方が多い。



## 望ましい女性のライフコースに関する意識

○男女ともに「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が最も多く、女性で41.4%、男性で44.5%である。

○次いで「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ」が女性で38.6%、男性で33.3%と続く。





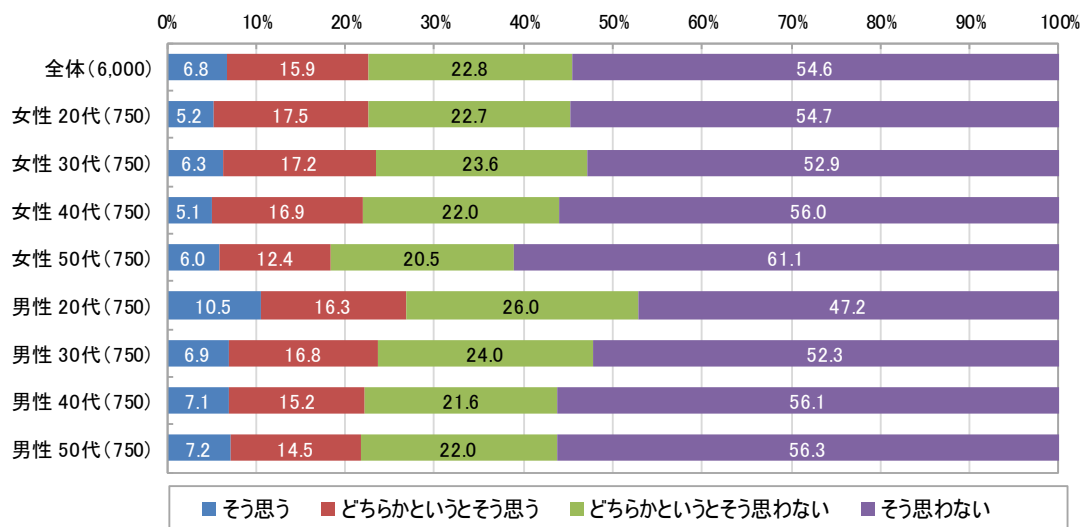
## (2)性別・年代別にみたジェンダー意識

- 【ポイント】**
- 性別・年代別にみると、男性の20代においては夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方を肯定する人(「そう思う」)が約1割で、他の性別・年代に比べてやや多い。また男性の20代では、結婚せずに働き続けることが女性の望ましいライフコースと考える割合も比較的多いことが特徴である。
  - 女性においては若い年代の方が、女性が育児に専念することを肯定する傾向が見られる。

### 性別・年代別にみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方

○男性の20代では「そう思う」が10.5%で、他の性別・年代に比べて多い。また男性では、「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計は若い世代の方が多い。

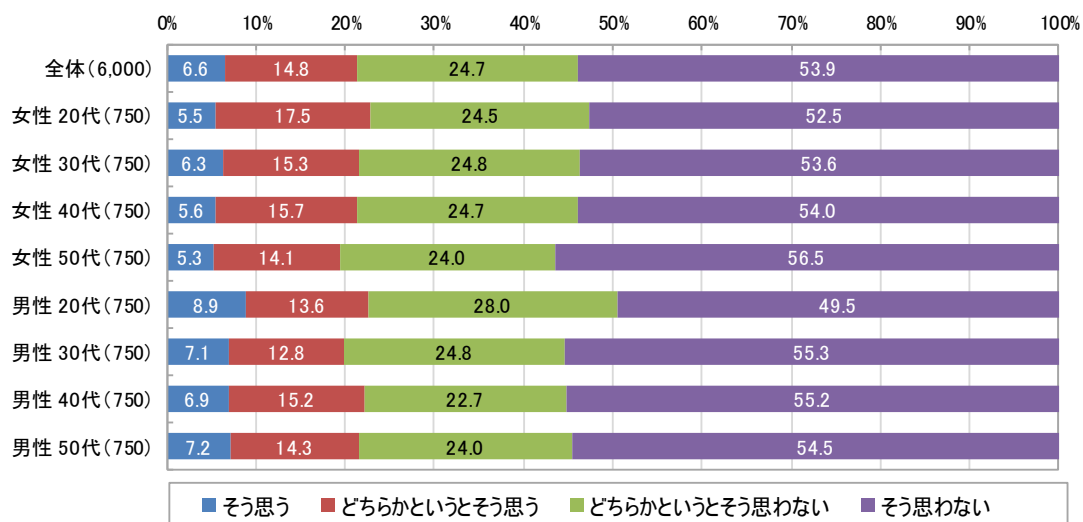
図表94 性別・年代別にみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方



### 性別・年代別にみた女性は育児に専念すべきだという考え方

○性別・年代別にみると、男性では、20代が他の年代に比べて「そう思わない」が少なく、49.5%である。

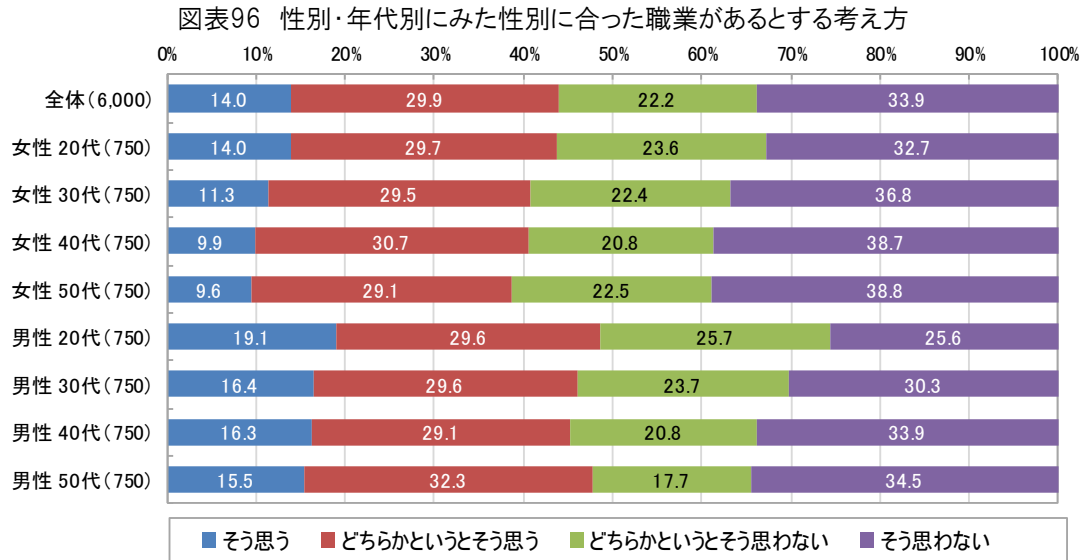
図表95 性別・年代別にみた女性は育児に専念すべきだという考え方



## 性別・年代別にみた性別に合った職業があるとする考え方

○性別・年代別にみると、女性では、若い年代の方が「そう思う」が多く、20代で14.0%であるのに対して、50代では9.6%である。

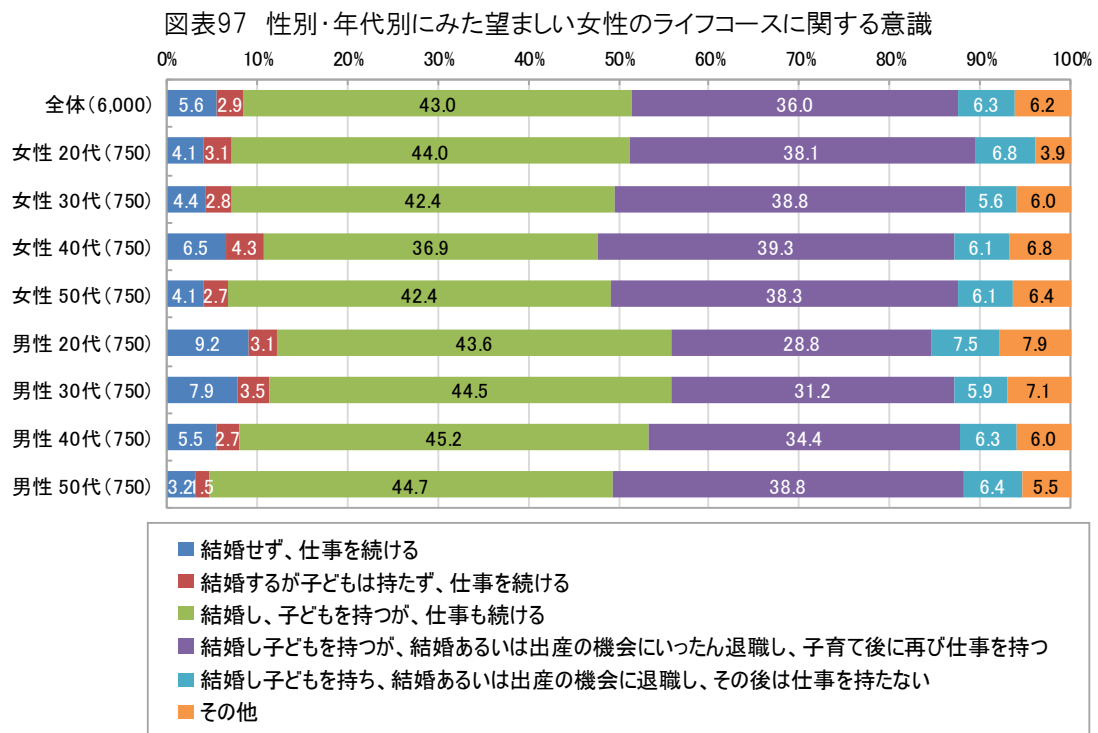
○また、男性の20代で「そう思う」が19.1%で、他の性別・年代に比べて多い。



## 性別・年代別にみた望ましい女性のライフコースに関する意識

○性別・年代別にみると、男性において、若い年代の方が「結婚せず、仕事を続ける」が多く、男性の20代では9.2%である。

○男性では、若い世代の方が「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ」が少ない傾向が見られる。



### (3)母親の就労状況や学歴、地域がジェンダー意識に与える影響

**【ポイント】** ■夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであるという考え方と女性は育児に専念すべきだという考え方については、女性に関しては母親の過去の就労状況との関連性が見られる。女性の望ましいライフコースに関する意識についても、女性に関しては母親が家庭外に働きに出ている場合に、結婚しても働き続けることが望ましいと思う傾向が見られる。

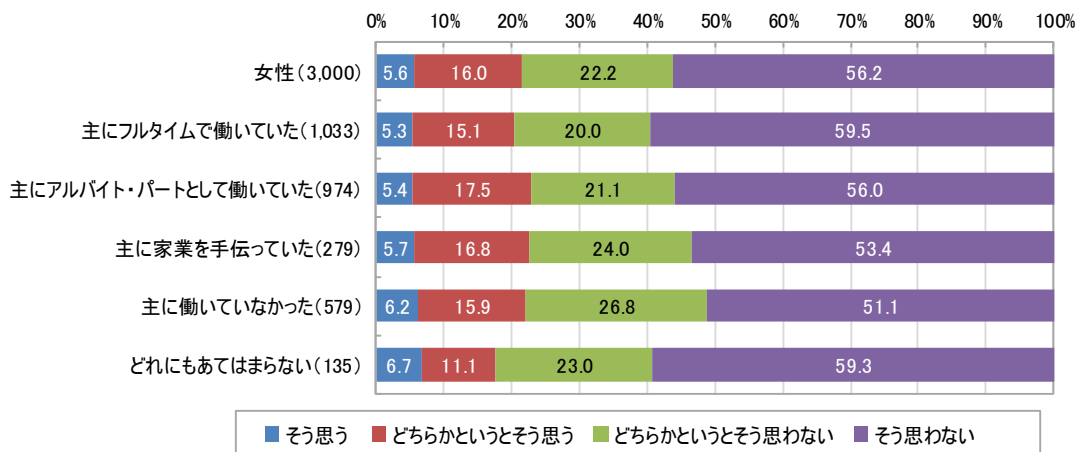
■女性の望ましいライフコースに関する意識について、女性に関しては学歴による違いが見られ、専門学校卒ないしは大卒以上で結婚しても働き続けることが望ましいと思う傾向が見られる。

#### i)母親の就労状況とジェンダー意識の関係

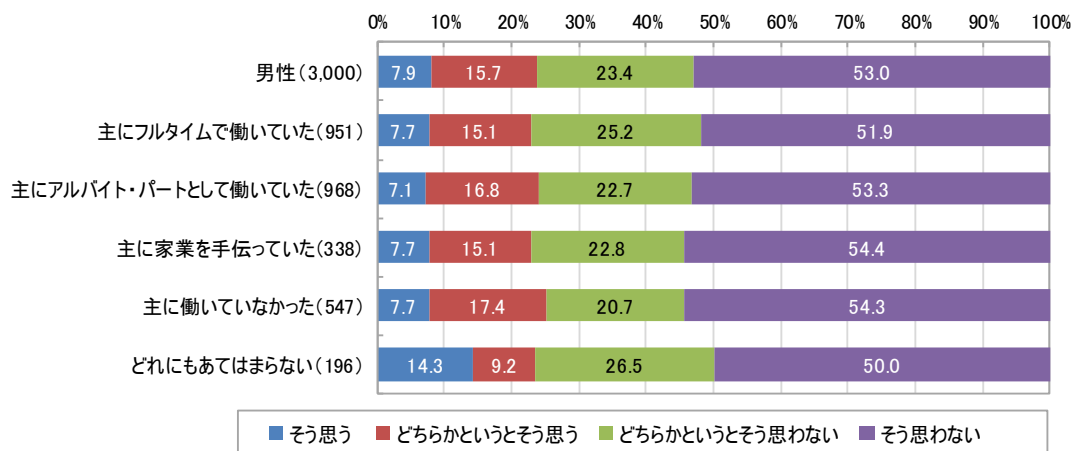
##### 母親の過去の就労状況と夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方の関係

- 女性については、母親が過去に「主にフルタイムで働いていた」場合には、「主に働いていなかった」場合に比べて「そう思わない」が多い。
- 男性については、女性のような違いは見られない。

図表98 母親の就労状況からみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方(女性)



図表99 母親の就労状況からみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方(男性)

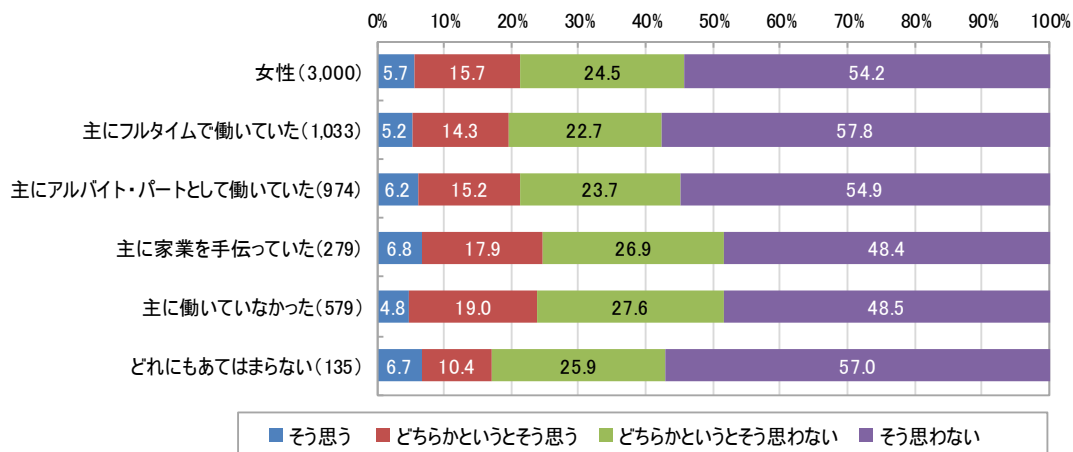


## 母親の過去の就労状況と女性は育児に専念すべきだという考え方の関係

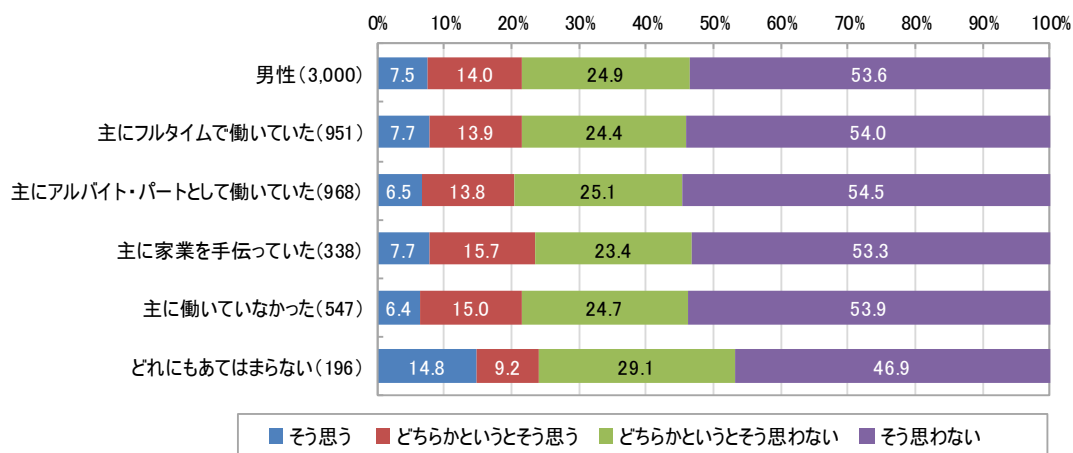
○女性については、母親が過去に「主にフルタイムで働いていた」場合には、「主に働いていなかった」場合に比べて「そう思わない」が多い。

○男性については、女性のような違いは見られない。

図表100 母親の就労状況からみた女性は育児に専念すべきだという考え方(女性)



図表101 母親の就労状況からみた女性は育児に専念すべきだという考え方(男性)

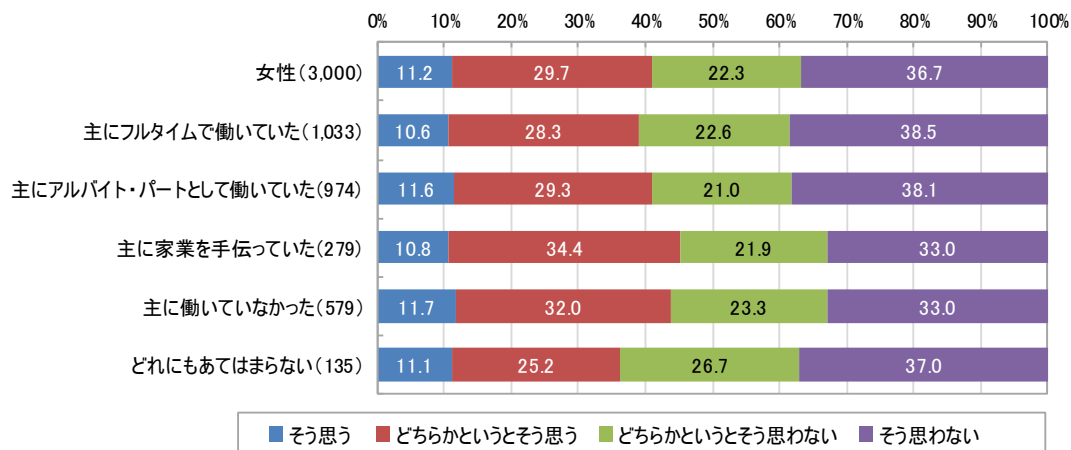


## 母親の過去の就労状況と性別に合った職業があるとする考え方の関係

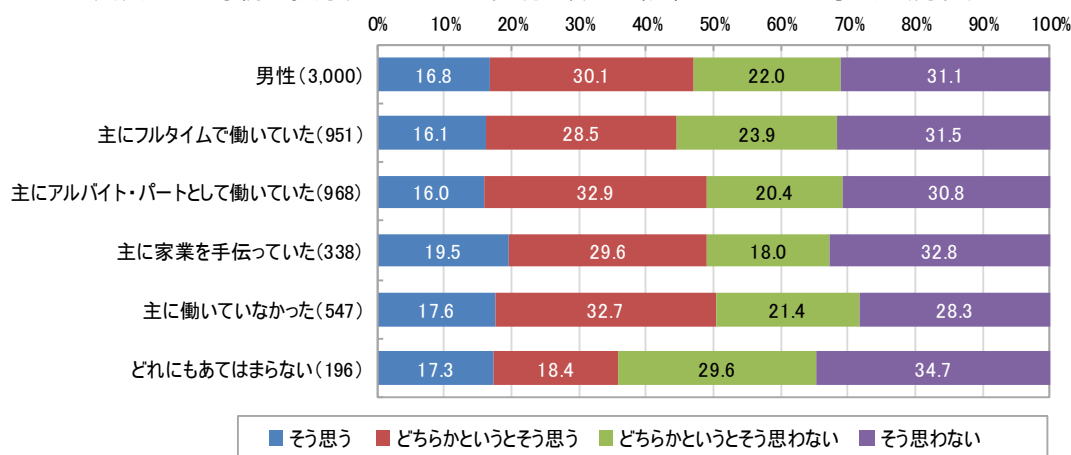
○女性については、母親が過去に「主にフルタイムで働いていた」場合と「主にアルバイト・パートとして働いていた」場合は、「主に働いていなかった」場合に比べて「そう思わない」が多い。

○男性については、女性のような違いは見られない。

図表102 母親の就労状況からみた性別に合った職業があるとする考え方(女性)



図表103 母親の就労状況からみた性別に合った職業があるとする考え方(男性)

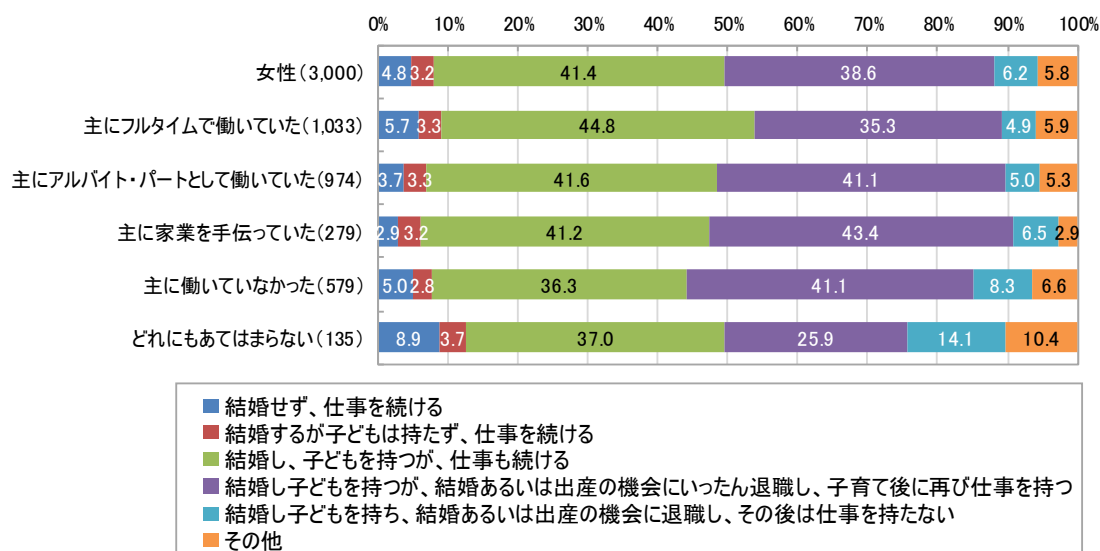


## 母親の過去の就労状況と望ましい女性のライフコースに関する意識の関係

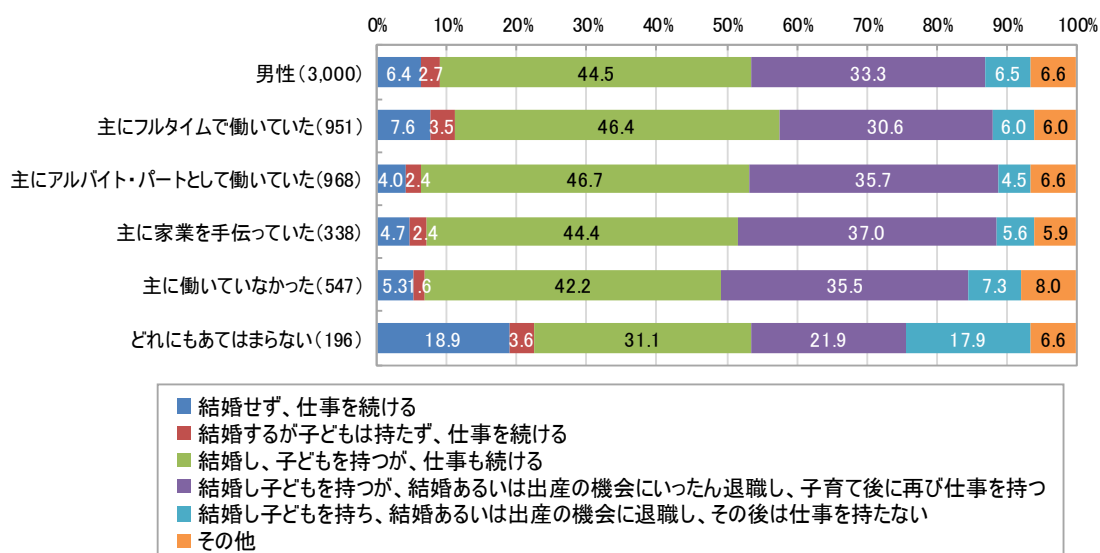
○女性では、母親が過去に「主にフルタイムで働いていた」場合には、「主に働いていなかった」場合に比べて「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が多い。

○また、母親が過去に「主に働いていなかった」場合には、「主にフルタイムで働いていた」、「主にアルバイト・パートとして働いていた」場合に比べて「結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない」が多い。

図表104 母親の就労状況からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(女性)



図表105 母親の就労状況からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(男性)

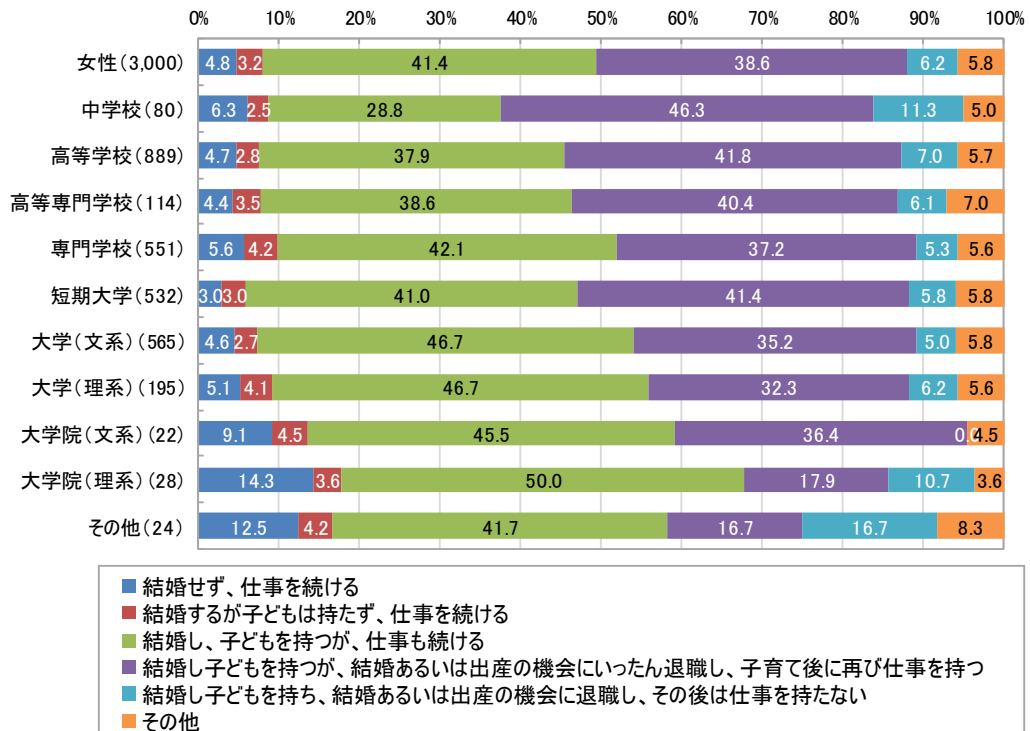


## ii)最終学歴とジェンダー意識の関係

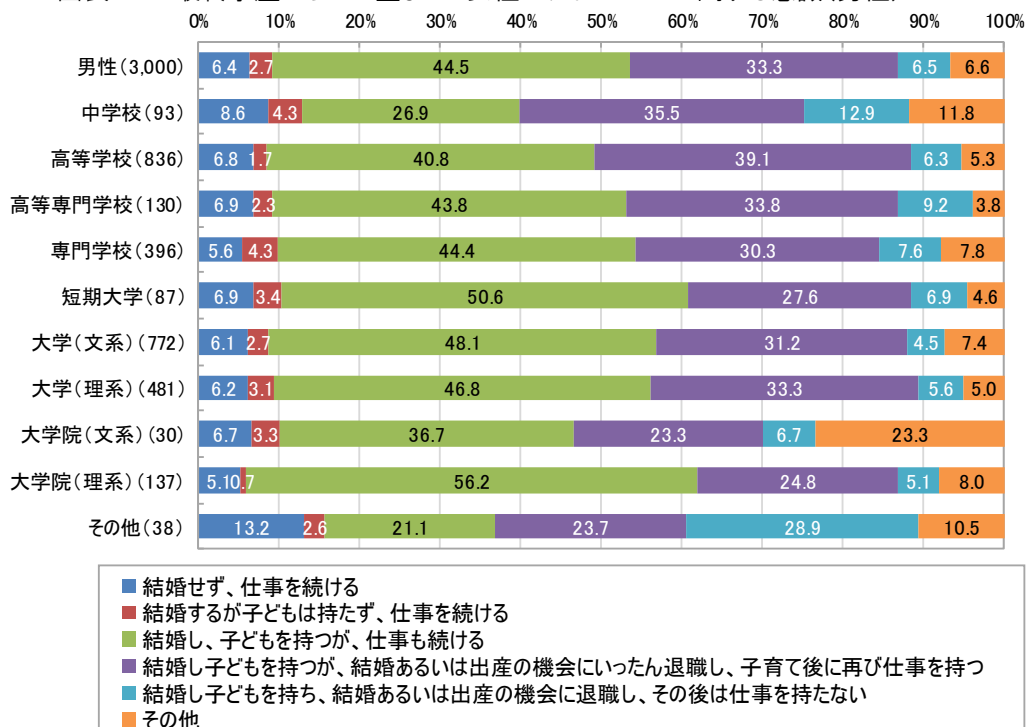
### 最終学歴と望ましい女性のライフコースに関する意識の関係

○女性については、「専門学校」及び大卒以上である場合は、「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が最も多い。その他の学歴である場合は「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ」が最も多い。

図表106 最終学歴からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(女性)



図表107 最終学歴からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(男性)



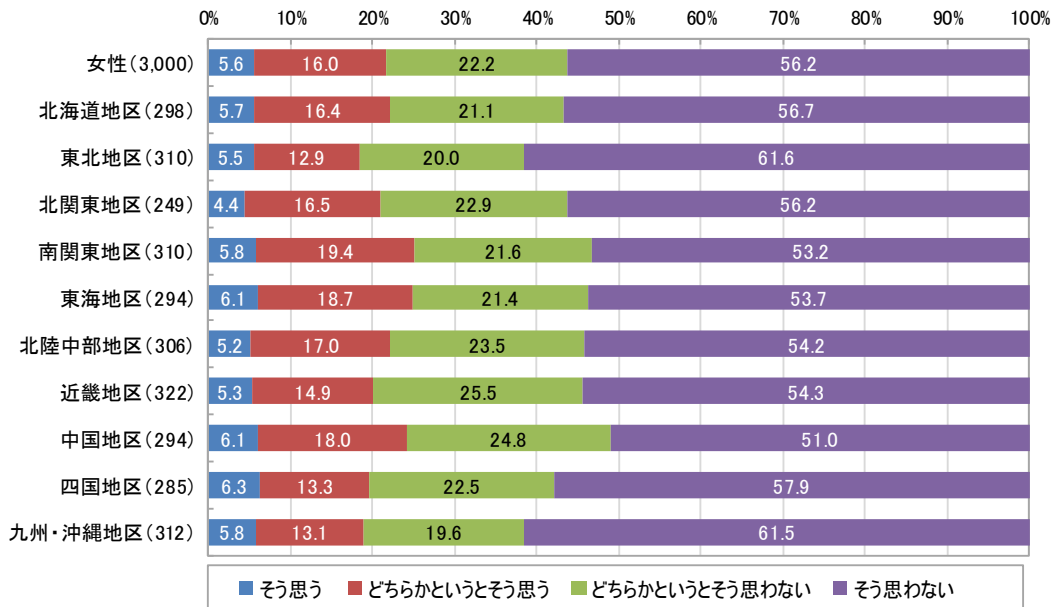
### iii) 生育地区とジェンダー意識の関係

#### 生育地区と夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方

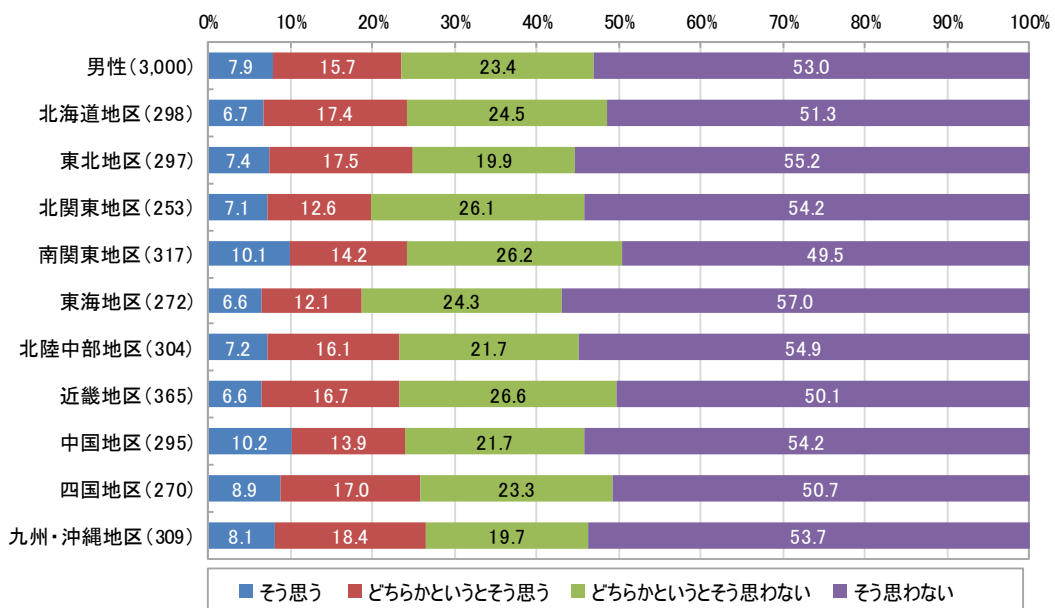
○生育地区に関わらず、男女ともに「そう思わない」が最も多く、「南関東地区」の男性以外は5割を上回っている。

○女性に関しては、「東北地区」で「そう思わない」が61.6%と最も多く、「九州・沖縄地区」が61.5%で続く。男性で6割を上回る地区は見られない。

図表108 生育地区からみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方(女性)



図表109 生育地区からみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方(男性)





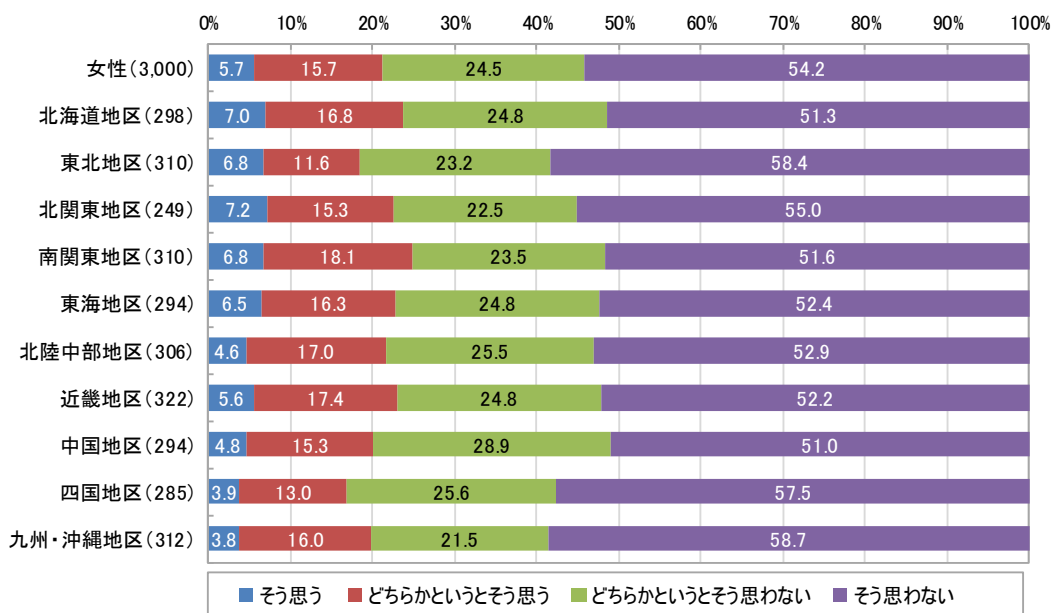
## 生育地区と女性は育児に専念すべきだという考え方の関係

○生育地区に関わらず、男女ともに「そう思わない」が最も多く、かつ5割を上回っている。

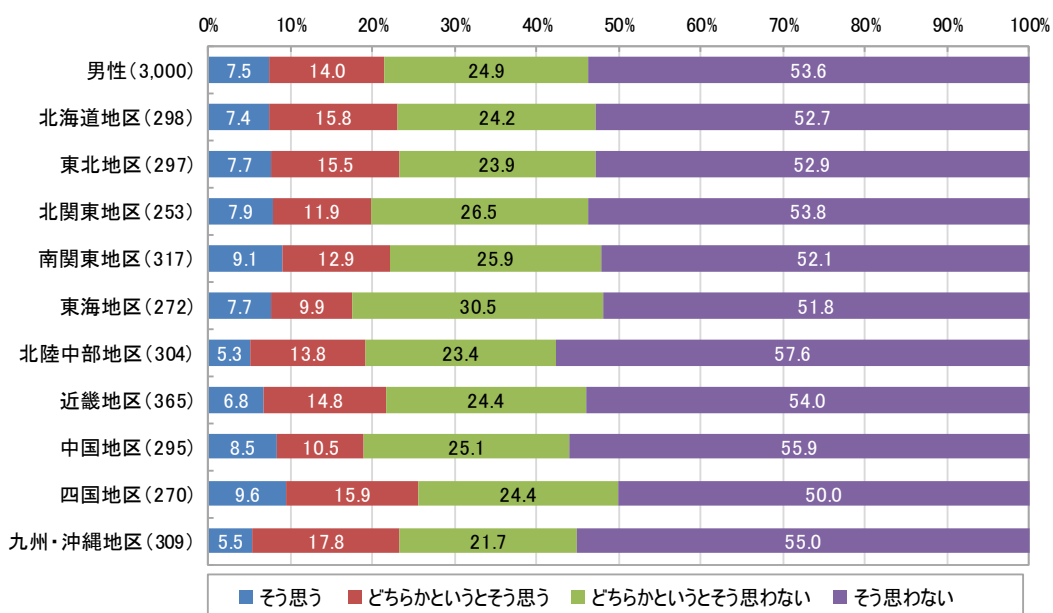
○女性に関しては「九州・沖縄地区」で「そう思わない」が58.7%と最も多く、「東北地区」が58.4%、「四国地区」が57.5%で続く。

○男性では「北陸中部地区」で「そう思わない」が57.6%と最も多く、「中国地区」が55.9%、「九州・沖縄地区」が55.0%で続く。

図表110 生育地区からみた女性は育児に専念すべきだという考え方(女性)



図表111 生育地区からみた女性は育児に専念すべきだという考え方(男性)

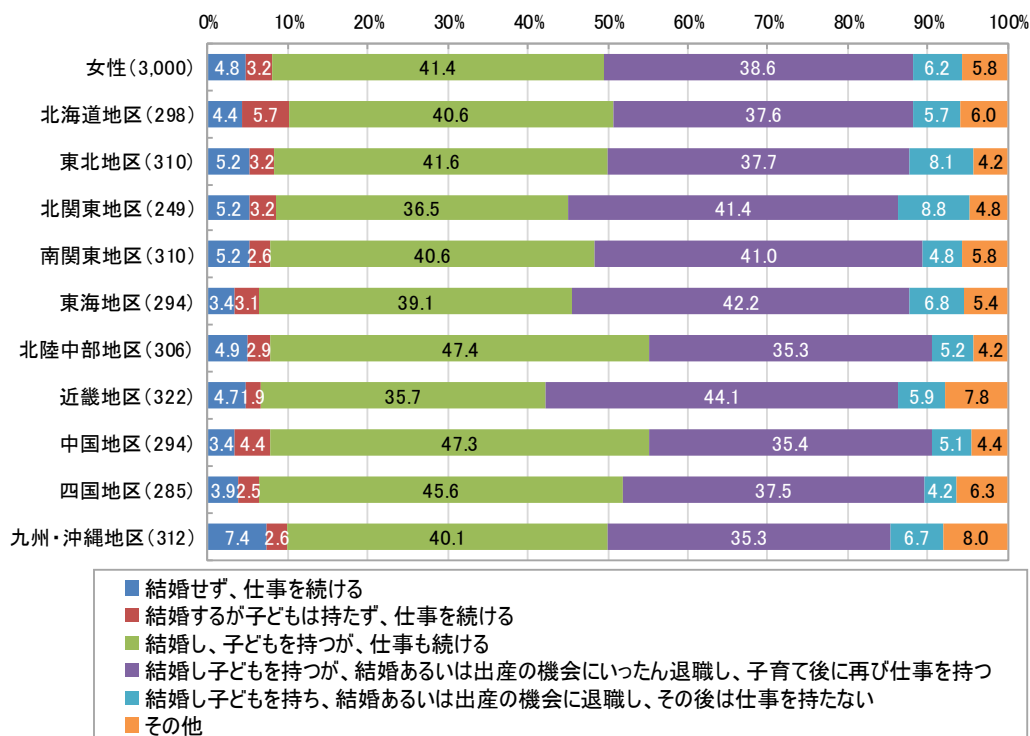


## 生育地区と望ましい女性のライフコースに関する意識の関係

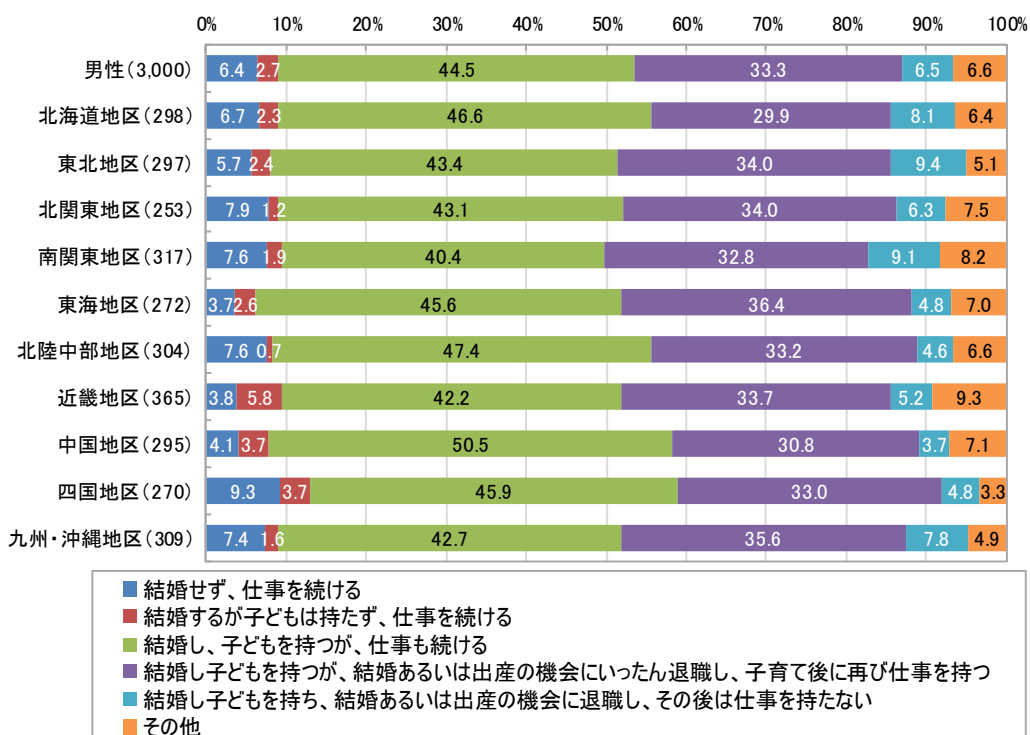
○女性では、「北関東地区」、「南関東地区」、「東海地区」、「近畿地区」では「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ」が最も多く、その他の地区は「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が最も多い。

○男性では、生育地区に関わらず「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が最も多い。

図表112 生育地区からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(女性)



図表113 生育地区からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(男性)



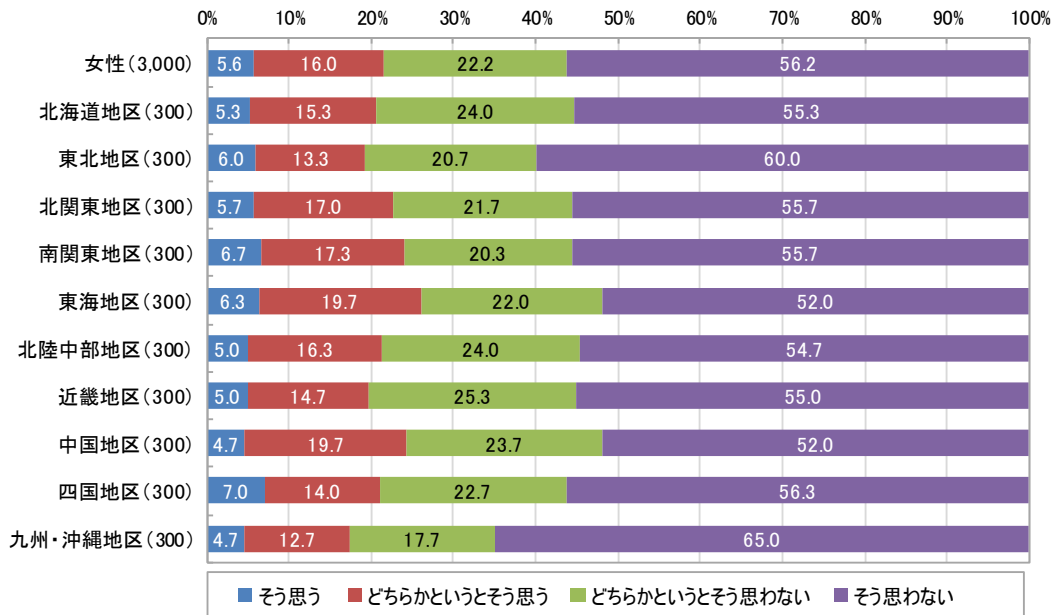
#### iv) 居住地区とジェンダー意識の関係

##### 居住地区と夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方の関係

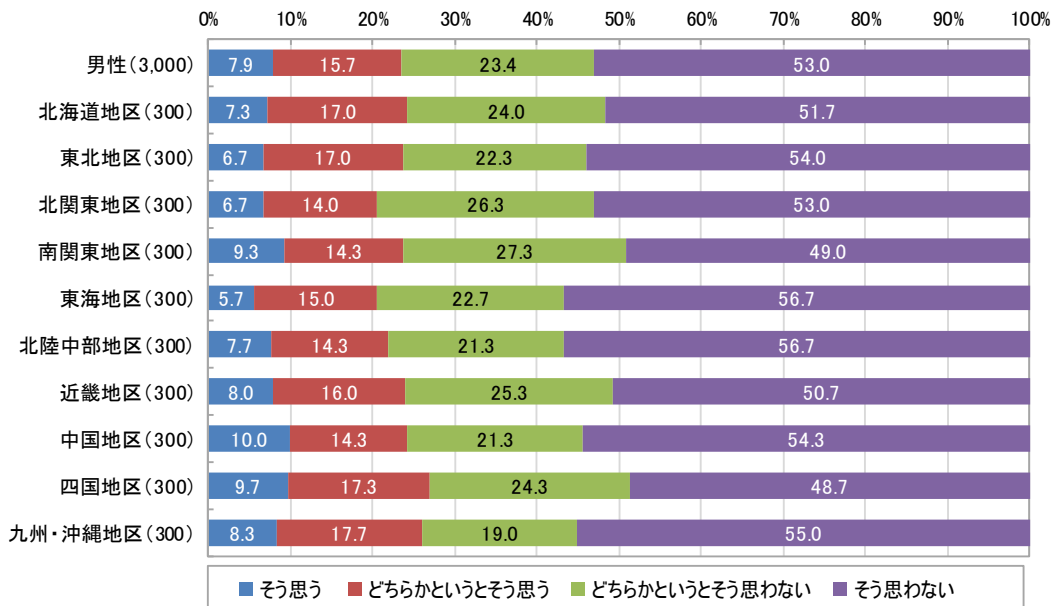
○現在の居住地区に関わらず、男女ともに「そう思わない」が最も多い。

○女性に関しては、「九州・沖縄地区」で「そう思わない」が65.0%と最も多く、「東北地区」が60.0%で続く、男性で6割を上回る地区は見られない。

図表114 居住地区からみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方(女性)



図表115 居住地区からみた夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだという考え方(男性)

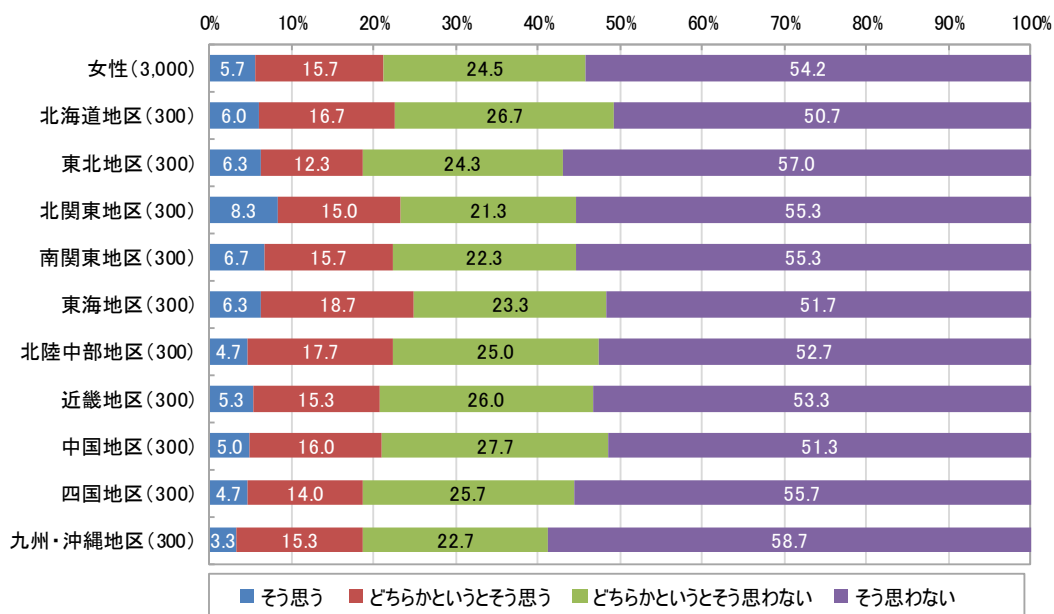


## 居住地区と女性は育児に専念すべきだという考え方の関係

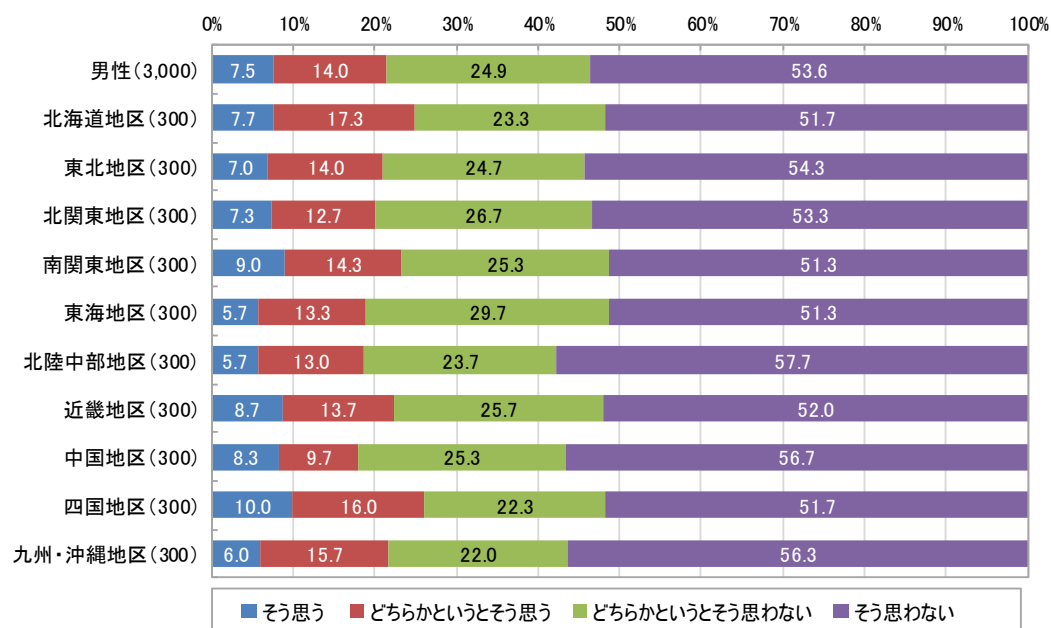
○居住地区に関わらず、男女ともに「そう思わない」が最も多く、かつ5割を上回っている。

○女性に関しては、「九州・沖縄地区」で「そう思わない」が58.7%と最も多く、「東北地区」が57.0%、「四国地区」が55.7%で続く。男性では「北陸中部地区」が57.7%で最も多く、「中国地区」が56.7%、「九州・沖縄地区」が56.3%で続く。

図表116 居住地区からみた女性は育児に専念すべきだという考え方(女性)



図表117 居住地区からみた女性は育児に専念すべきだという考え方(男性)

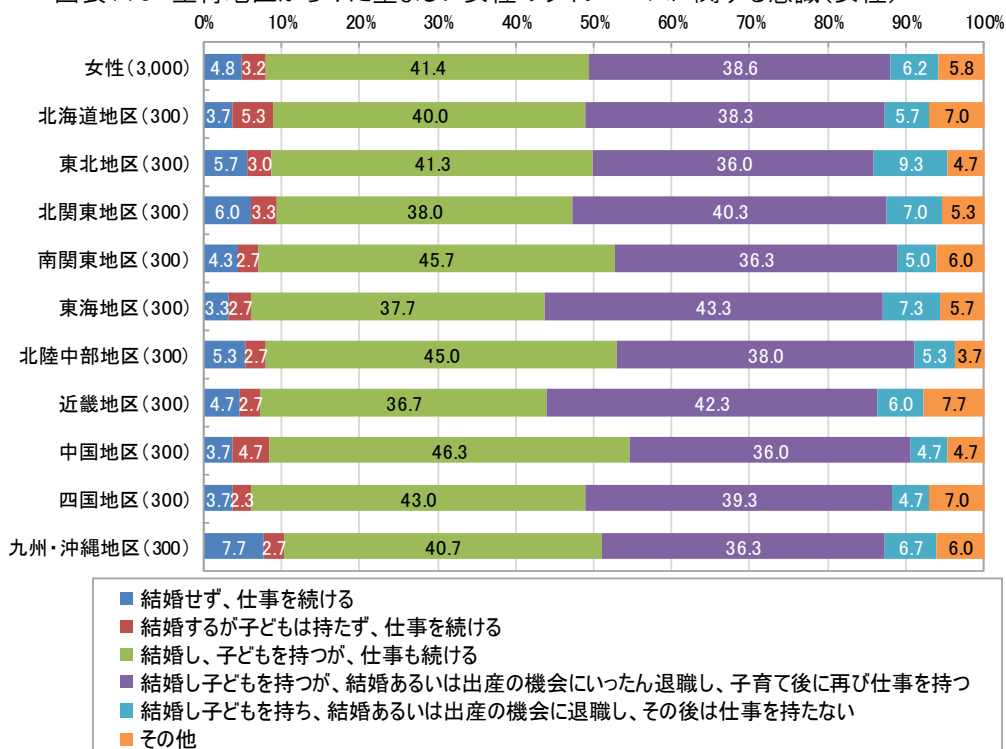


## 居住地区と望ましい女性のライフコースに関する意識の関係

○女性では、「北関東地区」、「東海地区」、「近畿地区」では「結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ」が最も多く、その他の地区は「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が最も多い。

○男性では、居住地区に関わらず「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」が最も多い。

図表118 生育地区からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(女性)



図表119 生育地区からみた望ましい女性のライフコースに関する意識(男性)

